

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 31

平成26年度発掘調査報告

(第1分冊)

覚園寺旧境内遺跡

高德院周辺遺跡

由比ガ浜中世集団墓地遺跡

大 楽 寺 跡

長谷小路周辺遺跡

平成27年3月

鎌倉市教育委員会

ご あ い さ つ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和 59 年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ 6 割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成 17～23 年度及び平成 26 年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した、個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査と資料整理の成果として 14 地点の調査記録を掲載しています。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成 27 年 3 月 31 日
鎌倉市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成 26 年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書（第 1 分冊及び第 2 分冊）である。
- 2 本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・別図のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。ただし、報告 12 は株式会社博通が、報告 13 は有限会社鎌倉遺跡調査会が現地調査及び出土資料の整理を行った。
- 4 出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

総目次

(第1分冊)

ごあいさつ	I
例言	II
目次	III
本誌掲載の平成17～23・26年度発掘調査地点一覧	VI
平成26年度調査の概観	VII
調査地点位置図	IX
1 覚園寺旧境内遺跡 (No.435) 二階堂字会下351番2外地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	6
第二章 調査の概要	11
第三章 検出遺構と出土遺物	15
第四章 まとめ	67
2 高德院周辺遺跡 (No.327) 長谷五丁目337番7地点、337番15地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	94
第二章 調査の概要	98
第三章 検出遺構と出土遺物	102
第四章 まとめ	141
3 由比ガ浜中世集団墓地遺跡 (No.372) 由比ガ浜二丁目1014番57地点	
第一章 調査の概要	169
第二章 発見した遺構と遺物	176
第三章 まとめ	190
4 大楽寺跡 (No.262) 浄明寺四丁目181番12外地点	
第一章 調査地点概観	205
第二章 調査の概略	212
第三章 調査結果	214
第四章 まとめ	242

5 長谷小路周辺遺跡 (No. 236) 由比ガ浜三丁目206番6外地点

第一章 本調査地点の位置と歴史的環境	258
第二章 調査の概要	262
第三章 発見された遺構と遺物	266
第四章 まとめ	344

(第2分冊)

例言	II
目次	III

6 佐助ヶ谷遺跡 (No. 203) 佐助二丁目667番3外地点

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	4
第二章 調査の概要	8
第三章 検出遺構と出土遺物	11
第四章 まとめ	15

7 極楽寺旧境内遺跡 (No. 291) 極楽寺三丁目330番6地点

第一章 調査地点の位置と歴史的環境	22
第二章 調査の経過と概要	22
第三章 検出された遺構と遺物	25
第四章 まとめ	28

8 北条小町邸跡 (No. 282) 雪ノ下一丁目427番2外地点

第一章 遺跡と調査地点の概観	41
第二章 調査の概略	52
第三章 調査結果	54
第四章 まとめと考察	96

9 弁ヶ谷遺跡 (No. 249) 材木座六丁目640番2・3地点

第一章 調査地点の概観	121
第二章 調査の概要	128
第三章 検出された遺構と出土遺物	133
第四章 まとめと考察	179

10 大倉幕府跡 (No.253) 雪ノ下三丁目693番8地点

第一章	遺跡の位置と歴史的環境	213
第二章	調査の方法と経過	216
第三章	基本土層	217
第四章	発見された遺構と遺物	220
第五章	調査成果のまとめ	255

11 若宮大路周辺遺跡群 (No. 242) 小町一丁目333番15地点

第一章	遺跡の位置と歴史的環境	305
第二章	調査の方法と経過	307
第三章	基本土層	308
第四章	発見された遺構と遺物	309
第五章	調査成果のまとめ	325

12 横小路周辺遺跡 (No. 259) 二階堂字荏柄939番10地点

第一章	調査に至る経緯	352
第二章	遺跡概観	353
第三章	調査の経過と方法	355
第四章	堆積土層	357
第五章	発見された遺構と遺物	358
第六章	まとめ	372

13 大慶寺旧境内遺跡 (No. 361) 寺分一丁目939番1の一部地点

第一章	調査地点概観	384
第二章	検出した遺構と遺物	388
第三章	まとめと考察	398

本誌掲載の平成17～23・26年度発掘調査地点一覧

第1分冊

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
1 ▲	覚園寺旧境内遺跡 (N0,435)	二階堂字会下351番2外	個人専用住宅 (杭基礎)	都市	46.75	平成17年12月5日 ～平成18年3月2日
2 □	高德院周辺遺跡 (N0,327)	長谷五丁目337番7 長谷五丁目337番15	個人専用住宅 (杭基礎)	都市	39.00	平成18年4月17日 ～平成18年6月16日 平成18年6月28日 ～平成18年9月11日
3 □	由比ガ浜中世集団墓地遺跡 (N0,372)	由比ガ浜二丁目1014番57	個人専用住宅 (地下室)	都市	49.50	平成18年6月28日 ～平成18年8月7日
4 ●	大楽寺跡 (N0,262)	浄明寺四丁目181番12外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	社寺	45.00	平成19年5月7日 ～平成19年6月29日
5 △	長谷小路周辺遺跡 (N0,236)	由比ガ浜三丁目206番6外	自己用店舗併用住宅 (地盤の表層改良)	都市	99.00	平成20年5月8日 ～平成20年7月22日

第2分冊

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
6 □	佐助ヶ谷遺跡 (N0,203)	佐助二丁目667番3外	個人専用住宅 (杭基礎)	都市	33.00	平成18年5月17日 ～平成18年7月3日
7 □	極楽寺旧境内遺跡 (N0,291)	極楽寺三丁目330番6	個人専用住宅 (車庫の築造)	社寺	14.00	平成19年2月5日 ～平成19年2月21日
8 ●	北条小町邸跡 (N0,282)	雪ノ下一丁目427番2外	個人専用住宅 (杭基礎)	城館	51.00	平成19年6月25日 ～平成19年8月23日
9 ■	弁ヶ谷遺跡 (N0,249)	材木座六丁目640番2・3	個人専用住宅 (擁壁築造)	城館	49.50	平成21年6月15日 ～平成21年8月28日
10 ■	大倉幕府跡 (N0,253)	雪ノ下三丁目693番8	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	官衙	33.00	平成21年9月14日 ～平成21年11月20日
11 ▽	若宮大路周辺遺跡群 (N0,242)	小町一丁目333番15	個人専用住宅 (杭基礎)	都市	25.00	平成22年6月9日 ～平成22年7月23日
12 ◆	横小路周辺遺跡 (N0,259)	二階堂字荏柄939番10	個人専用住宅 (杭基礎)	城館	40.00	平成23年7月29日 ～平成23年8月17日
13 ◎	大慶寺旧境内遺跡 (No.361)	寺分一丁目939番1の一部	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	社寺	60.00	平成26年5月26日 ～平成26年6月25日

▲印は平成17年度実施の発掘調査

□印は平成18年度実施の発掘調査

●印は平成19年度実施の発掘調査

△印は平成20年度実施の発掘調査

■印は平成21年度実施の発掘調査

▽印は平成22年度実施の発掘調査

◆印は平成23年度実施の発掘調査

◎印は平成26年度実施の発掘調査

平成26年度調査の概観

平成26年度の緊急調査実施件数は、前年度からの継続調査1件を含む4件であり、調査面積は225.0㎡であった。これを前年度の7件、499.8㎡と比較してみると件数は3件の減少となり、調査面積は274.8㎡の減少となった。1件の調査面積は平均で56.25㎡（前年度は71.4㎡）であり、1件あたりの面積は前年度よりも減少している。

調査原因は4件ともに個人専用住宅の建設である。これらの工種別内訳は、鋼管杭打ち工事が1件（20%）、地盤改良工事が4件（80%）となっている。今年度も地盤改良工事や鋼管杭打ち工事が発掘調査の主体的な原因になっている傾向が顕著である。以下、各地点の調査成果の概要を紹介する。（調査面積及び調査期間等については「平成26年度調査地点一覧」を参照。）

1 今小路西遺跡（No.201）

由比ガ浜一丁目に位置する。鎌倉市中央図書館の西南にあたる。地盤の柱状改良工事を行う個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。調査の結果、13世紀後半から14世紀にかけての6時期に亘る生活面が確認でき、溝状遺構、土坑、柱穴、木組み遺構を検出した。木組遺構は板を方形に組み、内側を杭で補強しているが、用途は不明である。出土遺物にはかわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、瓦、温石、硯、獣骨、木製品等がある。少数ながら中世以前の遺物も出土している。

2 今小路西遺跡（No.201）

由比ガ浜一丁目に位置する。鎌倉市中央図書館の西南にあたり、上記調査地点1の西側隣接地である。地盤の柱状改良工事を行う個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。調査の結果、13世紀後半から14世紀にかけての7時期に亘る生活面が確認でき、道路状遺構、溝状遺構、土坑、柱穴を検出した。出土遺物にはかわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、瓦、木製品等がある。

3 若宮大路周辺遺跡群（No.242）

小町一丁目に所在し、鎌倉駅から東へ約200mに位置している。地盤の柱状改良工事を行う個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。調査の結果、13世紀から14世紀の方形竪穴建物、土坑、柱穴、かわらけ溜まり、溝状土坑を検出した。方形竪穴建物の床や壁を構築していた石材が良好に残っていた。舶載陶磁器、国産陶器、木製品等の遺物が出土している。

4 台山遺跡（No.233）

市内北部の台字西ノ台に所在し、北鎌倉駅から北西へ約500mの台地上に位置する遺跡である。鋼管杭打ち工事を行う個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。調査の結果、後世の削平を受けながらも古墳時代末頃（7世紀前半から中葉）の竪穴住居とピットを検出した。竪穴住居にはカマドが設けられていた。土師器坏、甕等が出土している。台地上に展開した集落の一部と考えられる。

平成26年度発掘調査地点一覧

	遺 跡 名	所 在 地	調 査 原 因	遺跡種別	調査面積	調 査 期 間
1 ★	今小路西遺跡 (No. 201)	由比ガ浜一丁目160番17	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	城館跡	40.00	平成26年1月25日 ～平成26年4月11日
2	今小路西遺跡 (No. 201)	由比ガ浜一丁目160番8・10	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	屋敷跡	60.00	平成26年5月21日 ～平成26年9月19日
3	若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)	小町一丁目324番4	店舗併用住宅 (地盤の柱状改良)	城館跡	67.00	平成26年6月16日 ～平成26年9月19日
4	台山遺跡 (No. 29)	台字西ノ台1418番10	個人専用住宅 (杭基礎)	集落跡	58.50	平成26年8月28日 ～平成26年10月10日

平成26年度の緊急発掘調査地点 (1~4)
 本書掲載の平成17~23・26年度発掘調査地点 (①~⑬)
 ※遺跡名は一覧表を参照

鎌倉市全図



覺園寺旧境内遺跡 (No.435)

二階堂字会下 351 番 2 外地点

例 言

1. 本報は「覚園寺旧境内遺跡 (No.435)」内の一部、二階堂字会下 351 番 2 外地点 (略称 K00522) における個人専用住宅の建設 (基礎工事の地盤柱状改良) に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査期間：平成 17 (2004) 年 12 月 5 日～平成 18 (2005) 年 3 月 2 日 調査面積：53.00㎡
3. 現地調査・整理作業の体制は以下の通りである。

調査担当者：原廣志

調査員：太田美智子・石元道子・柁岡溪音・須佐仁和・小野夏菜・中川建二・平山千絵・橋本和之・松吉里永子・森谷十美

調査協力者：大戸迫 猛・片山 昭・清水光一・堀住 稔 (社団法人シルバー人材センター)

協力機関名：社団法人シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所
4. 整理作業及び本報の作成は以下の分担で行った。

遺物 実測：小野・柁岡・松吉・森谷・原

遺構 墨入：小野

遺物 墨入：柁岡

挿図 作成：原

遺物観察表：平山・原

遺構 写真：須佐・原

遺物 写真：須佐 (撮影)・平山 (版組)

原稿 執筆：第 1～3 章は原が、第 4 章については調査員協議のもと原が稿を草した。
5. 出土遺物、図面・写真などの発掘調査資料は、報告書刊行後に鎌倉市教育委員会が保管している。
6. 本報の凡例は、以下の通りである。

挿図 縮尺：全側図：1/80 遺構図：1/40 1/50 1/60 遺物図：1/3 (銭 1/2)

使用 名称：本書で使用する用語のうち、「土丹 (どたん)」は逗子シルト岩の砂泥岩、「鎌倉石」は逗子市池子層に顕著な粗粒凝灰岩、「伊豆石」は相模川以西の河川・海浜に産す安山岩で礎石などに利用可能な扁平な円礫を指し、それぞれ表記を簡略化したものである。

遺 構 図：遺構の標高は海拔高の数値を示している。

遺 物 図：- - - - は釉薬の範囲を示し、黒塗りは灯明皿に付着した油煙煤を表現している。
7. 本遺跡の現地調査から本報作成に至るまで、以下の方々からご助言とご協力を賜った。記して感謝の意を表したい (敬称略、五十音順)。

秋山哲夫・伊丹まどか・井関文明・大三輪龍哉・押木弘己・金丸義一・河野眞知郎・菊川英政・熊谷 満・後藤 健・古田戸俊一・汐見一夫・新開基史・宗臺秀明・宗臺富貴子・鈴木庸一郎・玉林美男・塚本和宏・中田 英・根本志保・藤澤良祐・松尾宣方・松葉 崇・松吉大樹・馬淵和雄

目 次

本 文 目 次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	6
1. 遺跡の位置と地形	
2. 遺跡の歴史的環境	
第二章 調査の概要	11
1. 調査の経過	
2. 測量軸の設定	
3. 層序	
第三章 検出遺構と出土遺物	15
1. 第1面の遺構・遺物	
2. 第2面の遺構・遺物	
3. 第3面の遺構・遺物	
4. 第4面の遺構・遺物	
5. 第5面の遺構・遺物	
第四章 まとめ	67

挿 図 目 次

図1 調査地点位置図	6	図18 第2面遺構外出土遺物(1)	29
図2 調査地点と周辺遺跡・旧跡	7	図19 第2面遺構外出土遺物(2)	30
図3 覚園寺旧境内絵図	9	図20 第2面遺構外出土遺物(3)	31
図4 国土座標とグリッド配置図	12	図21 第3面遺構全図	32
図5 調査区壁堆積土層	13	図22 第3面建物・土坑・ピット	34
図6 第1面遺構全図	16	図23 第3面遺構出土遺物	35
図7 第1面建物1	17	図24 第3面遺構外出土遺物(1)	36
図8 第1面土坑・溝・ピット	18	図25 第3面遺構外出土遺物(2)	37
図9 第1面遺構出土遺物(1)	19	図26 第4面遺構全図	38
図10 第1面遺構出土遺物(2)	20	図27 第4面建物・土坑・ピット	40
図11 第1面遺構出土遺物(3)	21	図28 第4面遺構出土遺物	41
図12 表土～第1面遺構外出土遺物	22	図29 第4面遺構外出土遺物	42
図13 第2面遺構全図	23	図30 第5面遺構全図	44
図14 第2面建物・土坑	24	図31 第5面土坑・ピット	45
図15 第2面遺構出土遺物(1)	25	図32 第5面遺構出土遺物	46
図16 第2面ピット	27	図33 第5面遺構外出土遺物	46
図17 第2面遺構出土遺物(2)	28	図34 第5面南北トレンチ	47

表 目 次

表 1 遺物観察表 (1) 48	表 11 遺物観察表 (11) 58
表 2 遺物観察表 (2) 49	表 12 遺物観察表 (12) 59
表 3 遺物観察表 (3) 50	表 13 遺物観察表 (13) 60
表 4 遺物観察表 (4) 51	表 14 遺物観察表 (14) 61
表 5 遺物観察表 (5) 52	表 15 遺物観察表 (15) 62
表 6 遺物観察表 (6) 53	表 16 遺物観察表 (16) 63
表 7 遺物観察表 (7) 54	表 17 遺物観察表 (17) 64
表 8 遺物観察表 (8) 55	表 18 遺物観察表 (18) 65
表 9 遺物観察表 (9) 56	表 19 遺物観察表 (19) 66
表 10 遺物観察表 (10) 57	表 20 遺物分類別出土数量比率表 68

図 版 目 次

図版 1 71	図版 5 75
a. 調査地点付近 (南東から)	a. I 区第 4 面全景 (北から)
b. 調査地点西側丘陵裾部 (東から)	b. II 区第 4 面全景 (北から)
c. 調査地点近景 (南から)	c. II 区第 4 面南側 (東から)
図版 2 72	d. 建物 1 板壁検出状況
a. I 区第 1 面全景 (北から)	e. 土坑 1 遺物出土状況
b. II 区第 1 面全景 (北から)	f. 建物 1 遺物出土状況
c. 建物 1 内遺物出土状況	図版 6 76
d. I 区角材検出状況	a. I 区第 5 面全景 (北から)
e. 土坑 1 遺物出土状況	b. II 区第 5 面全景 (北から)
f. P 3・4 上遺物出土状況	c. II 区第 5 面南側域
図版 3 73	d. II 区第 5 面中央 (西から)
a. I 区第 2 面全景 (北から)	e. 土坑 2
b. II 区第 2 面全景 (北から)	f. 第 5 面出土銅製品
c. 第 2 面建物 2、溝 1 (西から)	図版 7 77
d. I 区第 1 面下～第 2 面上炭化物層	a. 第 2 面土坑 2
e. 建物 2 - P 11	b. 第 2 面土坑 2 堆積土層
f. 第 2 面 P 4	c. 第 5 面下トレンチ
図版 4 74	d. 調査区中央堆積土層
a. I 区第 3 面全景 (北から)	図版 8 78
b. II 区第 3 面全景 (北から)	第 1 面遺構出土遺物 (1)
c. II 区第 3 面北側域	図版 9 79
d. II 区第 3 面中央域	第 1 面遺構出土遺物 (2)
e. P 6 礎版出土状況	図版 10 80
f. 漆器椀出土状況	表土・第 1 面遺構外
	第 2 面遺構出土遺物 (1)

図版 11	81	図版 15	85
第 2 面遺構出土遺物 (2)		第 3 面遺構外出土遺物 (2)	
図版 12	82	図版 16	86
第 2 面遺構外出土遺物 (1)		第 4 面遺構出土遺物	
図版 13	83	図版 17	87
第 2 面遺構外出土遺物 (2)		第 4 面遺構・遺構外出土遺物 (1)	
図版 14	84	図版 18	88
第 3 面遺構・遺構外出土遺物 (1)		第 4 面遺構外出土遺物 (2)	
		第 5 面遺構・遺構外出土遺物	

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と地形

覚園寺旧境内遺跡は鎌倉市の東部、二階堂地区にある。調査地点は二階堂字会下 351 番 2 外に所在し、J R 横須賀線鎌倉駅から北東方向へ直線距離で約 1.8km の丘陵端部にあたり、南北位 800 m 前後の細長く延びている薬師堂ヶ谷のほぼ中間地点に位置している。この周辺には二階堂川を中心にして支流の小河川が何本か流れ、それぞれ枝谷を多方向に形成している。薬師堂ヶ谷を開析した中央を流れる平子川もその支流の 1 本であり、急峻な崖面を山腹に形成しながら西北から東南に向って直線的な流れを作り出している。平子川は覚園寺裏山に源を発し、その流域距離は 1 km 程である。谷の出口あたりで谷戸奥（鷲峰山・天台山麓）からきた二階堂川に合流し、南進して詩ノ橋先で滑川へと流れ下っている。谷戸は単一ではなく樹木の枝状に入り組んだいくつもの小支谷を構成した地形を呈しており、谷奥には鷲峰山真言院覚園寺が現在もひっそりとした佇まいをみせている。谷を挟んだ周辺の丘陵岩盤は、第三紀前期鮮新世に堆積した三浦層群に属する逗子シルト岩層（土丹層）で、岩層中には茶色または黄色味がかかった粗砂層や軽石凝灰岩層の帯状の堆積が観察される（上本 2000）。

谷戸の平坦部海拔高は、入口の鎌倉宮社頭前で約 16 m、中程の調査地点付近で 25.5 m 前後、最奥の覚園寺薬師堂近辺で 40 m 前後であり、谷を挟む東西丘陵の頂部は海拔高 70 m 前後を測り、比高差は 40 m を越え、丘陵裾部を造成した急峻な岩盤斜面を形成している。

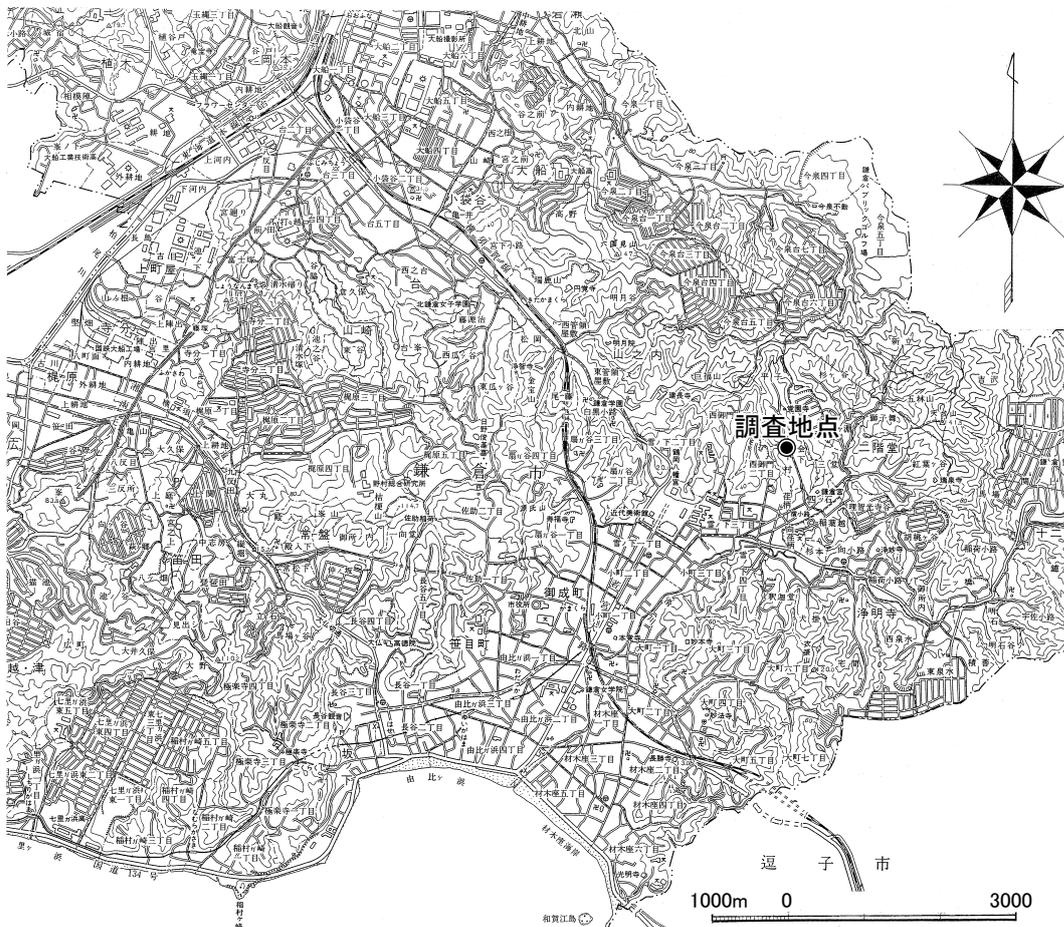


図 1 調査地点位置図

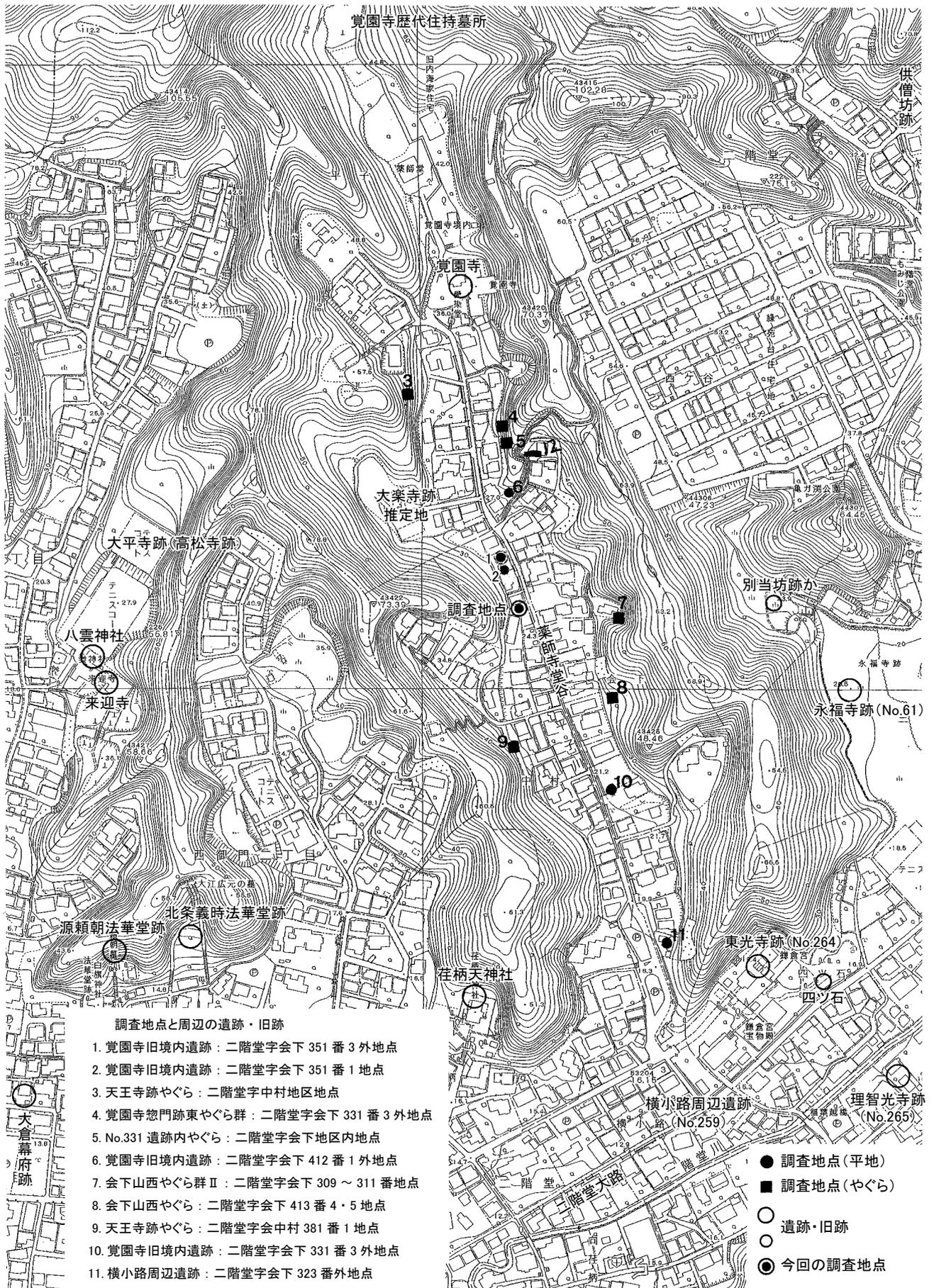


図2 調査地点と周辺の遺跡・旧跡

2. 遺跡の歴史的環境

遺跡名となった覚園寺は、その前身を執権北条義時が建立した大倉薬師堂にあるという。調査地点の所在する谷戸を「薬師堂ヶ谷」というのはそのためであろう。この谷を挟んで東西両丘陵を越えると、東側には「二階堂」（字名三堂や光堂）の地名に由来する永福寺跡、丘陵端部に位置した鎌倉宮の地は旧東光寺、その南側には六浦路から永福寺へ向かう二階堂大路と永福寺惣門を思わず小字名「四つ石」、惣門の西南方支谷には理智光寺の旧跡などが知られている。西側丘陵を越えた西南辺りから六浦路にかけての広坦な場所には鎌倉入府した源頼朝が開いた大倉幕府、それを取り囲むように有力御家人の邸宅も多く営まれ、大倉幕府の北側山裾には源頼朝・北条義時墓所の法華堂跡が立地している。丘陵西端の位置には鎌倉幕府の鬼門鎮守になる荏柄天神社が鎮座し、中世都市鎌倉の草創に係わる中枢を占めていた。

覚園寺は古義真言宗京都泉涌寺派で境内は国史跡となっている。もとは真言・律・禅・浄土の四宗兼学であったが、明治初年廃仏毀釈による法令で兼学が禁止され、本山泉涌寺が古義真言宗の主張をかかげたのに追随して同じ宗派となった。開山は智海心慧、開基は北条貞時、山号は鷲峰山真言院覚園寺である。本寺の前身は建保六年（1218）に執権北条義時が大倉の谷に堂を建て薬師如来像（運慶作）を安置し（渋谷 1973）、導師に行勇（退耕）律師を迎えて供養を行った大倉薬師堂に始まるという。何度かの火災と修理をへた後、永仁四年（1296）に執権北条貞時が元寇の難を排除するため祈願をこめて寺に改め、覚園寺とした。鎌倉時代後期以降は東国における北京律の根本道場として教学活動は大いにふるったという（大森 1991）。鎌倉時代を通して北条氏の厚い外護を受けて興隆し、幕府滅亡後の建武中興に際して後醍醐天皇から国家鎮護・玉体安穩を祈る勅願寺としての命を与えられ、続いて足利氏の祈願所ともなっており、その後は歴代の関東公方に保護され寺勢は維持されていた。創建当初の伽藍堂舎は火災によって多くを失ったが、文和三年（1354）には足利尊氏の援助で仏殿再建されている。この仏殿は元禄年間に鎌倉を襲った震災によって破損したが復興され、その時の古材を用いて縮小規模で再建したのが現薬師堂である。

寺宝の文化財についてみると、本尊の木造薬師如来坐像及び両脇侍の木造日光・月光両菩薩像をはじめ、仏像彫刻の豊富さは良く知られている。薬師堂には木造十二神将立像や、もと理智光寺（廃寺）の本尊木造阿弥陀如来坐像（鞞阿弥陀）があり、旧大楽寺から移築した愛染堂には木造愛染明王坐像、願行上人が大山寺不動明王の雛形として鑄造した鉄造不動明王像がみられ、地藏堂には別名黒地藏さんの名で親しまれている木造地藏菩薩立像が安置されている。この寺の最奥部近くの雛壇状の方形平場には歴代住持の墓所がある。墓所の中央には国指定重要文化財の大型宝篋印塔が二基並び建っており、この廻りを歴代の無縫塔群が囲んでいる。中央 2 基の宝篋印塔は開山智海心慧和尚と二世大燈源智和尚の墓塔で共に高さ 4 m 前後を測る見事な関東形式の作例である。これら 2 基の宝篋印塔は昭和 41 年に解体修理が実施され、その際に開山塔から蔵骨器の古瀬戸黄釉唐草文壺と塔内納置品が出土している（鎌倉国宝館 1978）。覚園寺境内は谷戸奥にひっそりと佇み、鎌倉時代以来守り続けられてきた谷戸型寺院に象徴される森厳な雰囲気は中世鎌倉の仏教都市としての一側面を彷彿とさせる。

永福寺は将軍頼朝が文治五年（1189）奥州合戦で義経・藤原泰衡をはじめ数万の怨霊を鎮魂する目的で建立された将軍家の御願寺であった。平泉中尊寺の二階大堂・大長寿院を模して造られた二階堂、その両脇に阿弥陀堂や薬師堂、三堂の前に池を中心として奇岩怪石を配置した浄土庭園が設けられていた。建久三年（1192）京都三井寺の公顕を導師に永福寺供養が行われ、翌年には導師に権僧正真円を迎え阿弥陀堂供養、さらに建久五年（1194）には前権僧正勝賢を導師として薬師堂供養が行われ三堂が整ったという。応永十二年（1405）の大火炎上の記事があり 15 世紀まで存続していたようである。また承久三年（1209）には民部大夫二階堂（狩野）行光が、鎌倉宮の地に後の東光寺と推測される堂宇を建立したと伝えられる。大楽寺はもと鎌倉浄明寺の胡桃ヶ谷に所在した律院で、開山は願行房憲静であるという。後に覚園寺境内へ移転したが、図 3 は寺蔵の「覚園寺境内絵図」（鎌倉国宝館 1995）には薬師

堂ヶ谷の中程近くで、調査地点先の東側に展開する支谷の場所に簡易な建物が描かれ、大楽寺と註釈されたている。先に述べたように本尊は鉄不動で薬師如来や愛染明王とともに覚園寺愛染堂に安置されている。また現在、厚木市下依智に所在する浅間神社には、もと大楽寺の梵鐘があり、銘文よれば貞和六年(1350)に鑄物師清原宗広による鑄造の梵鐘で、大楽寺は文保元年(1317)に伽藍を興隆したという。なお浅間神社の境内からは鎌倉期と推測される中世瓦類の出土が知られている(赤星・竹澤1990)。

次に薬師堂ヶ谷の発掘調査事例についてみると、覚園寺境内域、同寺旧境内遺跡、横小路周辺遺跡の平坦地で5カ所と、薬師堂ヶ谷周辺のやぐら遺構(石窟)で実施されている(図1参照)。境内の調査では、旧内海家移転用地と薬師堂周囲を主体に何箇所かの調査区が設定され、薬師堂の基壇縁辺と思しき石列、岩盤削平面や鎌倉石切石の礎石が発見されている。それに伴って多量のかわらけをはじめ、鎌倉時代後期所用の「覚園寺」銘を配した鏡・宇瓦(軒丸・軒平瓦)、永福寺Ⅲ期瓦(主に弘安年間修理)と類似した瓦当文様や製作技法の資料が出土している(河野1982)。

覚園寺旧境内地の発掘調査ではまず、本地点の北側に位置する地点1・2である。地点1は境内絵図の「門」の位置の西脇にあたる位置であたり、7時期の生活面が確認されて建物と思しき柱穴の並びが発見された。地点2の遺構群はⅠ面からⅥ面まで6期に大別され、生活面は総面数11枚にも及んでいる。地点1との生活面と遺構の調査成果を合わせて各時代の生活空間を平面的な場として捉えて考察している。このうち地点2のⅢd面検出の掘立柱建物と同一建物の可能性が高い柱列が地点1の第3面から検出されている。報告書によると地点2は13世紀中頃から丘陵山裾の掘削が開始され、発生した岩塊・土で前面の傾斜地を埋め立て造成して平坦地を拡げた谷戸開発の様子が窺えた。その後、繰り返し造成が行われて14世紀前半頃まで住居など人為的な生活空間域が形成されているが、それ以降は徐々に遺構密度が弱くなり15世紀前半頃にはこの場が廃れていったことが想像される。

次にやぐらについて簡単にふれる。覚園寺の裏山一帯から、山号にも由来する鷲峰山(標高127m)にかけて「百八やぐら群」(No.71)が所在しており、やぐら群は180穴近くのにぼる大規模なやぐら群を形成しており、現在までに7群が調査確認されている。さらに尾根伝いに位置した「朱垂木やぐら群」(No.69)は西御門ヶ谷奥の山頂付近に所在し、約20穴から成るやぐら群を展開している。朱垂木の名称はやぐら群中央の主穴の羨道部天井に漆喰塗りした上にベンガラで多数の繁垂木が描かれていることによるもので、これはやぐらが木造法華堂の系譜をひく墳墓窟を示すものと推測される。さらに薬師堂ヶ谷を取り巻く丘陵の崖裾にはやぐらが展開しており、各支谷に小規模ながら数基が群集していることが急傾斜地崩落対策工事に伴う発掘調査によって判明して来ている。この谷戸内には会下及び中村、平子(ひらじ)の字名に分かれている。谷戸の崖裾を含む東側山稜部の会下地区では地点4の覚園寺惣門跡東やぐら(No.444)における平成12・13年度の調査で5基のやぐらを調査と確認保存を実施している(宍戸2001、鈴木・宮坂2002)。平成6年度に調査が実施された地点5ではやぐら1基が発見され、堆積土中から15世紀代のかわらけが出土した(田代・大坪1995b)。この他に地点12には平子やぐら群(No.70)がある。本調査地点東方の崖裾部に位置する会下山西やぐら群では、これまで3回、合計7基のやぐらが調査されている(田代1987、井関2006・2008)。西側山稜部の崖裾に位置した天王寺跡やぐらでは地点3・9の2ヶ所で調査が行われている(田代・大坪1995a、田代・継・大坪1996)。

15世紀中頃以降の成立と推測される図3に掲載した寺蔵の「覚園寺境内図」(三浦1968)がある。そこに描かれた小支谷内には五峰寺跡、天王寺跡、二条院跡、西房跡、平等寺、大楽寺などがあり、境内域には南から門、風呂屋敷、三十番神、地藏堂、薬師本堂、方丈と谷奥に歴代住持墓所の二基石塔・石塔十三基などの文字が見える。これらの位置とやぐらの分布との関連を探ることが今後の課題といえそうである。

第二章 調査の概要

1. 調査の経過

本遺跡は鎌倉市街地北東部、県道金沢鎌倉線（金沢街道）の「分れ路」交差点から北東へ進んだ鎌倉宮社頭を開口部とした薬師堂ヶ谷に位置している。谷戸奥には森巖の雰囲気の中に鷲峰山真言院覚園寺がひっそりと佇んでいる。

今回の発掘調査は、建物の基礎工事に鋼管杭の設置による工事を実施する個人専用住宅の建設計画があったため、工事の実施により掘削深度の関係から埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れのある事が予想された。このために鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が行われた。その結果、現地下 50cm 前後まで現代の客土や水田耕土が確認され、その直下から中世遺物包含層を挟んで深さ 1.5 m 程の間に少なくとも 4 時期の以上の遺構面（生活面）と、それに伴う遺物が出土して具体的な埋蔵文化財の存在することが判明した。これにより当該建築工事の実施による埋蔵文化財への影響が避けられないと判断された。このため事業者との協議を行ったところ、当初の計画に基づき建築工事を実施したいとの意向が示された。そこで文化財保護法に基づく届け出手続きを行い、施工者と調査方法・工程の協議を重ねた結果、平成 17 年 12 月 5 日から約 3 ヶ月の予定で発掘調査を実施する運びとなった。

現地調査は 12 月 5 日に機材搬入し、試掘確認の結果に基づいて遺構面を傷つけないように地表 40cm 程までを重機で除去した後、それ以下を人力により掘り下げての遺構の確認・検出をおこなった。調査面積は 53.00㎡が対象である。調査の結果、掘立柱建物・板壁建物、土坑、井戸、溝、ピットなどにより構成された遺構群が検出された。出土遺物は多量のかかわり始め、貿易・国産陶磁器類、金属・漆・木製品などと共に木製仏像や銅製懸仏鏡板など仏教的な様相の遺物も含まれた 13 世紀後葉～15 世紀前半頃の所産の資料である。調査地は平子川の脇で多量の湧水によって調査区壁崩落の危険があるため、全面調査は現地地表下 2 m まで、それ以下はトレンチで中世基盤層上面まで確認した。平成 18 年 3 月 2 日までの間に必要な記録作業を行い同日に機材撤収して現地調査を終了した。調査の経過については、以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

日 誌 抄

- 12 月 5 日（月） 現地調査を開始。調査区（I 区）を設定、地表下 40cm まで重機により表土掘削を実施。機材搬入とテント設営を行う。
- 6 日（火） 市 4 級基準点を基に測量軸方眼の設定を行い、測量用の海拔高は鎌倉市が設置した 3 級水準点から敷地内に原点レベルを移動。第 1 面の面出し検出作業を開始し、調査区壁直下に排水溝の開削作業を行う。
- 15 日（木） 第 1 面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影及び平面図の作成。第 2 面検出への掘り下げ作業を開始。
- 19 日（月） 第 2 面上に拡がる炭化物層を確認したので写真撮影。
- 26 日（月） 第 2 面の調査終了。全景及び建物・土坑などの個別遺構の写真撮影。平面図の実測開始。
- 1 月 5 日（木） 第 3 面検出に向けての掘り下げと遺構確認を継続。木製地蔵像出土。
- 13 日（金） 第 3 面の調査終了。全景及び建物・溝などの個別遺構の写真撮影。平面図作成。
- 17 日（火） 第 3 面全測図作成後、第 4 面の面出し確認作業を開始。銅製懸仏の鏡板出土。
- 20 日（金） 第 4 面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。平面図の作成。
- 23 日（月） 除雪作業後、第 5 面検出に向けての荒掘り作業を開始。
- 26 日（木） 第 5 面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。平面図及び調査区西壁の土層断面図の作成。

30日(月) II区の調査開始。I区埋戻し後にII区を重機で表土掘削。第1面の遺構確認を開始。

2月7日(火) 第1面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影及び平面図の作成。第2面検出への掘り下げ作業を開始。

10日(月) 第2面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。平面図の実測開始。

15日(水) 第3面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。平面図作成。第4面検出に向けて荒掘り作業を開始。

20日(月) 第4面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。平面図実測終了。第5面検出に向け掘り下げ作業開始。

24日(金) 第5面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。平面図の実測及び調査区西壁の土層断面図の作成。

3月2日(木) 機材撤収し、現地調査終了。

2. 測量軸の設定

調査にあたって使用した測量方眼軸の設定には、図4で示したように調査地点東側の道路面上に鎌倉市道路管理課が設置したW137・W139の市4級基準点(日本測地系第IX座標系)を採用している。この基準点の2点の関係から開放トラバース測量によって算出した測量基準点のE-2杭、E-6杭、

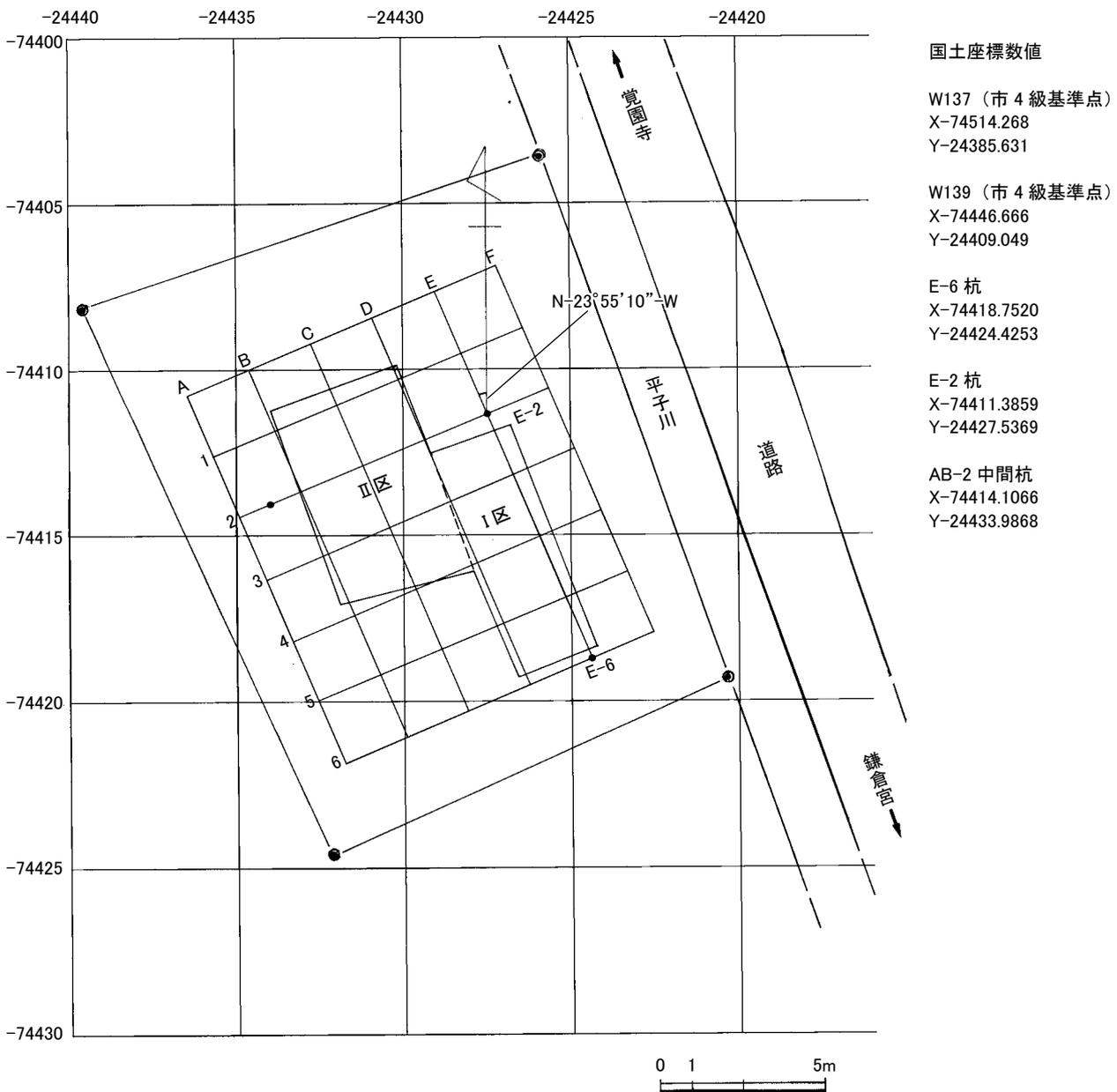


図4 国土座標とグリッド配置図

AB-2 中間杭の位置にそれぞれ設置した。さらに測量方眼軸は東西軸と南北軸を 2 m 方眼による軸線を配し、東西軸は A~F のアルファベットの名称、南北軸に 1~6 の算用数字をそれぞれ付して設定を行った。

また現地調査で使用した国土座標は、日本測地系（座標 AREA9）の国土座標数値であったため、報告書作成の整理作業段階で、国土地理院が公開する座標変換ソフト『web 版 TKY2JGD』を参考にしながら世界測地系第 IX 系の座標数値に訂正して算出し直したのが下記の数値である。

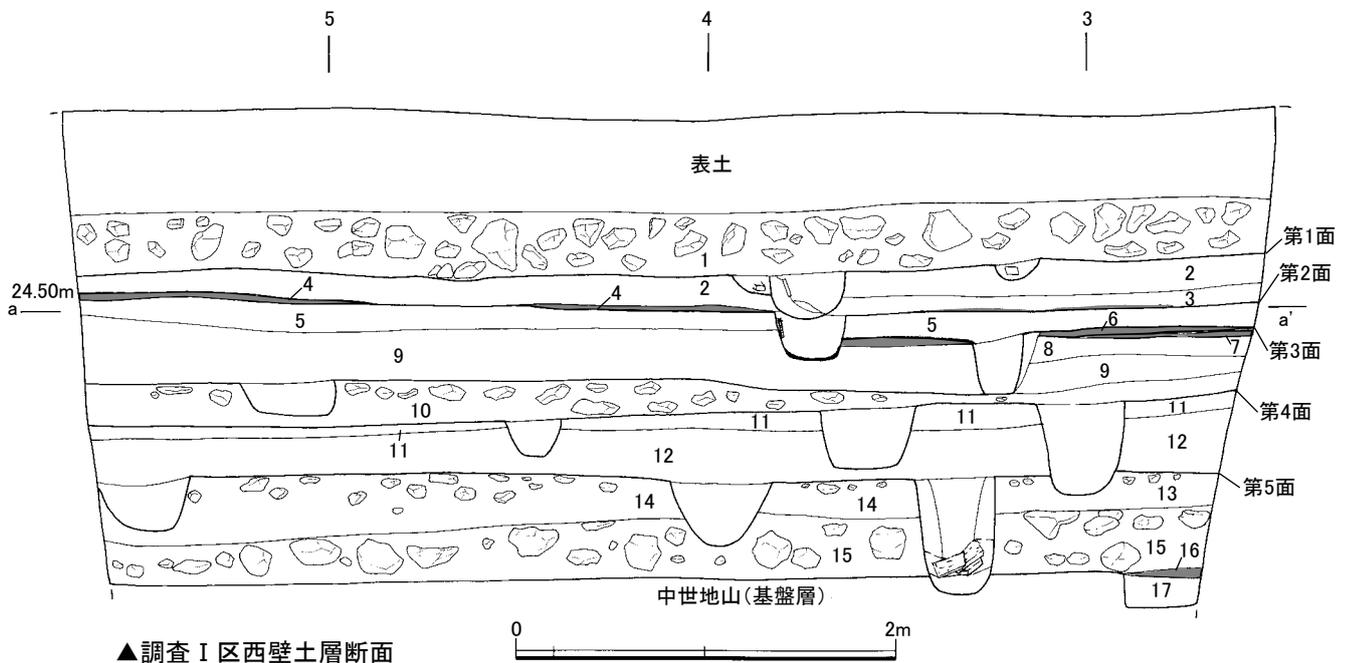
W 137: [X - 74514.268 Y - 24385.631] E - 2 杭: [X - 74411.3859 Y - 24427.5369]

W 139: [X - 74446.666 Y - 24409.049] E - 6 杭: [X - 74418.7520 Y - 24424.4253]

従って、調査地点は世界測地系第 IX 系の X - 74400.00 ~ 74430.00 Y - 24420.00 ~ 24440.00 の国土座標区画内に位置している。挿図中の方位は、すべて真北を採用した。測量方眼の南北軸線は遺構の方位を意識して調査区の南北軸にほぼ平行した主軸としたので真北より東に触れている。また調査地点の経緯度は以下のとおりである。

南北軸線: [N - 23° 55' 10" - E] 調査地点: [東経 139° 34' 03"] [北緯 35° 19' 32"]

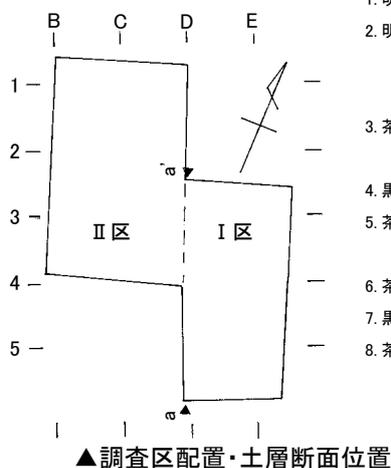
海拔標高の水準原点移動については、薬師堂ヶ谷入口で鎌倉宮社頭前の道路に設置されていた鎌倉市都市基準点(No.532004 = 29.60 m)を採用し、そこから調査地点の E - 2・6 杭上へ仮水準点を移設した。



▲調査 I 区西壁土層断面

▼土層注記

- | | |
|---|---|
| 1. 明茶灰色粘質土: 大小土丹塊を多く含む | 9. 暗茶褐色粘質土: 拳大 3cm 角土丹少量、有機物腐食土・炭化物多く含む 締まりなし |
| 2. 明茶褐色粘質土: 拳大土丹、2cm 角土丹、茶褐色粘質土
ブロック炭化物多めに含む 締まり強い
(第 1 面構築土 地形層) | 10. 暗茶褐色粘質土: 炭化物多量、かわらけ片・小土丹塊
まばらに含む 締まりなし |
| 3. 茶灰色粘質土: 拳大・2cm 角土丹まばら、炭化物多量
締まりなし | 11. 茶褐色弱粘質土: 小土丹塊を多量に含む(第 4 面構築土) |
| 4. 黒褐色炭化物層 | 12. 暗茶褐色粘質土: 土丹粒多量、炭・粗砂・遺物やや多め含む
締まり弱い |
| 5. 茶褐色弱粘質土: 拳大・2~3cm 角土丹を多量に含む
土丹版築地形層(第 2 面構築土) | 13. 暗茶褐色粘質土: 1~2cm 角土丹多量に含む 締まり強い
(第 5 面構築土) |
| 6. 茶褐色弱粘質土: 土丹版築の地形層 | 14. 暗茶褐色粘質土: 拳大・2~5cm 角土丹多量に含む
締まり強い(第 5 面構築土) |
| 7. 黒褐色炭化物層 | 15. 暗灰褐色粘質土: 2~5cm 角土丹多量に含む 締まり強い |
| 8. 茶褐色粘質土: 灰褐色粘土ブロック・黒褐色粘土ブロック
多量に含む 締まり強い(硬化している) | 16. 黒褐色炭化物層 |
| | 17. 暗褐色粘質土: 炭化物・土丹粒少量含む 締まりなし |



▲調査区配置・土層断面位置

図 5 調査区壁堆積土層

3. 層序

調査地点における地表面の海拔高は 25.6 m 前後を計り、山側から川側へ向かって緩やかに低くなった宅地を形成しており、中世の各生活面も同様に全体が川側に向って傾斜していた。図 5 のように調査区壁面の土層堆積は遺構覆土を除くと、表土以下は 1 層の大小土丹塊を多く含む近世～近代客土が確認され、現地表下約 2.5 m で確認した中世基盤層上面（黒褐色粘質土）まで概ね 15 層に区分され、少なくとも 7 時期以上の遺構面が検出されている。しかし調査地点は平子川脇に位置し、調査中多量の湧水により調査区壁崩落の危険性を伴うと判断されたので調査区全面の遺構確認は第 5 面までの現地表下 2 m を限度として実施し、それ以下はトレンチを入れて中世地山の基盤層までの土層確認するに止めた。

表土や近世・近代盛土（1 層）は 65～80cm 程の厚さを有した堆積土で、これを除去した海拔高 24.75 m 前後において第 1 面が検出された。面上には中世遺物包含層はなく、この時代以降の生活面は近代の造成や整地によって既に削平されている。第 1 面を構成する 2 層は 15cm 前後の厚さで 2 cm 角～拳大の土丹小塊を含んだ締りの強い地形層で、板壁建物や多数のピットなどの遺構も検出できる人的営為の痕跡を濃く留めた生活面であった。

第 1 面を構成する地形層の 2 層と締りのない 3 層を除去すると、海拔高 24.55 m 前後において部分的な範囲ながら炭化物の層が確認できる第 2 面を検出した。この面の構成土である 5 層は締りのある茶褐色弱粘質土で、7～15cm 程の厚さもつ小土丹塊を突き固めた地形層の生活面である。第 2 面の構成土である地形層直下となる海拔高 24.40 m 前後において第 3 面を検出した。表面は細かな土丹や鎌倉石を破碎した粗砂を突き固めて構築した地形層であり、厚さ 25～35cm の間に炭化物層や有機物腐蝕土の薄い堆積が重なり合って版築したような貼り増しが認められた。

その下には多量の炭化物や拳大土丹塊を含む締まりの弱い暗茶褐色粘質土を主体とする 10 層を挟んで海拔高 23.90～24.05 m において第 4 面が検出された。この面は小土丹粒を突き固めて構築した地形層で 8～15cm の厚さの強固な生活面である。第 4 面地形層の直下には炭化物・粗砂・かわらけ細片を多く含む締りの弱い暗茶褐色粘質土で厚さ 20～35cm の堆積がみられ、これを掘り下げると海拔高 23.70 m 前後で第 5 面が検出された。構築土は 13・14 層で拳大以下の土丹小塊を多く含む粘性の強い締まりのある暗茶褐色土による地形層の生活面であった。

第 5 面以下についてはトレンチ調査で土層観察を実施した。第 5 面構成土の 14 層を取り除くと、20～35cm の厚さをもち拳大から頭大土丹塊を多く含む 15 層の締まりの強い暗灰褐色粘質土が確認され、第 6 面を構成していたと思われる。その下は部分的に拡がる薄い炭化物を挟んで海拔高 23.05 m 前後（GL - 約 2.5 m）で認められたのが第 7 面である。この面は中世基盤層の上面にあたり、締りや粘性の強い鉄分を多く含む暗褐色粘質土である。

第三章 検出遺構と出土遺物

1. 第1面の遺構・遺物

第1面は現地地表下75～85cm、海拔高24.75m前後の高さで遺構確認した生活面である。検出した遺構は建物1棟、土坑1基、溝1条、ピット約40穴などがあり、それに伴う遺物には図9～12に示したかわらけをはじめ、貿易陶磁器、国産陶器、火鉢・瓦類の瓦質製品、銭・釘の金属製品、漆・木製品などが出土した。この他に表土層から1層においては近世～近代所産の遺物も採集されており、第1面以降の生活面は削り取られていたと考えるのが妥当であろう。

建物1 (図6・7・9・10)：調査区北側において破碎土丹塊の地形層が切れて炭化物や土丹粒を多く含んだ締りの弱い茶褐色粘質土が確認された。その範囲内を掘り下げて検出されたのが図7に示した柱穴や礎板を配した掘立柱建物である。建物を構成する柱間列は調査区内で1間四方分だけが確認された。底面に据えられていた礎板の配置状況からみると調査区外へ広がっていることは確実である。確認された柱間隔は東西方向が約2.1m、南北方向が約1.85mを測る。また柱穴Pニの南北両側に接した浅い掘り方をもつ柱穴2穴も床束を支えるなど、この建物に係わるものと考えられる。建物に伴う柱穴(Pイ～Pニ)は円形もしくは楕円形を呈し、柱穴底面はPロの鎌倉石の礎石以外はすべて礎板2～4枚を据えており、Pニは4枚重ねた礎板上に7×15cm角の柱が遺存していた。建物の南北軸線方位はN-26°-Wを測る。柱穴は径40～55cm程であり、地形層上面から70cm、床下面からの深さ50～60cm程、床下面の海拔高24.20m前後である。柱の頂部は炭化した火災など焼けた痕跡が窺えた。

さらに床束を支えて沈下を防ぐ役割を果たしたと考えられる礎板が柱通りや、その中間の位置に検出された。床束の礎板は東西柱通りでは柱間隔の3等分の位置(エレベーションa・c列)に長軸を東西位に据えた礎板が1枚置かれ、南北柱通りのPロ～Pニ柱穴の間には長軸を南北位にした礎板2枚が平行に並べられた状態で検出された。礎板は主に角柱材を一定の長さに切断し、木目に沿って縦方向に割いたもので長さ15～30cm、幅10cm前後、厚さ3cm程のものを使用している。建物南辺にあたる柱穴Pイ・ロの掘り方は当初、一段低い床下面の部分だけでプランが確認され、南側は厚さ15cm程の土丹版築の地形層に覆われており、本来の掘り方は地形層一部を壊して後に確認することができた。このことは建物南側に広がる破碎土丹の地形層は、建物建築時に主要な柱を建ち上げた後に構築された整地層であることを示しており、当時の生活面を掘り下げて構築したものではない。建物造営時に一連の作事として建物外周部を土丹版築や盛り土で積み増して通路や地形面を構築する方法が採られていたと考えられる。このような構築法による掘立柱建物の類似例は公方屋敷跡(原・橋場1994)や若宮大路周辺遺跡群(木村・菊川1993)などで検出されている。

図9・10の遺物は建物内の面上から有機物腐蝕土などと共に木片、かわらけが多く出土した。1～56はロクロ成形かわらけ皿である。小型品は11・13～15などの深め器高で薄手器壁の一群も認められた。24～29は口径10.7～11.3cmの中型品、30～54は口径12.4～13.6cmの大型品であるが、55は口径15cmを越える特大品もみられた。中・大皿は薄手器壁で深めの器高が主体を占めている。56は外底中央部に径5mm、深さ4mmの貫通しない孔が穿たれている。57は瀬戸窯卸皿で内底面近くに卸目のへら刻みあり、58は常滑窯片口鉢Ⅱ類で口径37.0cm・底径17.6cm・器高11.9cmで口縁を指頭で押し出した片口が付く。59・60は瓦質鉢形火鉢、低めの器高で底部から直線的に開いて、口縁がやや

肥厚する鉢形を呈する。61・62は北宋銭で「咸平元寶」初鑄998年・「天聖元寶」初鑄1023年である。

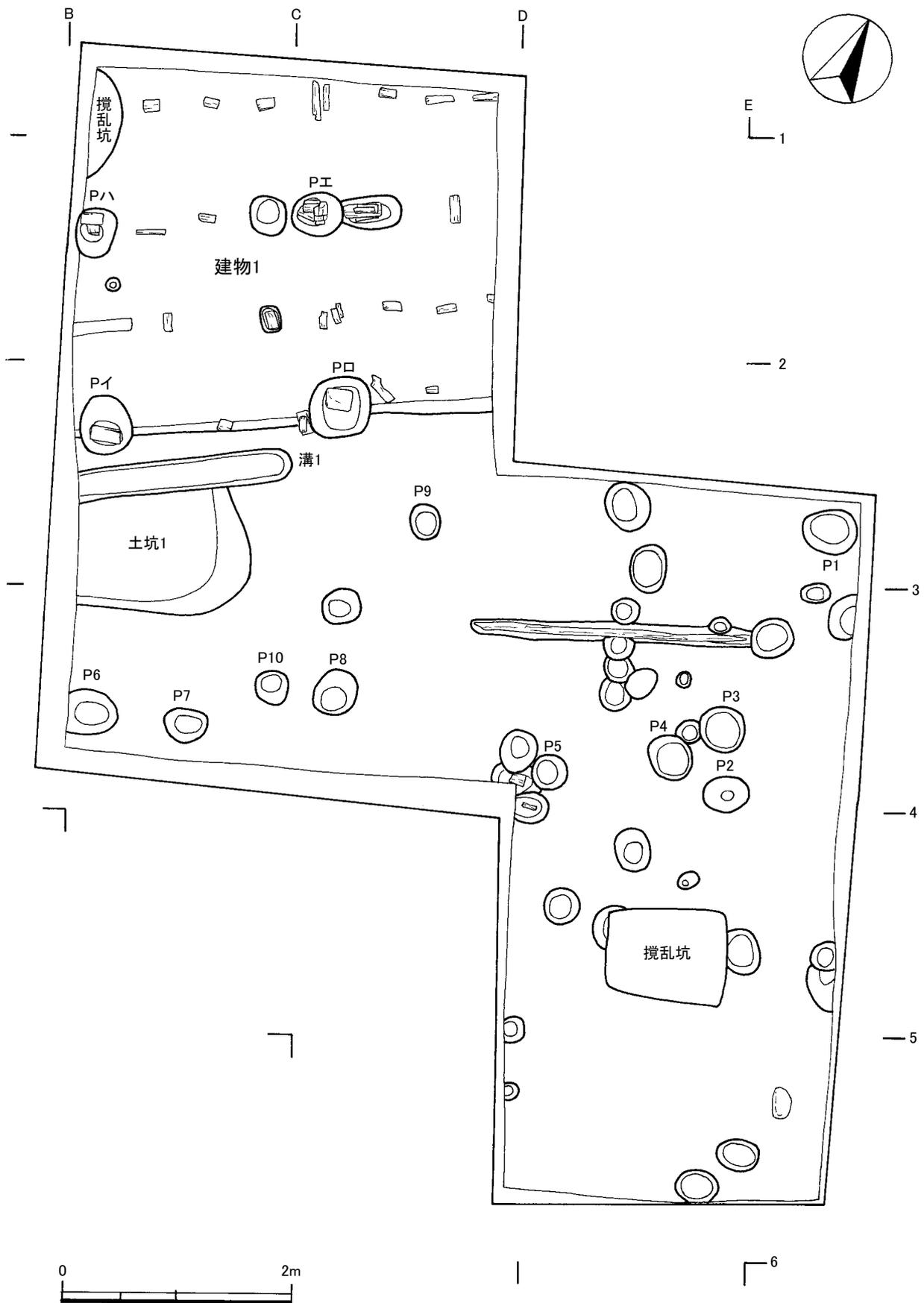


図6 第1面遺構全図

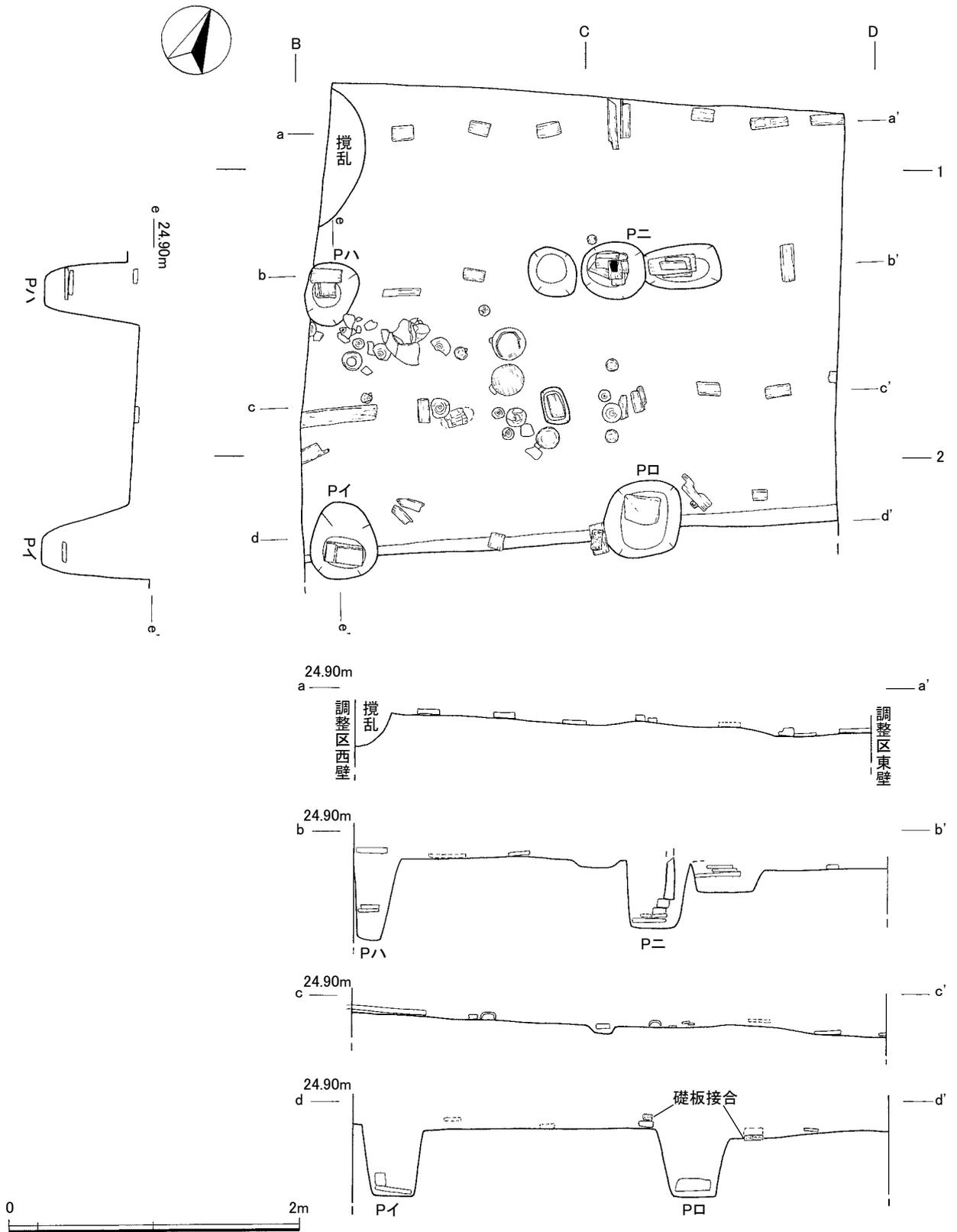


図7 第1面建物1

63～80は木製品である。64は曲物の底板、63は中央の小孔を起点に三か所で桜皮を綴じた痕跡があり、取手を止めた鍋蓋と考えられる。66・68は角材の各面を削り落として球状近くに加工したもの。67は角柱を面取りしたような形で片面中央に径2mmの小孔が中程まで穿たれている。69～80は箸で長さ18.9～23.2cmであり、刃物で断面多角形に削り出し、両口加工の仕上げを施している。

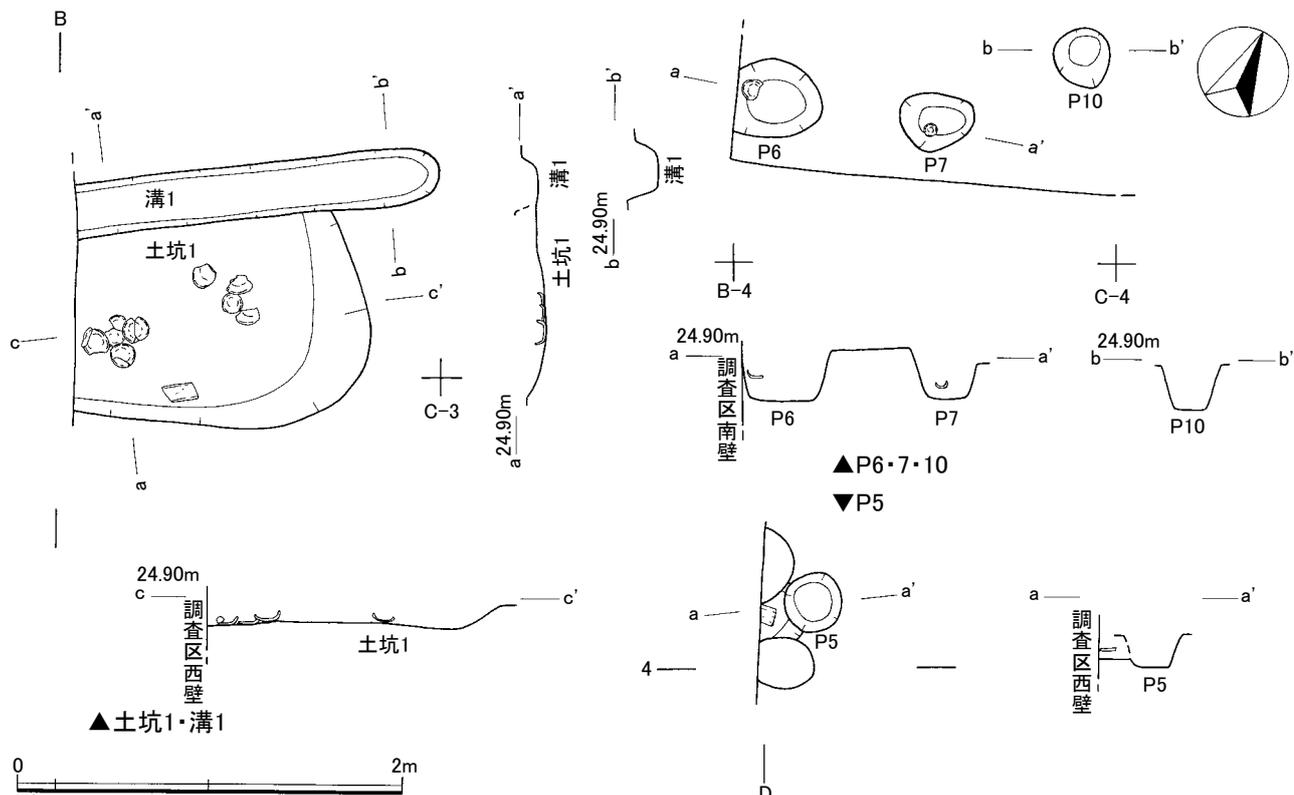


図8 第1面土坑・溝・ピット

本例の建物構造を観察すると、建物外周に比べて建物内が一段低くなり、その段差を利用して横板と縦板を組み合わせた板壁を周縁の柱で押さえ込む構造と考えられる。建物の板壁が地中に吹き下ろされたような壁支建物の市内遺跡の主な調査事例は、北条時房・顕時邸跡（福田・原・佐藤 1988）、今小路西遺跡（馬淵 1989）、若宮大路周辺遺跡群（馬淵 1990）、若宮大路周辺遺跡群（木村・菊川 1993）、佐助ヶ谷遺跡（齋木・瀬田 1993）、公方屋敷跡（橋場・原 1994）、海蔵寺旧境内遺跡（野本・岡 2000）、など 13 世紀後半～14 世紀前半の時期を主体にして町屋的な様相をもつ場に多く認められている。

土坑 1（図 6・8・11）：B-3 杭、建物 1 の西側の位置で検出された。本址は溝 1 により北辺掘り方の一部が削平され、西側は調査区外へ拡がり全容は不明である。形状は楕円形を呈し、規模は東西径 155cm・南北径 110cm 以上、確認面からの深さ 15cm と掘り方は浅く底面が平らな皿状の断面形を呈する。検出面の海拔高約 24.85 m である。覆土は土丹粒やかかわらけ小片を多量に含み、粘性を有した暗茶褐色土単一層の堆積が認められ、完形品や大型破片のかかわらけ 15 点以上が出土している。調査区壁の土層観察から本土坑は掘り方の大半が削平され、第 1 面以降の生活面から掘り込まれていた事が確認されている。

図 11 - 81 ~ 95 のロクロ成形のかかわらけである。小型品はやや厚手器壁で低めの器高のものと 84 の薄手でやや高めの器高ものがある。85・86 の中型品は器高 3 cm 前後と高めで丸味をもつ器形、大型品は口径 12cm 代で器高 3.3cm 以上の薄手器壁が主体を占めている。96 は青白磁梅瓶の蓋、97 は京都鳴滝産の砥石である。

溝 1（図 8・11）：建物 1 の P 口柱穴外から建物に沿って検出された調査区外に延びる東西方向の溝である。掘り方は上端の幅 30cm、下端の幅 20cm、深さは確認面から 20cm 程と浅く断面が逆台形を呈する。溝底は緩やかに西側へ向かって下がる傾斜を有する。土坑 1 と同様に第 1 面以降の生活面から掘り込まれた遺構である。出土遺物は 98・99 のかわらけ小皿で低めの器高がみられた。

ピット（図 8・11）：面上で掘立柱建物や柱穴列などを構成しないピット約 40 口のうち、特徴的なものや遺物を伴うものを中心に簡単に触れる。P 3 は E-4 杭の北側の位置で検出した。大きさは径

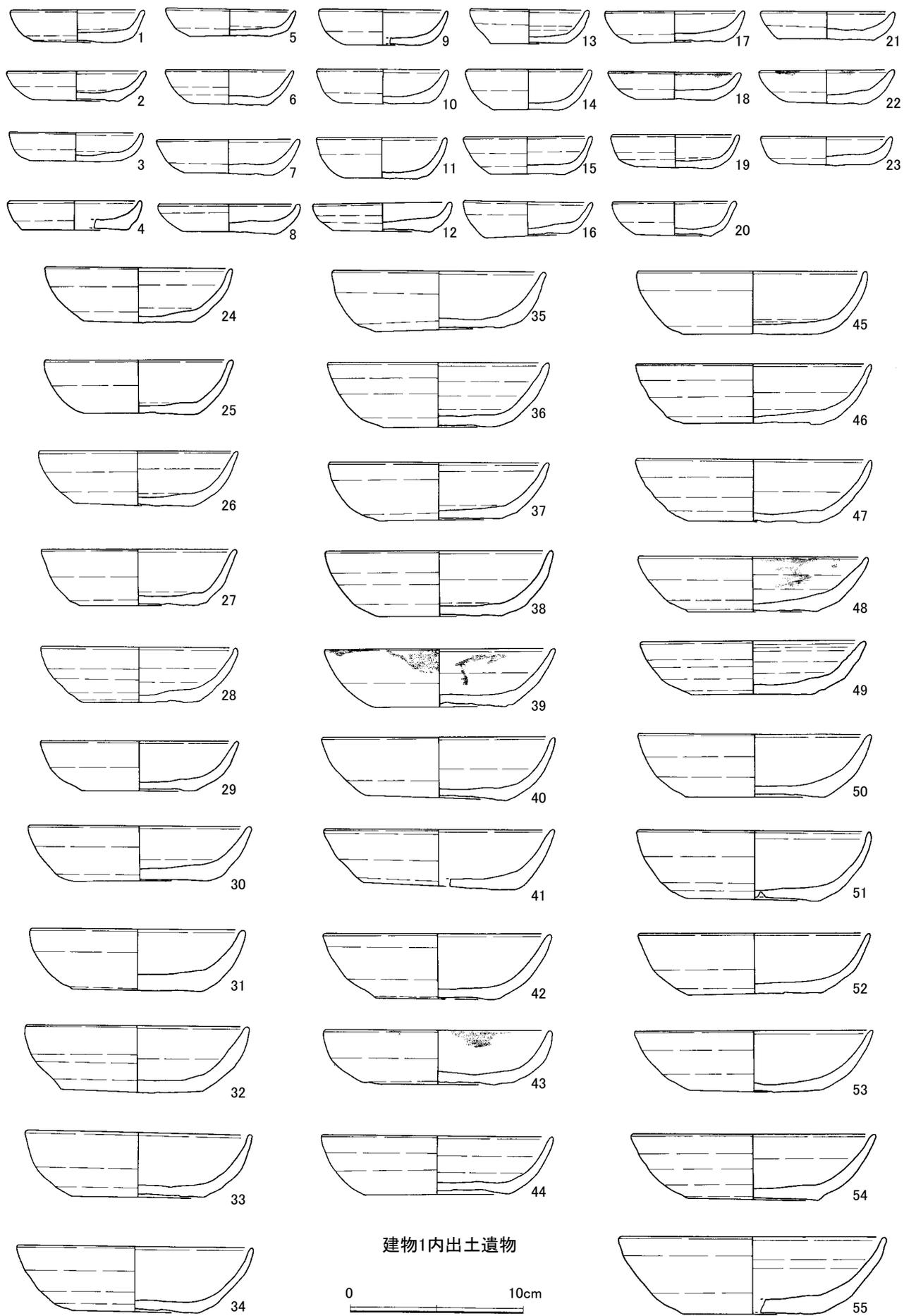


図9 第1面遺構出土遺物(1)

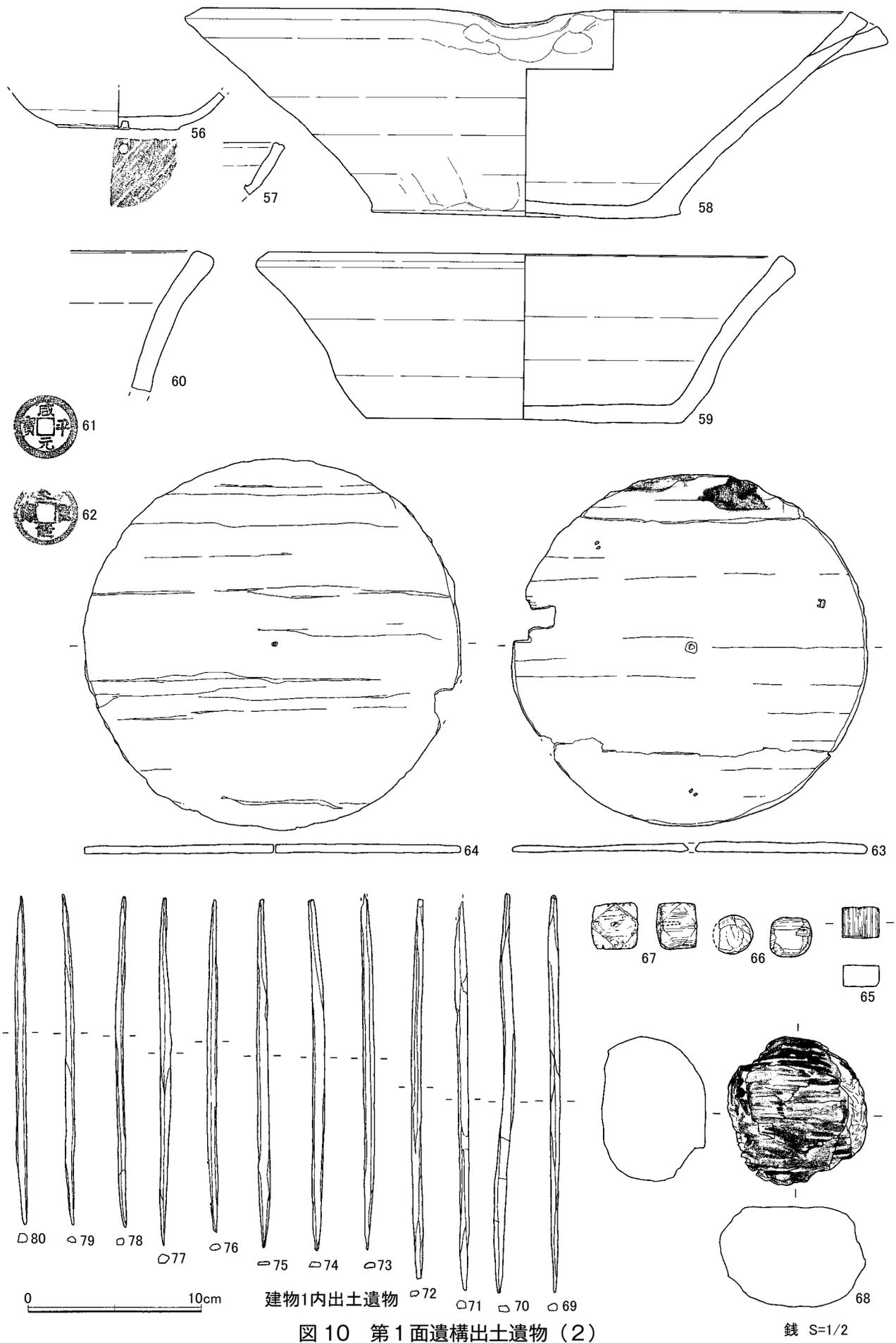


图 10 第 1 面遺構出土遺物 (2)

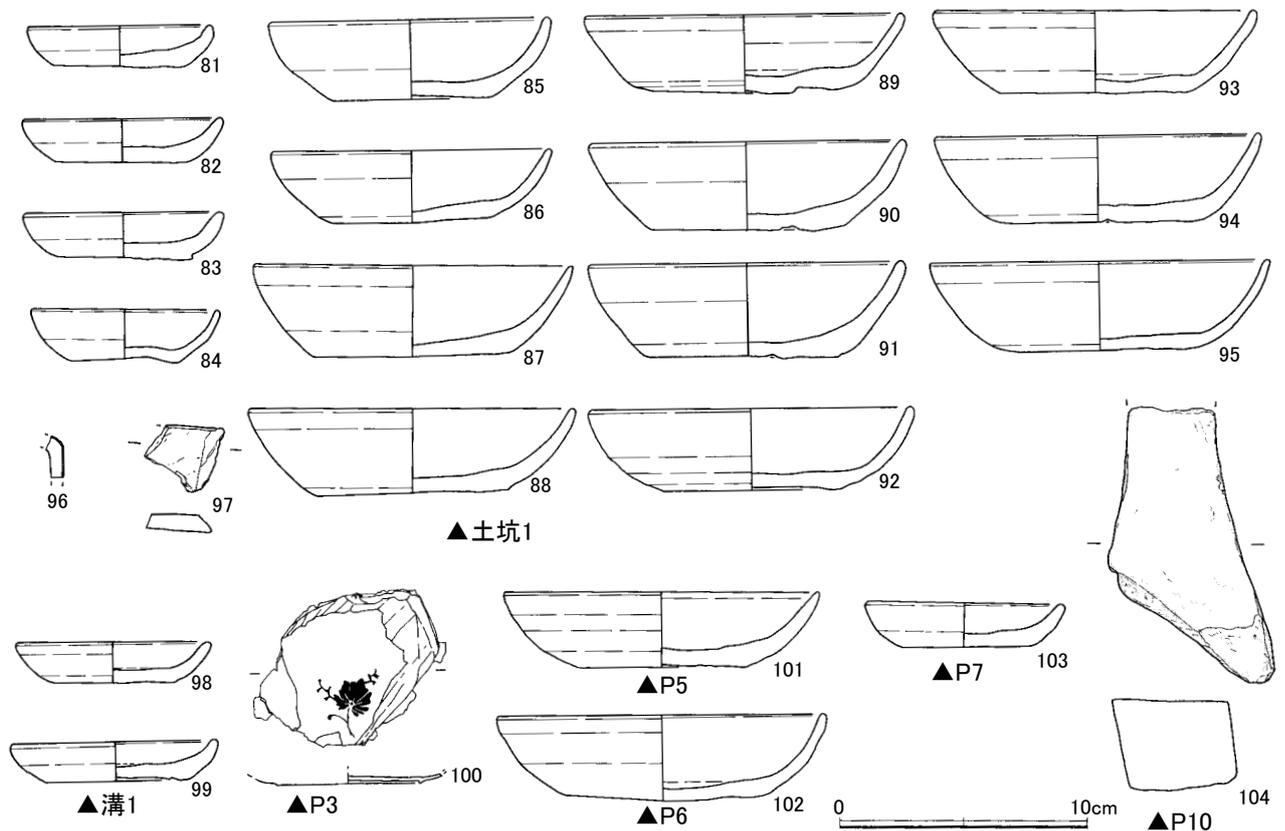


図 11 第 1 面遺構出土遺物 (3)

40cm、深さ 42cm、平らな底面から急な立て上りの壁面をもつ掘り方である。覆土は木質が腐蝕したような茶灰色粘質土で、遺物は 100 の黒漆地に朱漆で花文様を施した漆器皿が出土した。P 5 は D - 4 杭に南隣した位置で柱穴 4 口が重複して検出された。掘り方は径 35cm、深さ 20cm の円形を呈し、覆土は 2 層からなり上部が締りのない暗茶褐色弱粘質土、下層が木質の腐蝕した茶灰色土が堆積し、101 のロクロ成形かわらけ大皿が 1 点出土した。P 6・7 は B - 4 杭の北側に位置する。P 6 は掘り方が楕円形を呈し、長径 47cm 以上、短径 43cm、深さ 28cm で平らな底面である。覆土は締りのない茶灰色弱粘質土、遺物は 102 で薄手丸深の器形によるロクロ成形のかわらけ大皿である。P 7 は不整円形を呈し、長径 49cm、短径 32cm、深さ 30cm、遺物は 103 のロクロ成形で低め器高のかわらけである。P 10 は P 7 北東に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径 35cm、短径 30cm、深さ 25cm と浅い掘り方で覆土は締りのない茶灰色弱粘質土、104 の荒砥が 1 点出土した。

表土～第 1 面遺構外出土遺物 (図 12) : 1～7 は表土～1 層までの堆積土に伴う遺物である。1 は瀬戸美濃産の染付磁器端反碗、2 は肥前産の染付磁器瓶で共に 19 世紀中葉～後半頃の所産と考えられる。3・4 は瀬戸美濃産の鉄釉受付灯明皿、5 は備前系の播鉢である。6・7 はロクロ成形のかわらけ小皿ある。6 は薄手器壁で内湾した深い器形を呈し、7 は小口径で底部から斜め方向に直線的な立ち上りの器形である。底部と体部中程に穿孔を有し、外底には穿孔を中心にして放射線状の線刻が認められる。

8～22 は第 1 面遺構確認に伴い出土した遺物である。8～11 はロクロ成形のかわらけである。小型品は 8・9 が口径 7.3cm 前後で器高 2 cm 程の薄手器壁と、10 の口径 8 cm 以上で低い器高が見られた。11 の大型は薄手器壁で内湾した深め器形である。12 は青磁折腰皿で口縁端部が外方へやや張り出す器形、13 は常滑産の甕底部片、14 は女瓦 (平瓦) で凸面に斜格子目叩きで粗胎のもの、覚園寺境内調査の出土瓦 (河野 1982) や永福寺Ⅲ期瓦 (弘安年間修理) に類似した資料である。15 は自然を利用した磨石、16 は滑石製の加工品、17 は不明鉄製品、18・19 は漆器皿で黒漆地に朱漆で施文、20～22 の木製品は両口加工の箸である。

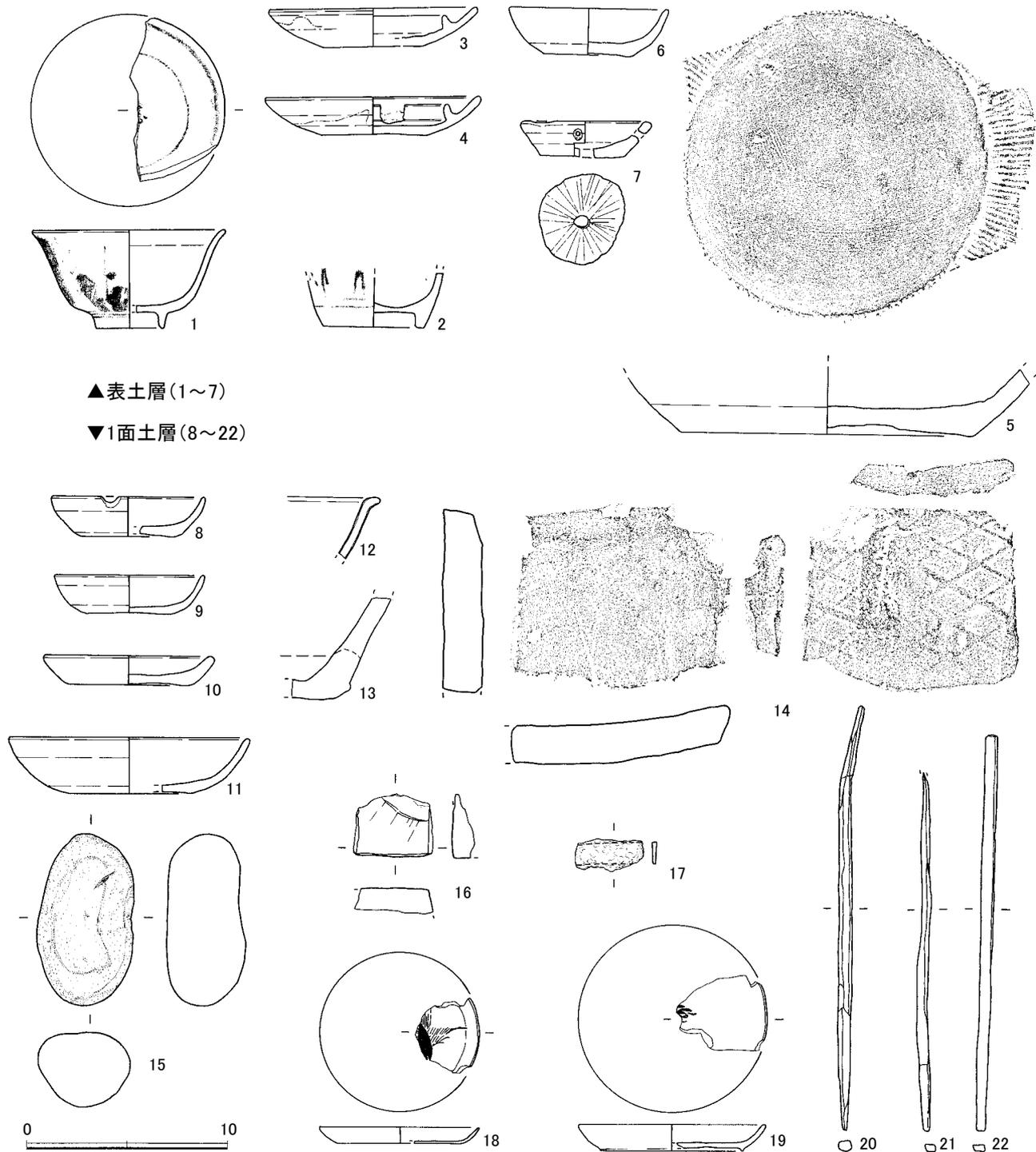


図 12 表土～第 1 面遺構外出土遺物

2. 第 2 面の遺構・遺物

この面は、第 1 面を構成する地形層の 2 層と締りのない 3 層を除去すると海拔高 24.55 m 前後において表出し、部分的な範囲ながら面上に炭化物層が確認できる第 2 面を検出した。この面の構成土である 5 層は締りのある茶褐色弱粘質土で、7～15cm 程の厚さもつ小土丹塊を突き固めて整地した地形層の生活面である。この面に伴う遺構は木組溝(溝 1)を境に南北領域で掘立柱建物跡 2 軒(北が建物 1、南が建物 2)、土坑 3 基のほか掘立柱建物や柱穴列としての建物構成が捉えられなかったピット 42 穴以上を検出した。出土した遺物は多量のかわらけをはじめ、青磁や白磁の貿易陶磁器、瀬戸・常滑窯の国産陶器、火鉢や瓦の土・瓦質製品、銭・釘・鎌の金属製品、硯・砥石の石製品、笄の骨角製品、漆器や木製品などがある。

建物 1 (図 14・17)：調査区北西側 (Ⅱ区) で掘立柱建物と考えられるもので調査区外方に拡がり構

造的に全体形がつかめておらず判然としない。柱通りの配置からみて建物2軒が重複してたり、柵列などの可能性も考えられるので、ここでは各方向の柱間隔を記しておく。南北方向のa～a'列が西から120cm・100cm・100cmで1・2穴間に東西位の礎板が認められた。東西方向はb～b'列が北から120cm・80cm・100cm、c～c'列が185cm・100cmを測りかなりばらつきがある。南北軸線の主軸方位はN - 28° - Wである。柱穴掘り方は円形から楕円形を呈し、径40～60cm、確認面からの深

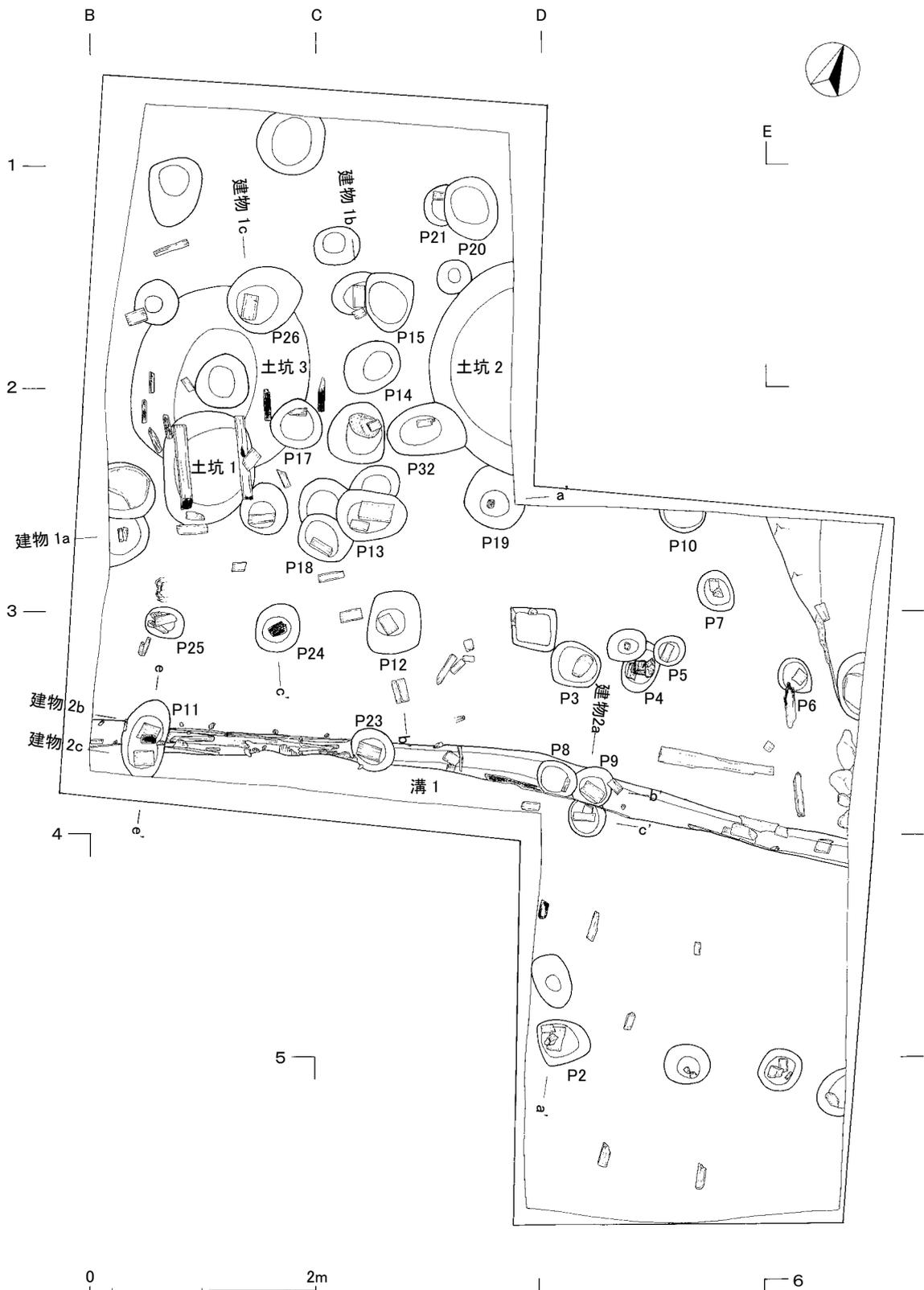


図13 第2面遺構全図

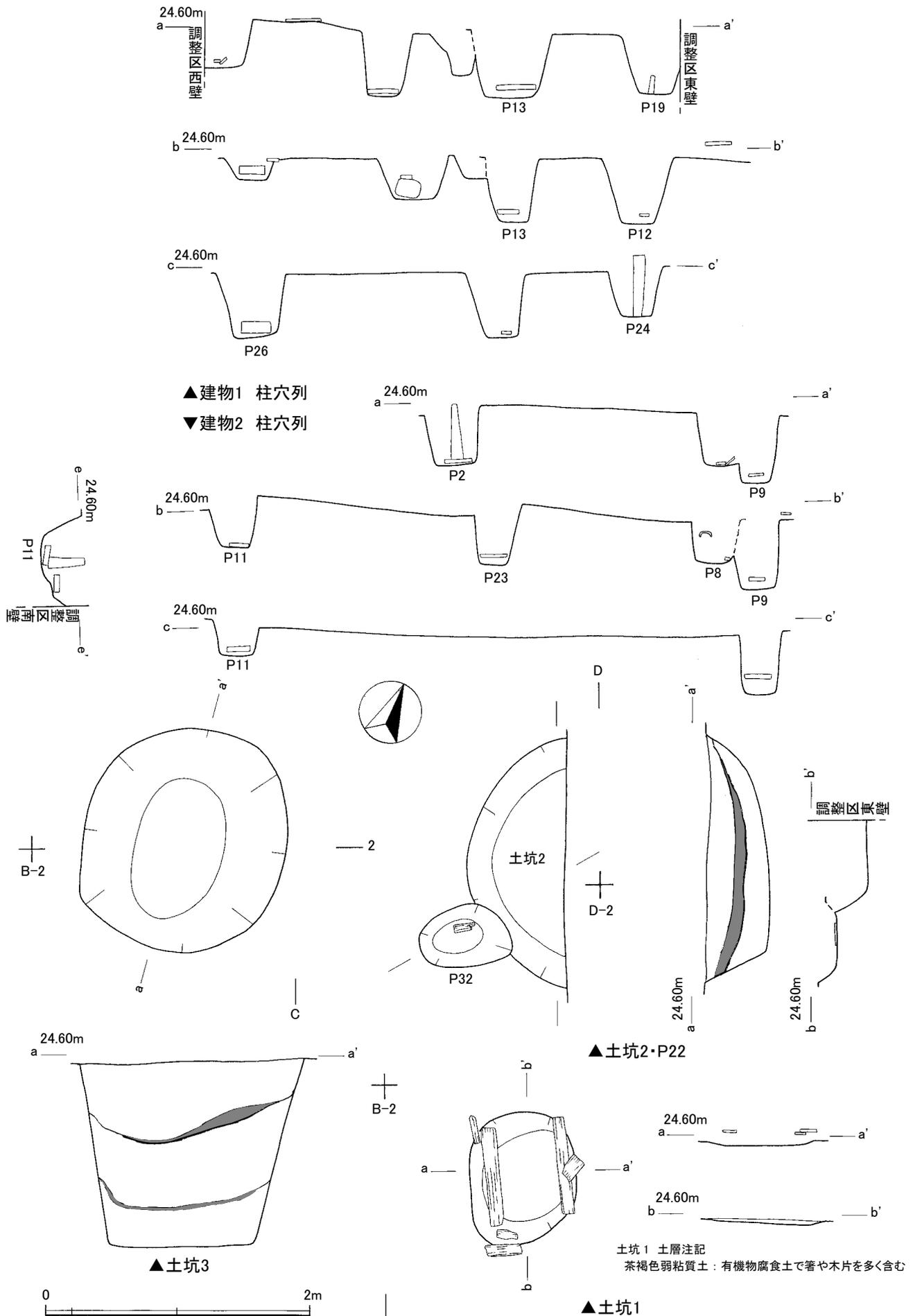


図 14 第2面建物・土坑

さ 50cm 前後が主体で浅いものは 20 ~ 30cm、いた。柱穴に伴う出土遺物は P 12 が図 17 - 41・42 のかわらけ大小皿と 43 の常滑捏鉢、P 13 が 44 のかわらけ大皿と 45 の木製品の蓋、P 18・19 が 49・50 の青磁碗がみられた。

建物 2：調査区中央南寄りで溝 1 の木組溝を壊して建てられた掘立柱建物である。確認できた規模は東西 2 間（約 5.20m）、南北 1 間だけで調査区南西外に広がるものと思われる。各柱穴の芯々距離で柱間隔をみると、東西方向は b ~ b' 列の P 11 ~ P 9 が 195cm・195cm、南北方向は a ~ a' 列の P 9 ~ P 2 が 25cm・200cm、c ~ c' は 186cm、198cm の柱間隔である。P 9 と P 11 の南隣で 25cm 程の間隔で礎板を伴う柱穴が検出された。これは建替えか、2 本の柱で梁や板壁を挟み込む建物構造が推定されたので、同一建物の柱穴として捉えた。検出面の海拔高 24.55 m 前後を測り、主軸方位は N - 16° 30' - W である。各柱穴の掘り方は平面形が楕円形を呈し、規模は径 40 ~ 60cm、確認面からの深さ 40 ~ 50cm、底面の海拔高 24.10 ~ 25 m 前後である。遺物は P 9 から出土した図 17 - 40 のかわらけ大皿だけである。

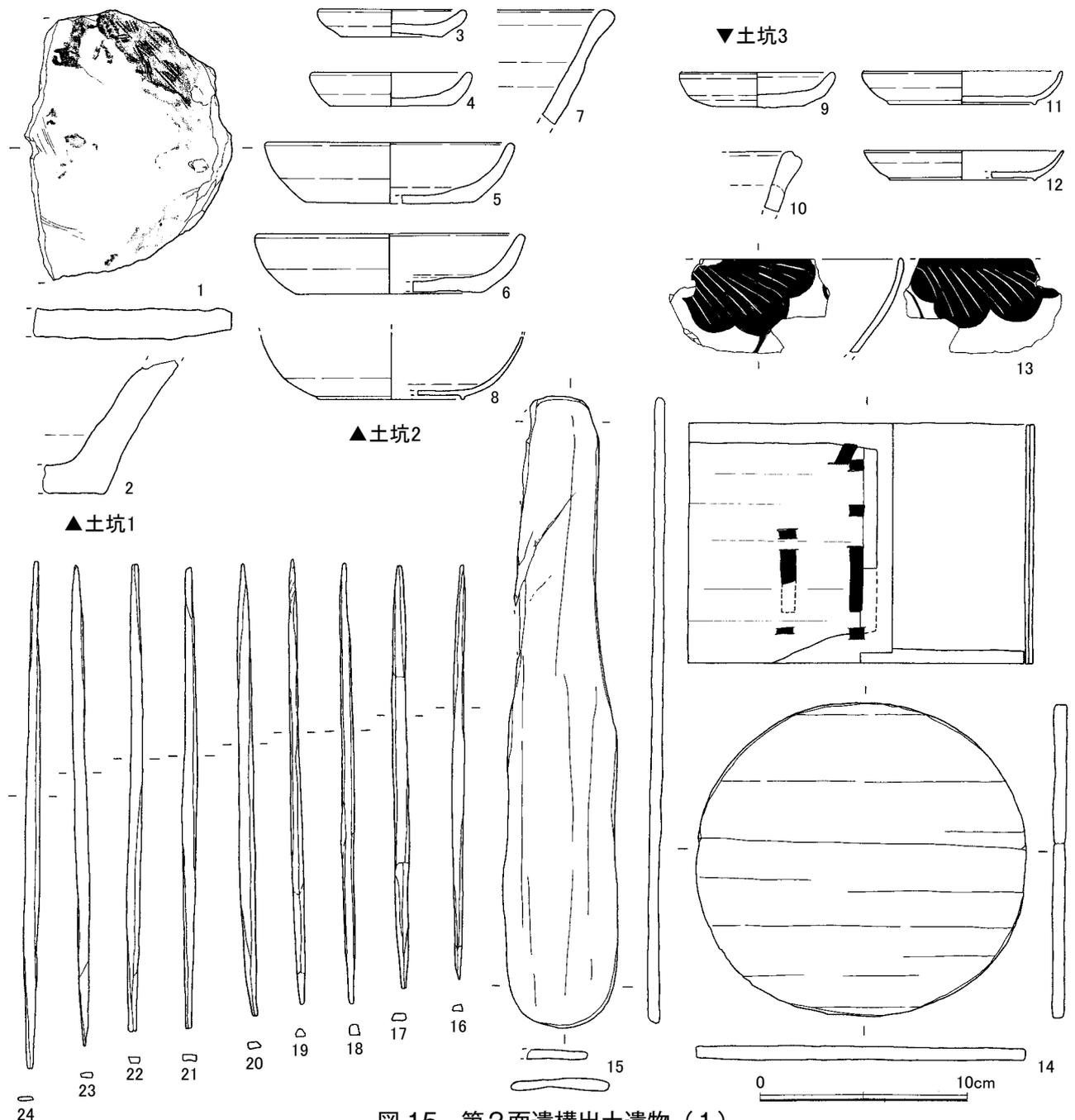


図 15 第 2 面遺構出土遺物 (1)

土坑1 (図14・15) : B-2グリットの位置で建物1より古く土坑3を壊して掘り込まれた土坑を検出した。南北径102cm、東西径83cmの楕円形を呈し、深さは確認面から10cmと浅いもので底面の海拔高24.50m程である。なお上部の位置で確認された南北位の板や礎板などは建物1に伴うものと考えられる。覆土は木端を含んだ締りのない有機物腐蝕土で、遺物は図15-1が常滑甕片を転用して割口周縁を磨ったもの、2は瓦質の鉢形火鉢が出土した。

土坑2 : II区D-2杭の位置で調査区外へ拡がる土坑を検出した。検出した規模は南北径193cm、東西径70cm以上、深さは確認面から48cm程で、断面船底形の掘り方を呈する。覆土は3層からなり、中層に堆積した炭化物層を挟んで上層が2~5cm角土丹塊を多めに含む締りをもつ灰褐色粘質土、下層が拳大~頭大土丹塊を多く含む締まりのない暗灰褐色粘質土であった。出土遺物は3~6のロクロ成形のかわらけ大小皿で共にやや厚手器壁で低めの器高を呈する。7は常滑産の捏鉢I類口縁部、8は漆器碗で輪高台、薄い木地に黒漆塗りである。

土坑3 : II区B-2・3グリットの位置で建物1・土坑1により削平を受けた古い時期の遺構を検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は南北径165cm、東西径153cm、深さ143cmで底面平らな断面逆台形の掘り方である。覆土は炭化物層を挟んで概ね3層からなる。下層は有機物腐蝕土で藁状の繊維質や木製品・木端などを多量に含み、上層部には厚さ4cm程の炭化物層が帯状に堆積していた。中層は土丹粒・炭化物や有機物腐蝕土ブロック、木端を多く含む明茶灰色粘質土、上層は炭化物・木炭・灰が多量に含む締まりのない明茶褐色粘質土がある。遺物は下層から木・漆製品を中心に出土した。9は底部回転糸切痕を残すかわらけ小皿、10は捏鉢I類で瀬戸産の可能性があり、漆器は11・12が輪高台をもつ黒漆塗り無文皿、13が碗で黒漆地で内外面に朱漆で柏葉風の手書き文様を施し、葉脈は漆欠き取りで表現している。14は曲物、薄い板材を筒形に曲げた側板に丸い底板を接合、側板の接続部分は桜の樹皮紐で縫い綴じ合わせる。15は板杓子の長丸型のもの、16~24は箸、長さ20~23cm程で断面多角形の両口加工を施す。

溝1 (図13・17) : 4ライン北側に沿って東西方向に走り調査区外に延びる溝を検出したが、建物2の北辺柱穴に一部を壊されている。規模は長さ6.8m以上、幅20~30cm、深さ15~20cm程であり、溝の両壁面は土留めの横板を内側の木杭で止めたような小規模な護岸の木組を伴うものである。東側は遺存状態が悪く土留め板の一部や木杭を僅かに残すのみであった。覆土は木端や炭化物・木炭を多く含む有機物腐蝕土で最下層に炭化物層の薄い堆積が認められた。出土した遺物は、図17-1~17がロクロ成形のかわらけ大小皿、小型品は口径7.2~8.1cm、器高2cm以下が主体を占め、大型品は概ね口径11.9~13.4cm、器高3.1~3.5cm程である。18は二次焼成を受けているが、青白磁の壺もしくは水注の底部と考えられる。19は常滑甕の肩部で平行状の叩具痕、20・21は石製品で砥石の中砥と硯、22は漆器皿で黒漆地に朱漆の手描き文様、23・24は金剛草履の板芯、25・26は両口加工の箸、27・28は銅銭で北宋の「嘉祐通寶」(初鑄1056年)と「元符通寶」(初鑄1098年)がある。

ピット (図16・17) : 調査区のほぼ全域にわたりピット40口程を確認したが柱並びの確かなピットは建物1・2以外復元するに至っていない。ここでは出土遺物を伴うものや特徴的な例を上げることにする。

P3はD-3杭南隣の位置で検出した。掘り方は楕円形を呈し、径40~45cm、深さ50cmで底面近くに伊豆石が据えられていた。覆土は炭化物・土丹粒と木端を多く含む灰褐色弱粘質土である。遺物は図17-29はロクロ成形のかわらけ皿、30は鉄製鎌、31~34は木製品の両口加工の箸と栓のようなものである。P5はP3に近接した位置で、円形を呈した径28cm、深さ20cmの礎板を伴うピットである。覆土は灰褐色粘質土で35のかわらけ小皿1点が出土した。P6はE-3杭西隣の位置で検出

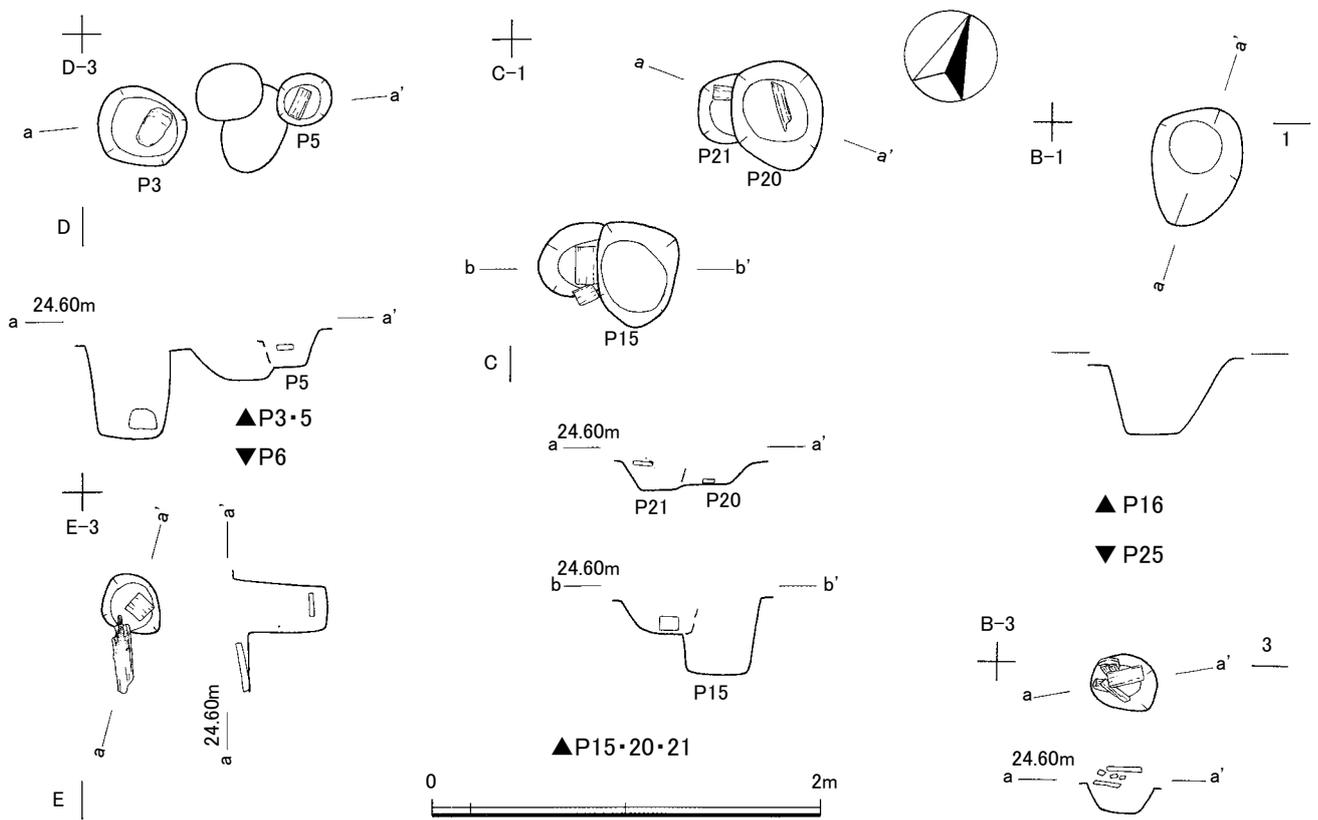


図 16 第2面ピット

した、掘り方は長径 37cm、短径 30cm、深さ 20cm の楕円形を呈し、覆土は 2 層からなり上部が締りのない暗茶灰色弱粘質土、下層が藁状繊維の腐蝕した茶灰色土で 36 のロクロ成形かわらけ小皿が 1 点出土した。P 8 は建物 2 - P 9 を壊して掘り込んだピットである。楕円形を呈し、長径 38cm 以上、短径 30cm、深さ 35cm で平らな底面の掘り方である。覆土は締りのない茶灰色弱粘質土、遺物は 37・38 がかわらけ小皿で体部中位に稜をもち、低めの器高である。39 は黒漆塗の漆器皿である。P 15 は土坑 2 の西隣に位置する。不整形を呈し、長径 55cm、短径 42cm、深さ 40cm 程である。覆土は茶灰色粘質土、遺物は 46 の低め器高で厚手器壁のロクロ成形かわらけと、47 の京都鳴滝産の砥石が出土した。P 16 は B - 1 杭に近接した位置で検出した。平面形は楕円形を呈し、長径 65cm、短径 46cm、深さ 42cm の断面逆台形の掘り方を呈する。覆土は締りのない茶灰色弱粘質土、48 のかわらけ小皿 1 点出土した。P 20 は平面形は楕円形を呈し、長径 58cm、短径 46cm、確認面からの深さ 15cm の浅い掘り方である。覆土中からは図版 15 下段右の麻布片が出土した。P 25 は B - 3 杭の東隣に位置する。平面形は円形を呈し、径 35cm、確認面からの深さ 20cm で礎板 3 枚が確認されたが掘り方上部は削平を受けていた。覆土は締りのない茶灰色弱粘質土、52 の常滑甕片は常滑編年 6 a 型式の所産と考えられる。

第 2 面遺構外出土遺物 (図 18 ~ 20) : 遺構外遺物としたものは、第 1 面構築土や遺構検出時に伴って出土した。1 ~ 60 のかわらけは全てロクロ成形である。小型品は口径 6.8 ~ 8.5cm、底径 4.5 ~ 6.4cm であるが、器高は 1 ~ 8 の 2 cm 前後のやや高めで薄手器壁ものと、1.5cm 前後の低めのものに大別される。32 ~ 34 は口径 10.5 ~ 11.0cm の中型品、35 ~ 60 の大型品は口径 12.2 ~ 13.8cm、器高 3.1 ~ 3.8cm を測る資料であるが、薄手器壁で背高気味の側面観碗型を呈する器形が主体を占めている。舶載磁器は 61 が青白磁水注、62 が青白磁瓜形水注、63 が青白磁梅瓶の蓋である。国産陶器は瀬戸窯産が 64 の香炉、65 が折縁皿、66・67 が卸皿、68・69 が入子、常滑窯産が 70 の壺、71 ~ 75・76 の甕、77・78 の片口鉢 II 類である。79・80 鏡瓦 (軒丸瓦)・女瓦は永福寺 III 期瓦 (Y A II 14 型式・女瓦 E 類と同範・同類 福田・菊川・原 2002) と同類と考えられる。81 ~ 87 の石製品には 81・82 が硯、83 ~

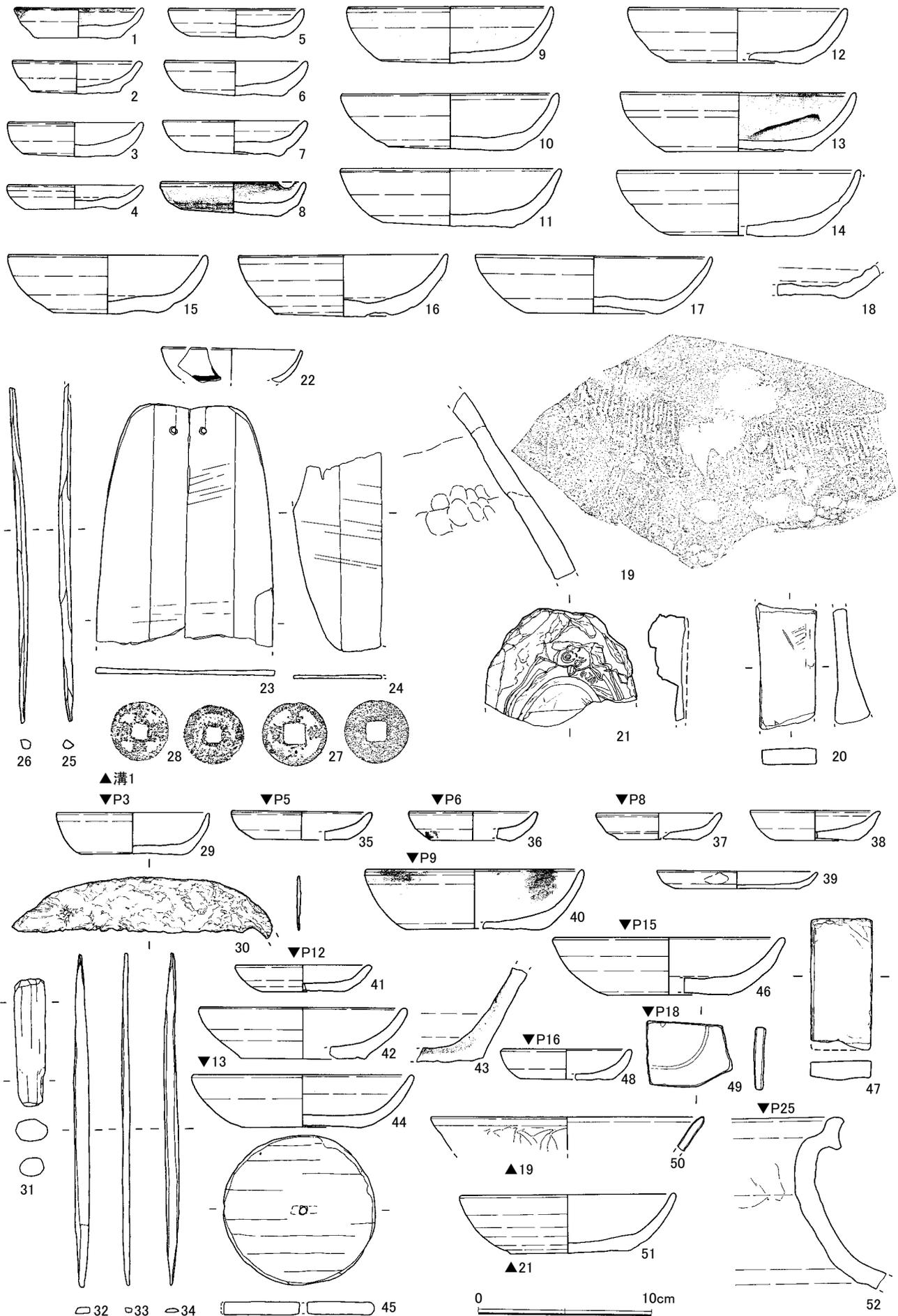


圖 17 第 2 面遺構出土遺物 (2)

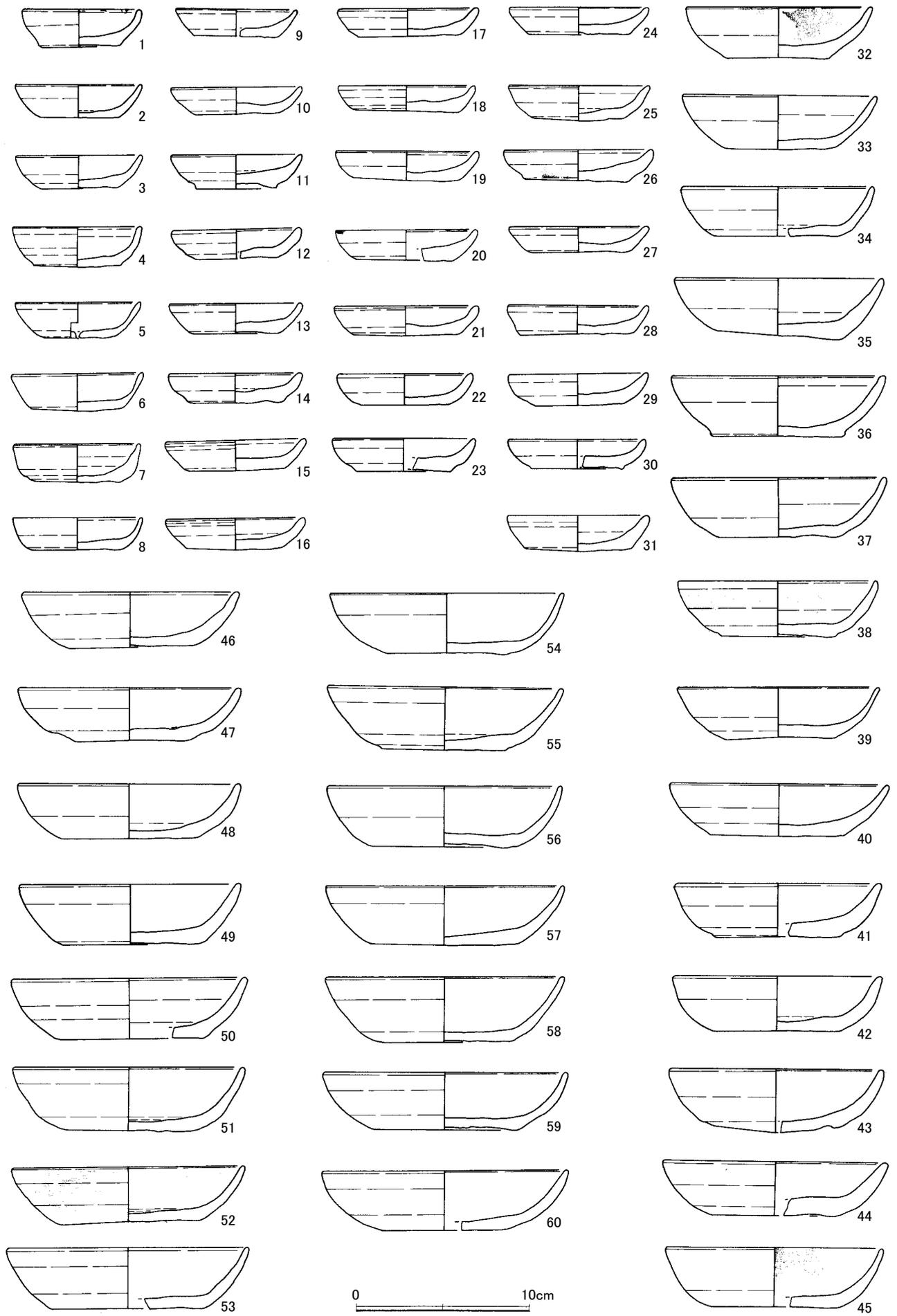


图 18 第 2 面遺構外出土遺物 (1)

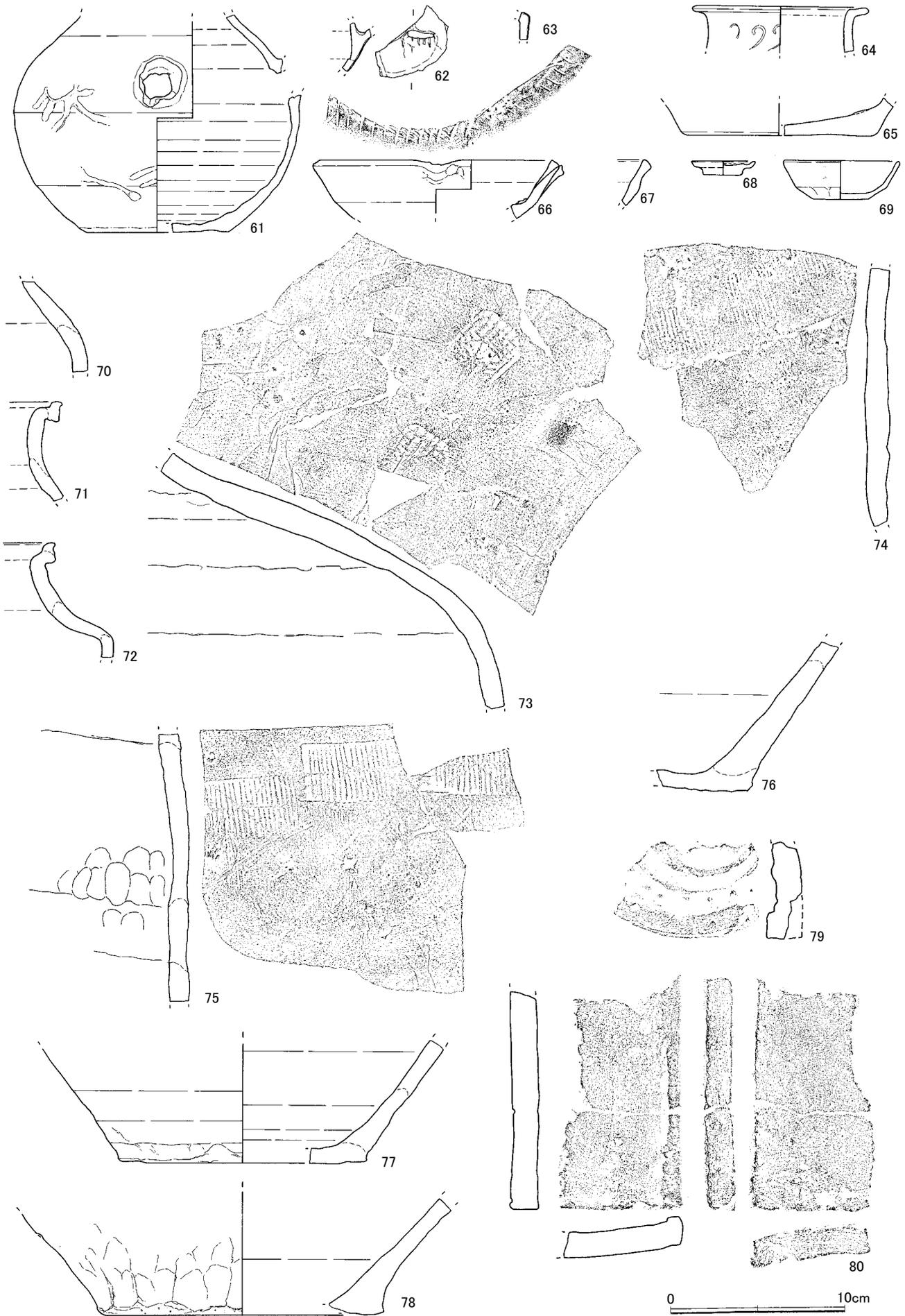


图 19 第 2 面遺構外出土遺物 (2)

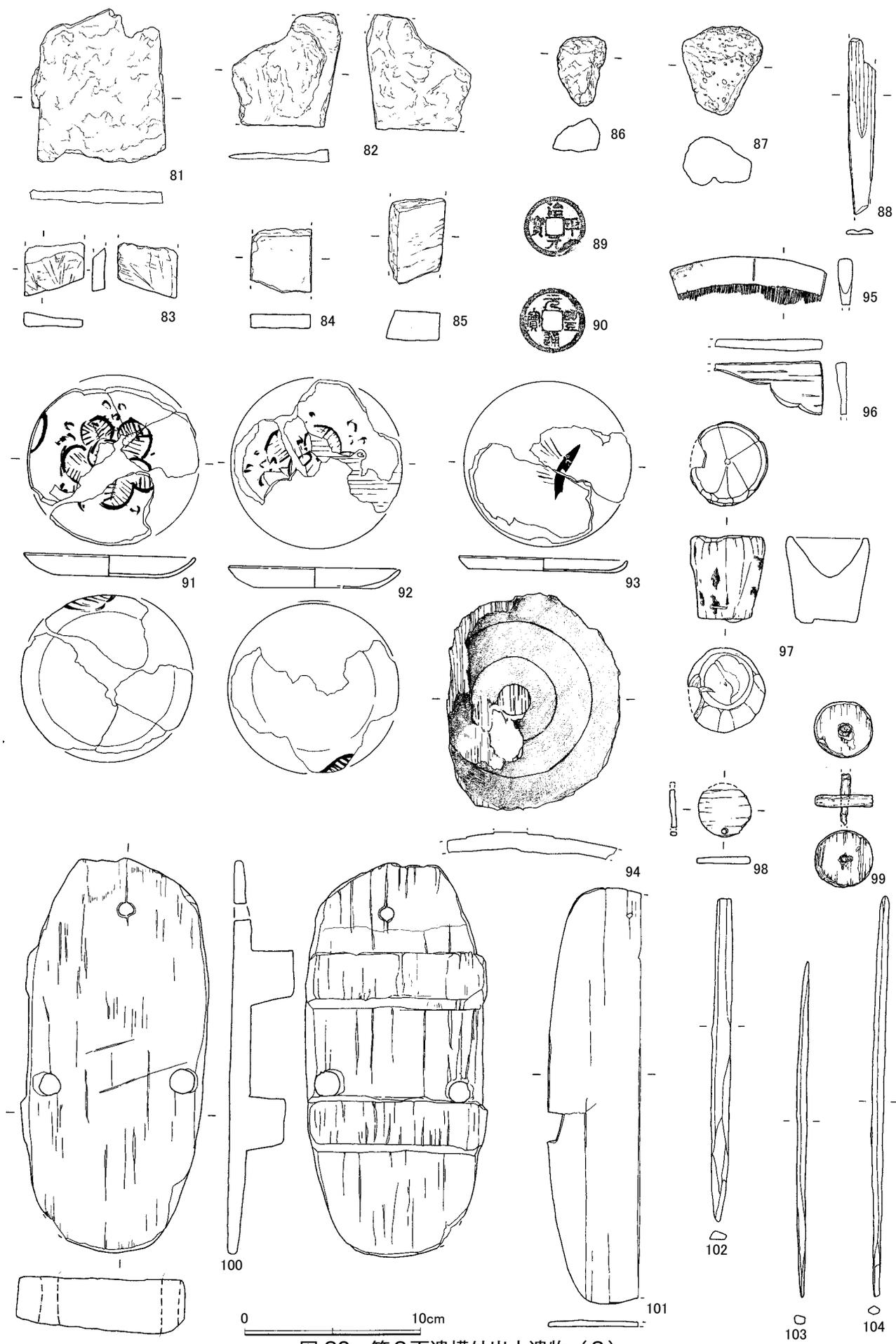


图 20 第 2 面遺構外出土遺物 (3)

錢 S=1/2

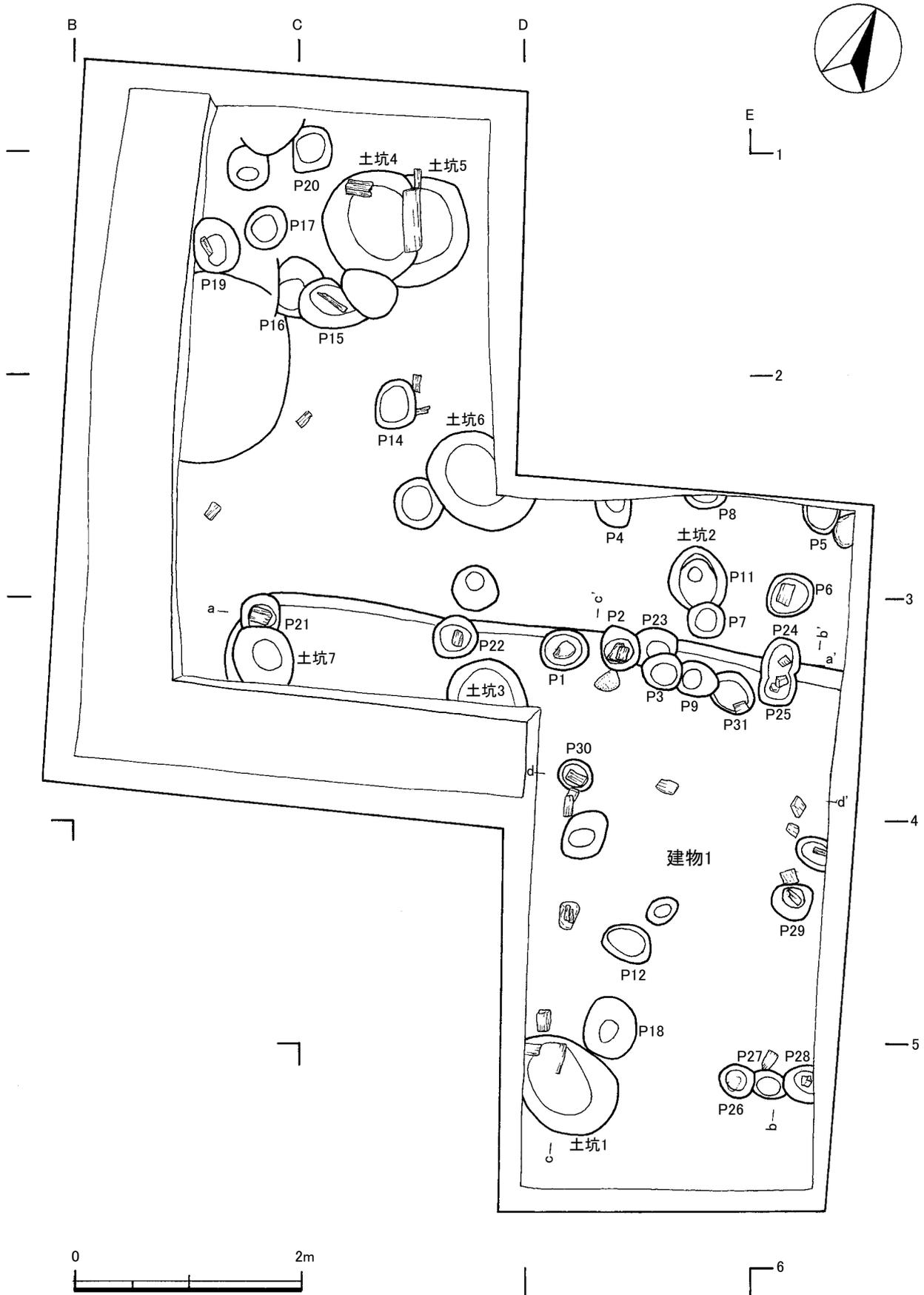


図 21 第3面遺構全図

85 の砥石で仕上砥・中砥、86 が石英質の火打石、87 の磨り面をもつ軽石、88 は骨角製品の筭、89・90 の北宋銭は「治平元寶」（初鑄 1064 年）と「元豐通寶」（初鑄 1078 年）。91～104 は漆器・木製品、

91～93が漆器皿で黒漆地に朱漆の手描文、94が黒漆塗り蓋物で摘み部を欠失、95が漆塗りの横櫛、96が脚付禅の脚に飾りの漆塗り雲形であろう。木製品は97が上面を抉り込んだ臼形の形代と思わるもの、98が小型円盤で縁の一箇所に穿孔をもつ、99が円盤で中央穿孔に丸棒を差し込む。100が台部と歯部とを一木で製作した連歯下駄、101が草履の板芯、102が細かな面取り削りを施し片側を尖らせたもの、103・104の箸は断面多角形の細かな削りを施し、両端を尖らせた両口加工を行う。

3. 第3面の遺構・遺物

第3面は薄い地形層の第2面構築土（5層）を除去すると、調査区北側域を中心に地形層直下となる海拔高24.40m前後において検出された。表面は細かな土丹小塊や鎌倉石を破砕した粗砂を突き固めて構築した地形層であり、厚さ25～35cmの間に炭化物層や有機物腐蝕土の薄い堆積が重なり合って版築したような様相を確認しており、土間状のような連続した面の貼り増しが行われていた。しかし調査区の3ライン南域では土丹版築による地形面が切れて明褐色粘質土で3cm～拳大の土丹小塊、炭化物や木端・藁状繊維質を多く含んだ締りのない有機物腐植土の拡がる範囲で認められたため、建物遺構の可能性を考えて調査を行った。この面に伴う遺構は建物1棟、土坑6基、ピット約30穴などを検出した。遺物はかわらけをはじめ、貿易陶磁器の青磁・白磁碗皿、国産陶器の瀬戸窯、常滑窯甕・鉢、金属製品の釘・銅銭、木製品の箸・筥・仏像などが出土している。

建物1（図21～23）：調査区南半部で一定の範囲に拡がる有機物腐植土を20cm前後掘り下げたところ第1面建物1と同様、平坦に整地した薄い土丹版築を施していた。版築面上からは一定の間隔をもつ柱穴や礎板などが表出したので建物として捉えた。しかし建物主体は調査区外に拡がっており、全体形が掴めていないため構造的に判然としない部分も多くみられた。ここでは建物の柱間隔、各掘り方の大きさや特徴について触れるだけにする。確認した柱間隔は、東西方向が北辺壁際の柱穴列a～a'西からP21～22が176cm、P22～1が105cm、P1～23が82cm（P1～P2間45cm）、P23～24が105cm程で間隔にかなりばらつきがみられた。南北方向は柱穴と、柱通りで礎板・礎石を検出したが土丹版築面が弱いところでは十分に柱穴確認ができなかったところもあり確かとは言えない。柱穴掘り方は平面形が楕円～不整円形を呈し、径30～45cm、床下面からの深さ15～35cm、床下面の海拔高24.10m前後を測り、建物の南北主軸方位はN-22°50'-Wである。図23に示した遺物は建物内に堆積していた覆土となる有機物腐植土に伴う。1～4のロクロ成形かわらけは小皿が薄手で高め器高のものと、厚手器壁で低め器高ものに分かれ、5～17の木製品箸は長さ19.3～23.5cm、断面多角形で両端部を細く削り出した加工を施している。

土坑1（図22）：D-5杭の位置で建物1に削平をうけて検出された。平面形は楕円形を呈し、大きさは長径105cm以上、短径78cm、確認面からの深さ15cm、底面の平坦な掘り方である。覆土は少量の有機物腐蝕土ブロックと炭化物を含む茶褐色粘質土、遺物は木端とかわらけ細片だけが出土した。

土坑3（図22・23-18～23）：Ⅱ区南東隅の位置で建物1に掘り方上部を削平され、南半部は調査区外に拡がっているため全容は不明である。確認した規模が東西径70cm、東西径40cm以上、深さ15cm、断面皿型で底面の平らな掘り方を呈する。覆土は土丹粒・粗砂を含む茶褐色弱粘質土であり、それに伴う遺物は18～22のロクロ成形かわらけである。かわらけの小皿は口径8cm以上、器高2cm以下、大皿は底径7cm以上、器高3cm前後の厚手気味の器壁を呈し、23は口唇部が肥厚した鉢形火鉢である。

土坑4・5（図22・23-23～26）：C・D-1杭の南側の位置で重複する土坑4・5を検出した。重複関係は土坑5より土坑4の方が古い。土坑4の平面形は楕円形を呈し、大きさは長径105cm・短径

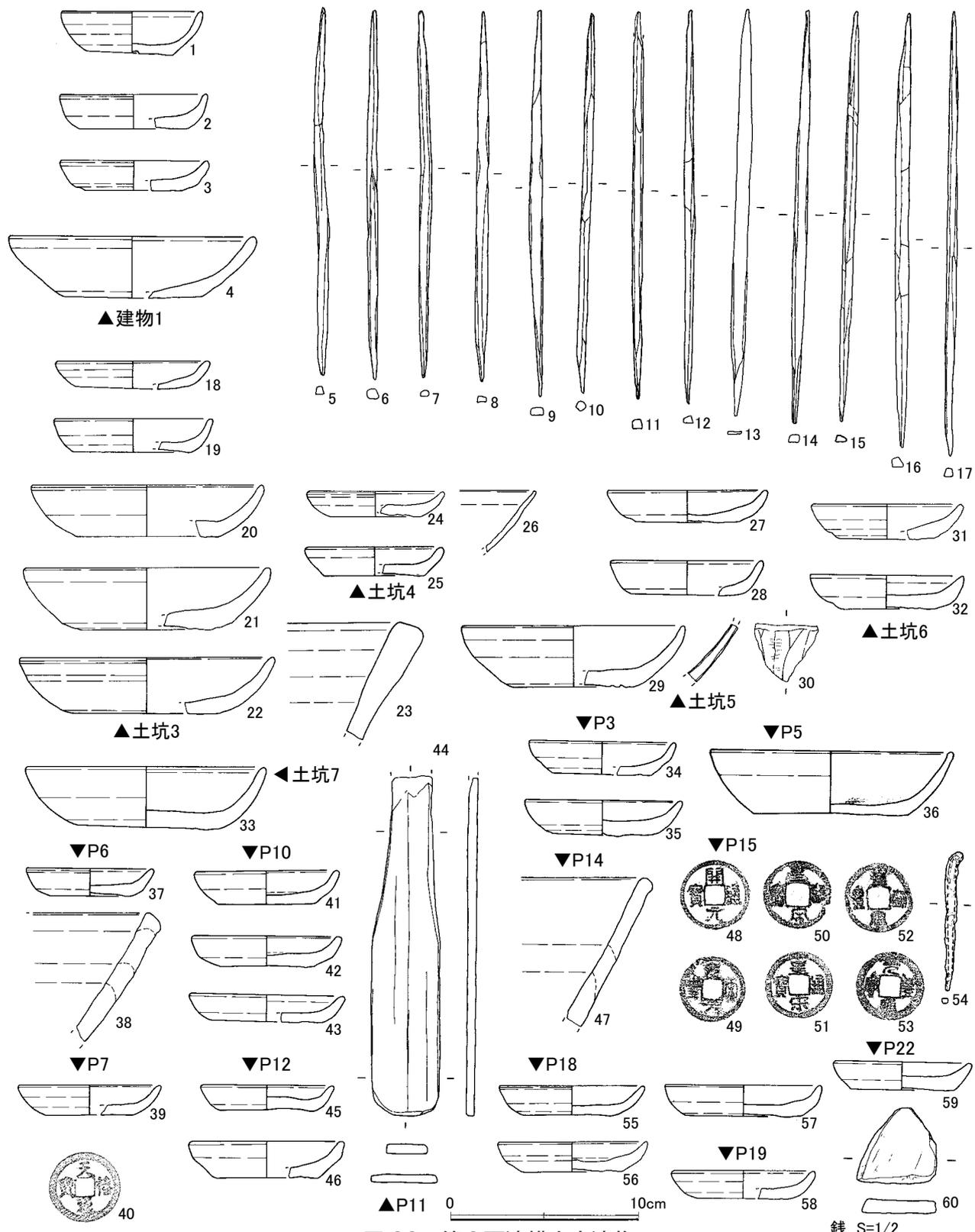


図 23 第3面遺構出土遺物

85cm 以上、確認面からの深さ 25cm、底面の平坦な掘り方である。覆土は少量の有機物腐植土ブロックを含む茶褐色弱粘質土の単一層で構成され、24・25 の低め器高でかわらけ小皿、26 の東濃型山茶碗であった。土坑 5 は平面形が大きさは長径 100cm・短径 70cm 以上、深さ 28cm、底面上に長さ 57cm・幅 15cm の板材が南北位で出土し、覆土は暗茶褐色粘質土で最下層に有機物腐蝕土の薄い堆積が認められた。遺物は 27・28 の低い器高のかわらけ小皿と 29 の大皿である。30 は龍泉窯の青磁鎬蓮弁文碗である。

土坑 6 (図 22・23 - 31・32) : D - 2 杭に近接した位置、形状は楕円形を呈し、長径 102cm、短径

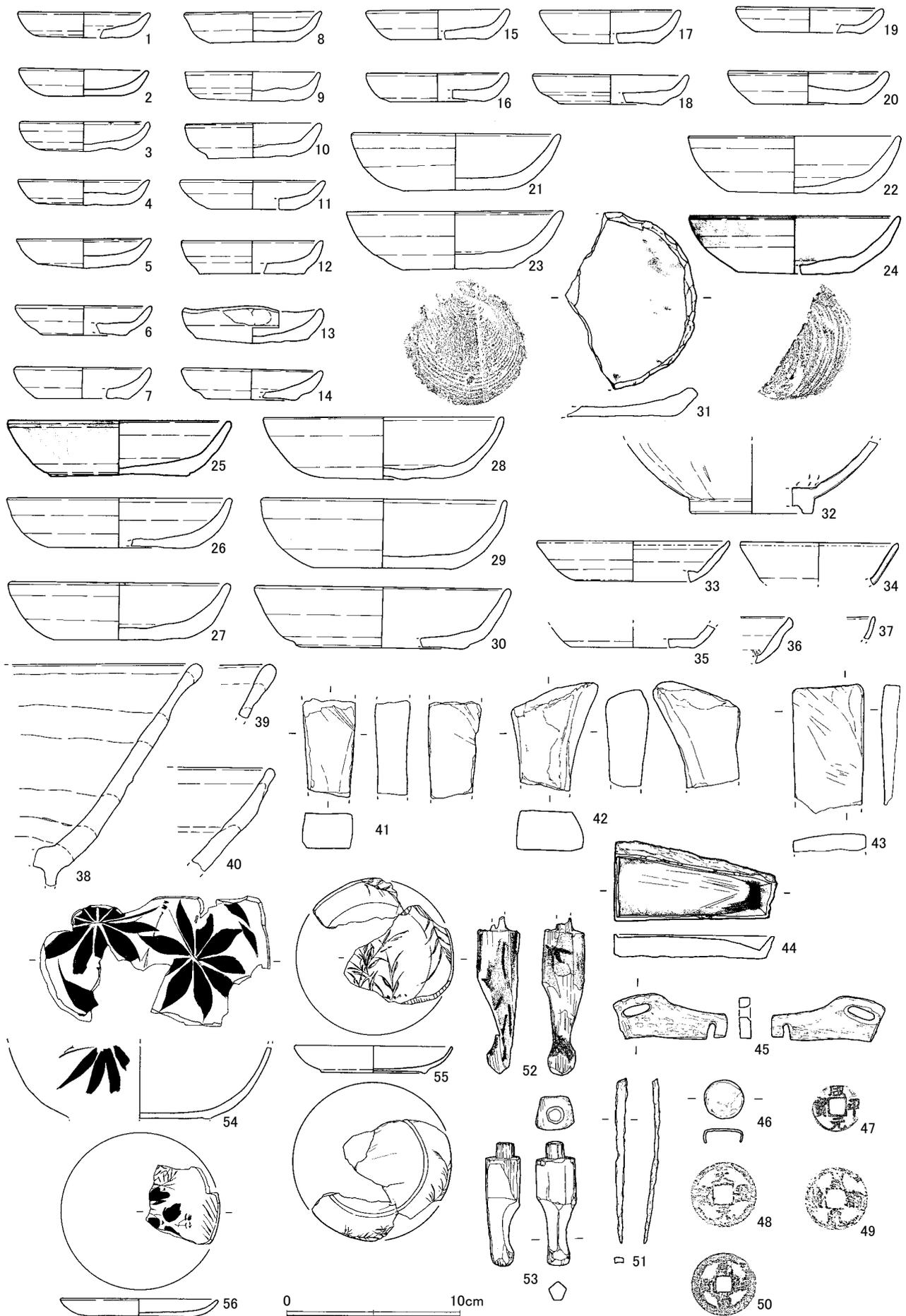


图 24 第3面遺構外出土遺物 (1)

銭・銅製品 S=1/2

78、深さ 20cm で覆土は茶褐色粘質土で平らな底面の掘り方である。遺物は 31・32 のかわらけ小皿で厚手器壁の背低器形になる。

土坑 7：建物 1 を破壊して掘り込んだもの。大きさは長径 60cm 以上、短径 54cm、深さ 40cm で締りのない暗茶褐色覆土中からは 33 の厚手器壁のかわらけ大皿が 1 点出土した。

第 3 面遺構外出土遺物：図 24・25 - 1 ~ 60 の遺物は、この面の遺構に伴う資料以外で生活面上の包含層や地形層から出土したものを集めた。1 ~ 30 はロクロ成形のかわらけ大小皿、32 の青磁鎬蓮弁文碗と 33 ~ 35 の白磁口元皿、36 ~ 40 の瀬戸・常滑窯製品である。41 ~ 44 は砥石と硯、45 は鹿角製辻具、46 ~ 50 は銅製品で嵌込式隅金具と北宋銭、52 ~ 56 は漆製品で膳脚と漆器碗皿である。木製品は 57 の小型如来立像（薄井 2012）、58 の扇子で三枚の骨に墨書、59 が曲物の蓋か、62 ~ 75 は両口加工の箸である。

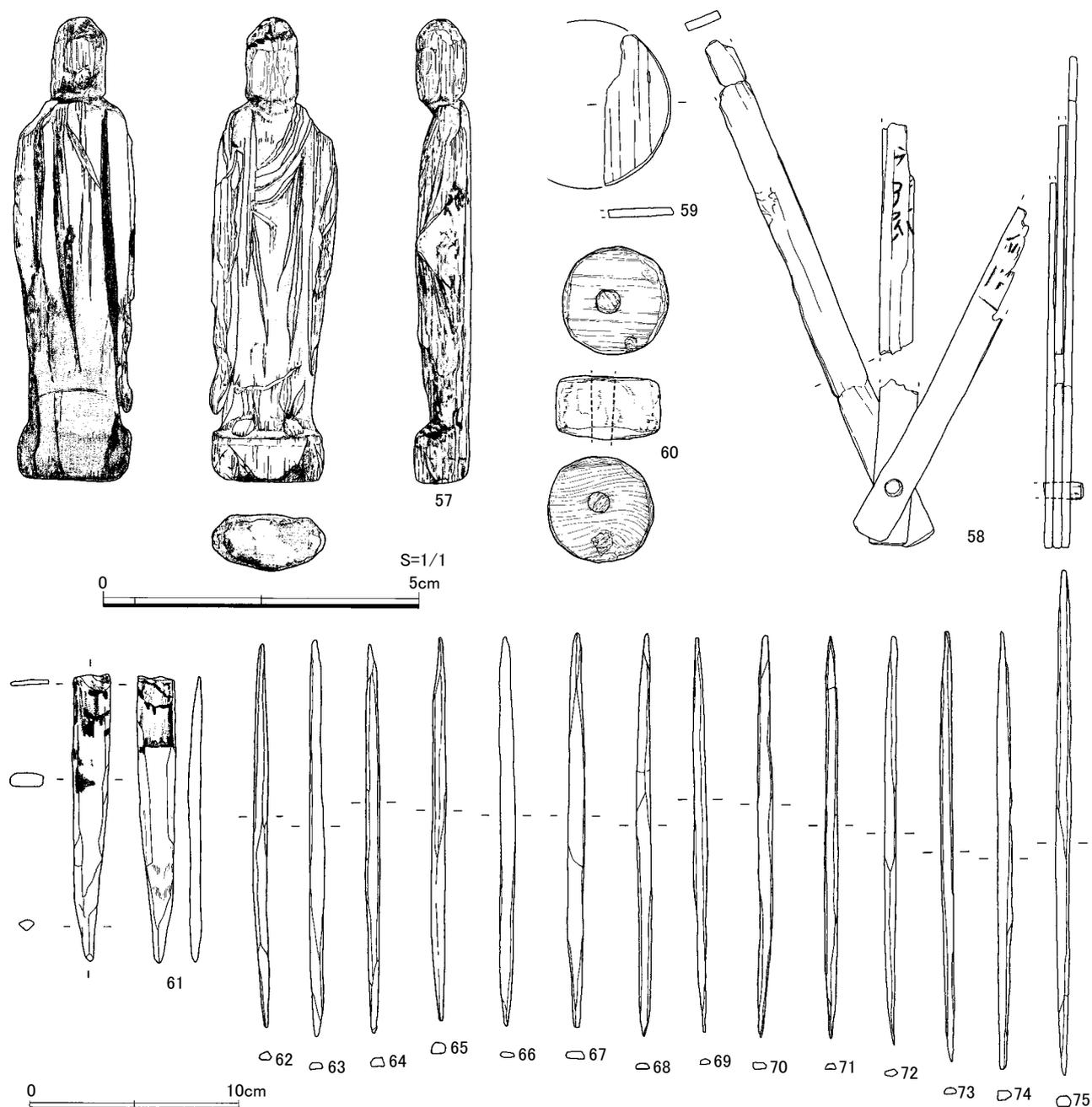


図 25 第 3 面遺構外出土遺物 (2)

4. 第4面の遺構・遺物



図 26 第4面遺構全図

第4面は多量の炭化物や締りの弱い暗茶褐色粘質土を主体とした10層を挟み海拔高23.90～24.05mにおいて土丹小塊を突き固めて構築した地形層である。この面からは建物、柱穴列、土坑、ピットなどの遺構に伴い多量のかわらけ、中国産の貿易陶磁器、瀬戸・常滑窯の国産陶器、碁石・砥石の石製品、筭の骨角製品、漆器碗皿・膳脚や箸・円板木製品、金属製品には鉄釘・銅銭の他に銅製の懸仏鏡板など宗教的な遺物も出土した。

建物1(図26～28): 調査区北西部の1ラインに沿った位置で縦板を地中に葺き下ろした痕跡と、その内側に一定の範囲と深さで有機物腐植土を多く含む堆積土の拡がり認められ、建物跡を想定して調査を行った。しかし第3面建物1と同じく建物を構成する柱穴は北辺の板壁直下に掘られたP20・21だけで建物内の柱通りを構成する柱穴は確認できていない。柱間隔はP20～21が芯々185cm、またP19が60cm程の距離に位置する。建物内堆積土に伴い図28-1の青白磁梅瓶、2～4の手描き施文と無文の漆器皿が出土した。

柱穴列1・2(図26～28): 柱穴列1・2は柱通り軸方向やその配置からみて掘立柱建物や柵列の可能性も考えられる。柱穴列1とした東西方向a～a'列は西から55cm・130cm(185cm)、105cm×2(210cm)の柱間隔を測り、各柱穴は円～楕円形状を呈し、大きさは径40～55cm、深25cm前後と浅い掘り方を持ち、覆土は土丹粒や炭化物を含む多く含む茶褐色粘質土である。柱穴列2の南北位d～d'列は170cm・45cm・130cm、さらに柱通りの北150cmと南80cmの位置で礎板が確認されている。P16は深い掘り方を持ち、底面には礎板1枚を据えた上に角柱(12×9cm)が遺存していた。

土坑1(図27・28): 調査区北東隅の位置で北壁に架かり検出した。規模は長径88cm、短径65cmの楕円形を呈し、深さ20cmで底面は平坦である。掘り方内からは完形品を主体としたかわらけ12点出土し、図28-11のかわらけ小皿上には同図18の懸仏鏡板が蓋のように乗った状態で発見された。覆土は拳大の小土丹塊や炭化物を多く含む茶褐色粘質土である。遺物は5～16がかわらけ大小皿で小型品は低めの器高、大型品の13・15は内湾した薄手器壁で高め器高のもの、12は口縁一部を打ち欠いた灯明皿である。17は口縁外反して内面摩耗する瀬戸入子、19・20の骨製筭がみられた。

土坑2: E-3杭南側の位置で柱穴列2を構成する柱穴に一部を壊されていた。規模は長径82cm、短径63cm、深さ15cmの楕円形を呈した浅い掘り方である。覆土は土丹粒・土丹小塊を含む締まりのない茶褐色粘質土、図示可能な遺物の出土はなかった。

土坑3: E-3杭の西隣の位置でP2の掘削で大半が破壊されていた。確認規模は長径68cm以上、短径60cm、深さ20cmの平坦な底面をもつ。覆土は土丹粒・土丹小塊を多めに含む締まりのない茶褐色弱粘質土、図示可能な遺物は21の常滑甕の底部片だけである。

土坑4: C-2グリットに位置する。掘り方は楕円形状を呈し、長径76cm、短径52cm、深さ20cmで断面逆台形状を呈する。覆土は2層からなり、上層が拳大の小土丹塊と炭化物を多めに含む茶褐色土、下層は炭化物を多め含む有機物腐植土で構成され、遺物はかわらけ小片と木片だけが認められた。

土坑5: E-5杭近くの位置で調査区東壁に架かる土坑を検出した。確認できた規模は長径80cm・短径45cm以上、深さ40cmで底面が平らな楕円形状の掘り方と思われる。覆土は上層が土丹粒・炭化物・有機質腐蝕土ブロックを含んだ締まりのない茶褐色弱粘質土、底面に藁状繊維質を残した有機物腐蝕土が薄く堆積していた。図示可能な遺物は22のかわらけ小皿だけであった。

ピット(図27・28): 調査区全域にわたり確認されたが建物や柱穴列に伴うもの以外に柱並びの確かなピットは復元できなかった。ここでは礎板や角柱を据えた特徴的な例、遺物を伴う例を簡単に述べる。

P2は土坑3より新しく、土坑2・P1よりも古い遺構である。確認できた規模は長径65cm・短径

40cm以上、深さ75cmで底面に上部を鋸で切断した角柱が遺存していた。P4はE-4杭近くでP5に壊され検出した。平面形は楕円形を呈し、長径58cm、短径42cm、深さ40cmの緩やかな壁面の掘り方である。遺物は23のかわらけ小皿1点が出土した。P6はE-4杭の位置で掘り方は円形を呈し、径50cm、深さ40cmで平らな小径底面である。覆土は締りの弱い茶褐色粘質土、遺物は24の厚手器壁のかわらけ大皿である。P13は楕円形を呈し、長径48cm、短径40cm、深さ34cmで平らな底面である。覆土は締りのない茶褐色粘質土で遺物は26~28ロクロ成形のかわらけ小皿、29・30の白磁口元皿と骨製筭が出土した。

第4面遺構外出土遺物(図29): この遺物は第3面地形層や第4面の遺構検出に伴って出土した遺物を一括している。1~34のロクロ成形かわらけである。小皿は1の高め器高で薄手器壁のもの以外はすべて口径7.8cm・前後・器高1.7cm前後の製品が主体を占めており、21~34の大皿は主に口径12.7~13.6cm、器高3.1~3.7cmで薄手と厚手の器壁のものが認められた。貿易陶磁器は35・36が青磁鎚蓮

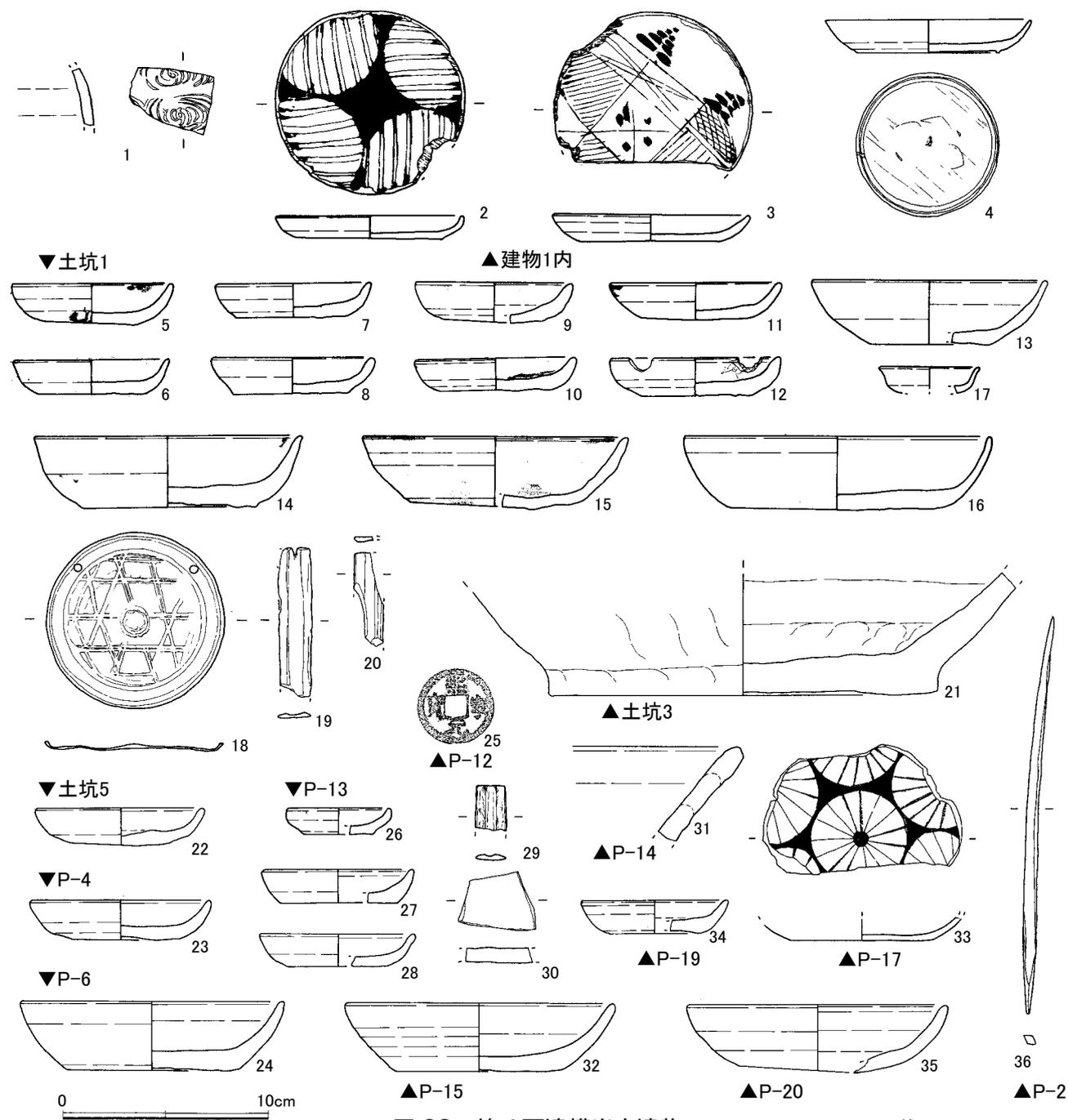


図28 第4面遺構出土遺物

銭 S=1/2

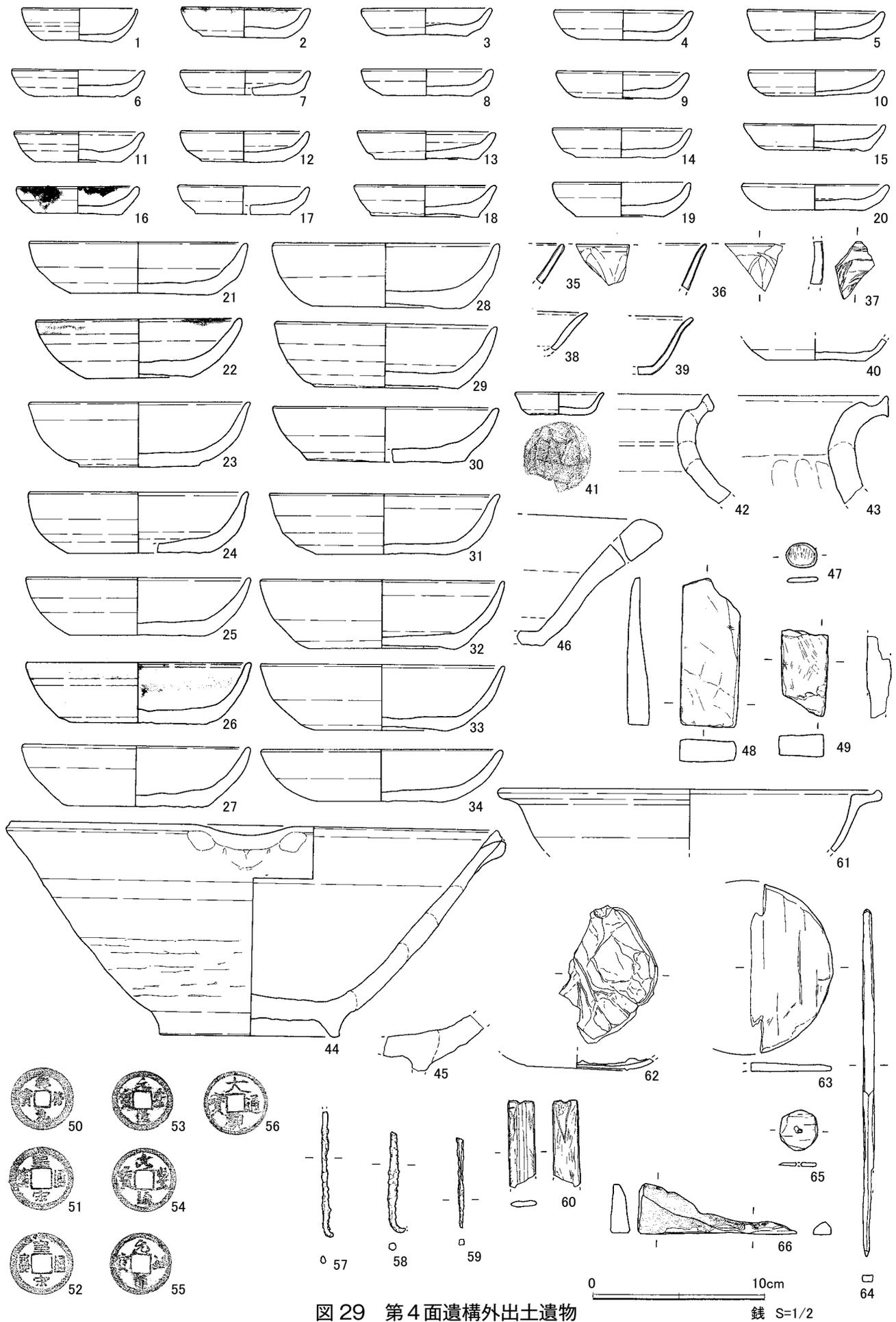


图 29 第 4 面遺構外出土遺物

錢 S=1/2

弁文碗、37 が青白磁梅瓶、38～40 が白磁口元皿、41 が瀬戸入子、42～45 が常滑甕と片口鉢Ⅰ類、46 が鉢形火鉢、47～49 が基石黒と京都鳴滝産の砥石、50～56 が北宋銭、57～59 が鉄製の火箸と釘、60 が骨製筭、61・62・66 が漆器類で62の皿内には黒色系漆が浸み込んだ紙か布が拭れたような塊がみられ、63～65 は箸・円板の木製品である。

5. 第5面の遺構・遺物

第5面は地表下2m程、海拔高23.70m前後の高さで生活面を検出した。遺構は土坑3基、ピット約40穴を検出した。遺物の出土量は他の面に比べて少なめであったが、かわらけをはじめ貿易磁器の青磁碗・盤や白磁皿、国産陶器の常滑窯壺・甕・鉢、金属製品の刀子・掛金、砥石、木製品などが認められた。

なお、第5面の終了時で掘削深度が現地地表下2mに達し、平子川脇の立地で多量の湧水と降雨によって調査区壁崩落の危険性を伴うと判断されたので安全確保を優先して平面的な調査は実施せずに、これ以下はトレンチを入れて中世基盤層までを確認するに止めることにした。トレンチ調査における土層観察では、海拔高23.05mの中世地山面までの間に、拳大～頭大の土丹小塊を含む地形面(15層上面:6面)が海拔高23.40m前後の高さで確認された。

土坑1(図30・31): E-4杭北西側に位置で検出した。平面形は南北にやや長い楕円形状を呈し、大きさは長径75cm、短径58cm、深さ20cm、断面皿状の浅い掘り方である。覆土は青灰色粘土ブロック少量と土丹粒・炭化物を多く含む暗褐色粘質土である。遺物はかわらけ細片だけで図示可能な資料はない。

土坑2: C-3グリットに位置した深い掘り方の土坑である。平面形状は東西にやや長い楕円形を呈し、規模は長径108cm、短径95cm、深さ83cmを測り、壁面は垂直気味の立ち上がりを示し、底面はほぼ平坦であるが中央部に長径48cm、短径37cm、深さ8cmの楕円形を呈した浅い窪みが検出されている。覆土は拳大～頭大の大小土丹塊を多量で密、炭化物や有機物腐蝕土を少量含む暗灰褐色弱粘質土、中央窪みは砂質土である。図示可能な遺物の出土はない。

土坑3: C-3杭北側に位置し、掘り方大半をピット3穴に掘削されて検出した。大きさは径70cm前後、深さ20cm、底面の平坦な浅い掘り方である。覆土は土丹粒や炭化物を含む締めりのない灰褐色粘質土であった。遺物には図32-1の青白磁小壺で型押し成形の造り、2は常滑片口鉢Ⅱ類、3は砥石で上野産の中砥が出土した。

ピット(図30～32): 調査区全域にわたり確認されたが柱並びの確かなピットは復元できなかった。ここでは礎板や角柱を据えた特徴的な例、遺物を伴う例を簡単に述べる。

P1はE-4杭の北隣に位置して掘り込んでいる。掘り方は楕円形状を呈し、大きさが長径40cm、短径35cm、深さ32cmを測り、覆土は土丹粒を多く含む暗褐色弱粘質土、遺物は図32-4のロクロ成形かわらけ小皿、口径8cm程の内湾気味に立ち上がり、体部中位から斜め方向へ直線的になる器形を呈する。P2は土坑1北側に接した位置である。掘り方は隅丸長形状を呈し、長軸57cm、短軸45cm、深さ38cmを測り、底面に長さ25cm、厚さ10cm程の鎌倉石切石の礎石を据えている。覆土は土丹粒を多く含む暗褐色弱粘質土、図示可能な遺物の出土はない。P5はC-3杭に近接した位置で土坑3を壊して掘り込んでいる。掘り方は楕円形を呈し、長径68cm、短径45cm、深さ37cm、中央の縦面近くの位置で礎板1枚を検出した。覆土は土丹粒、炭化物を多く含む暗灰褐色粘質土、出土遺物は5のかわらけ小皿で内湾器形の体部中位から開き気味の口縁部になるもの。P6は調査区南東隅に位置する。掘り方は不整円形を呈し、長径48cm、短径40cm、深さ35cm、覆土は土丹粒を多く含む灰褐色弱粘質土である。遺物は6のかわらけ小皿で器高が低く、口径と底径の比率が小さな資料である。P8はI区北西隅に位置する。掘り方は円形を呈し、径47cm、深さ38cmを測り、底面に長さ18cm・幅8cm程の礎板を据え、その上に刀子(図32-7)1振が横向きの状態で出土している。覆土は土丹粒、炭

化物を多く含む締りの弱い暗灰褐色粘質土である。

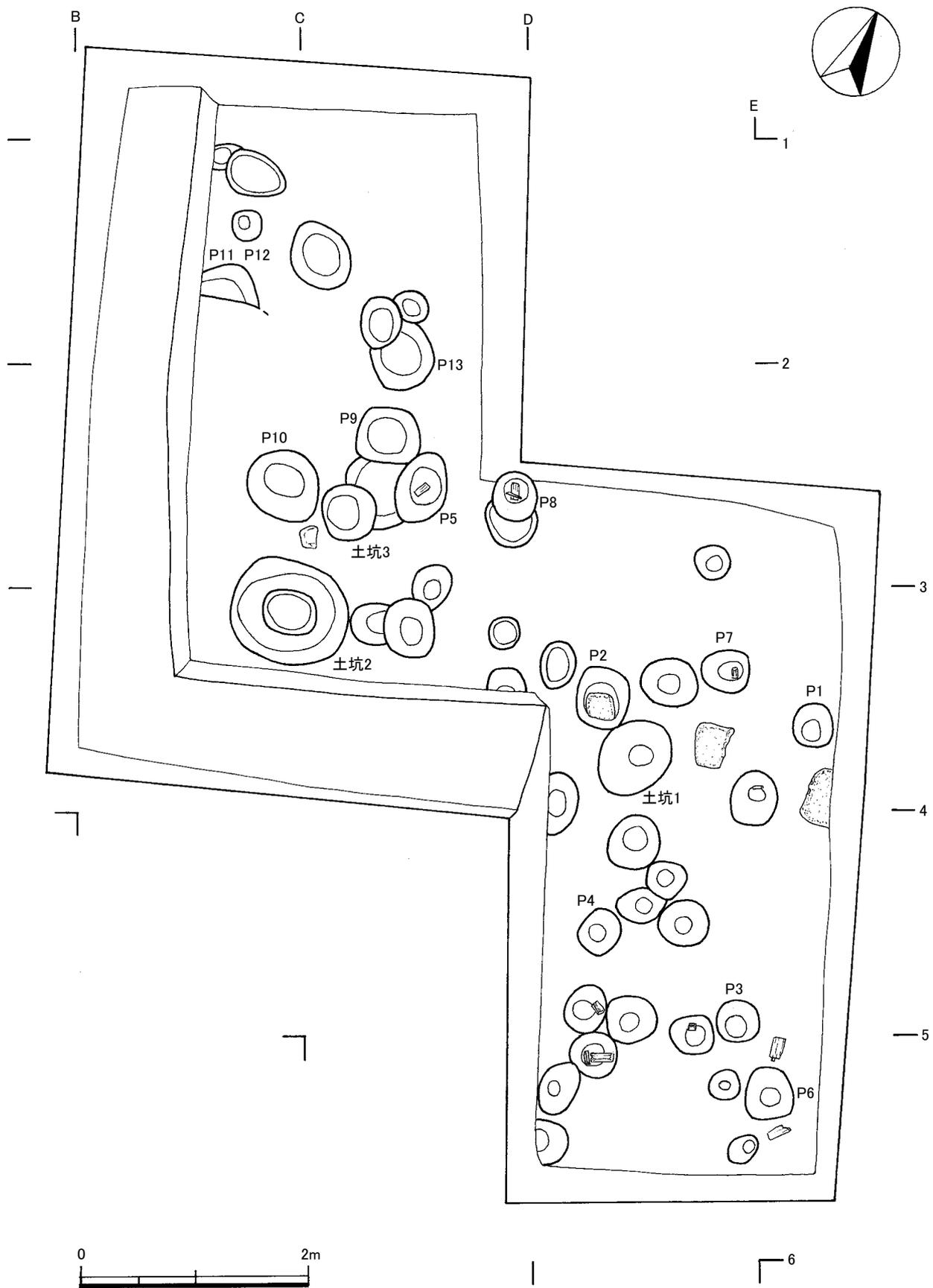


図 30 第5面遺構全図

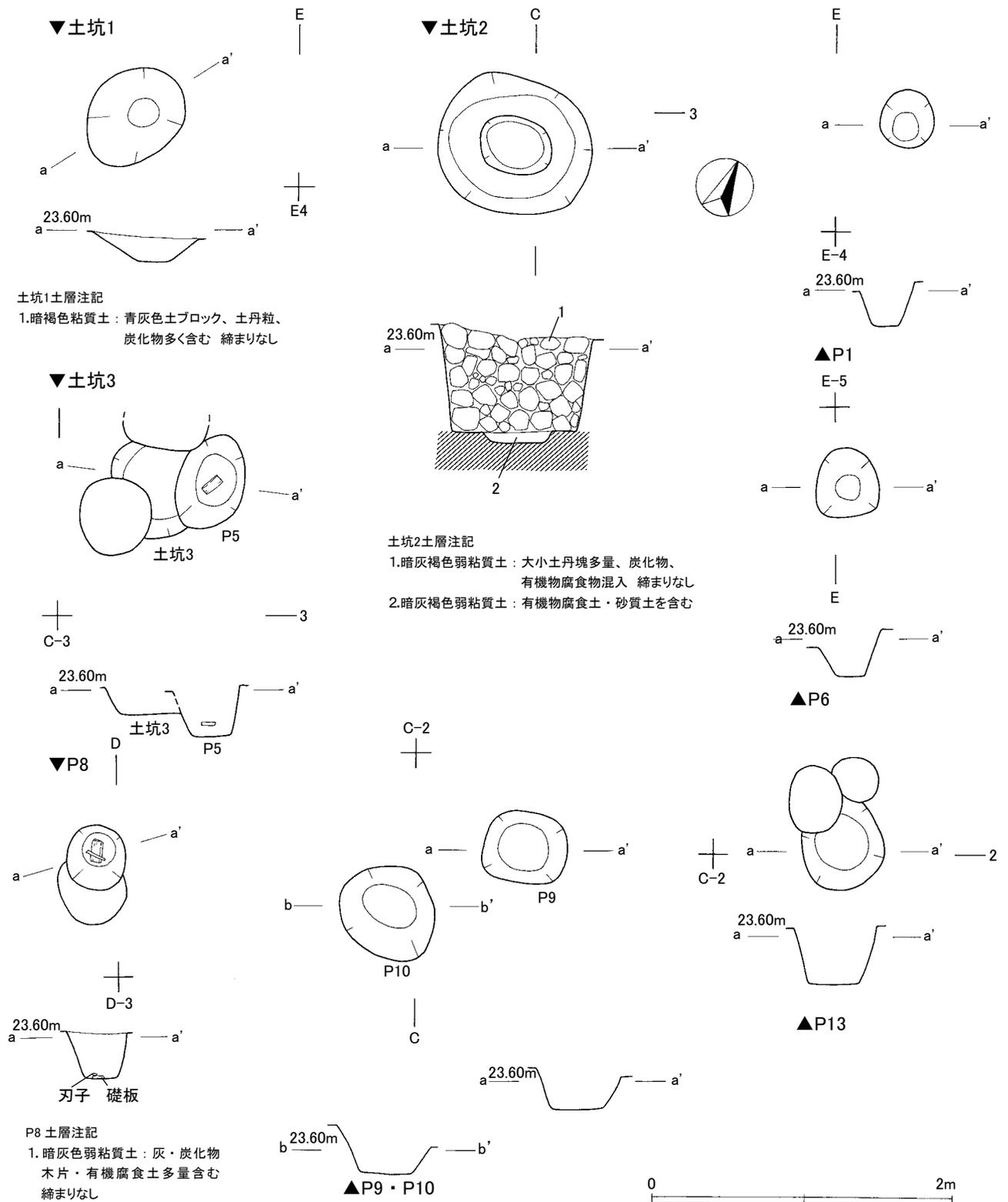


図 31 第5面土坑・ピット

P 9・10 は C - 3 杭の南側に位置する。P 9 は土坑 3・P 5 より新しい遺構である。形状は隅丸方形を呈し、長軸 56cm、短軸 46cm、深さ 30cm で覆土は暗灰色粘質土で炭化物・木端を多く含み、遺物は 8 が内湾の強い器形のかわらけ小皿、9 の常滑甕の底部片である。P 10 は不整円形を呈し、長径 70cm、短径 48cm、深さ 35cm の底面平坦な掘り方である。灰褐色粘質土の覆土中から 10 の常滑甕片を転用した摩耗陶片が 1 点出土した。P 13 は C - 2 杭東隣的位置で 2 穴のピットに掘削されたものである。形状は楕円形を呈し、大きさが長径 65cm、短径 48cm、深さ 40cm の底面平らな掘り方である。灰褐色粘質土の締りのない覆土中からは 11 の高め器高のかわらけ大皿が出土した。

第5面遺構外出土遺物(図33):遺構外遺物としたものは、第4面構築土(図5-11・12層)や遺構確認・検出に伴って出土したものである。1~5はロクロ成形かわらけで小皿が口径7.9cm前後の内湾器形を呈す、4・5の大中皿は薄手器壁であった。6~11の貿易陶磁器は6~8が龍泉窯青磁の鎬蓮弁文碗と折縁盤、9~11は白磁製品で9が印花文小皿で内面に型押し蓮華唐草文を施文、10・11の口兀皿は口縁部が外反気味の器形、口唇部内外は釉剥ぎ取りの露胎である。12~14は常滑窯産の片口鉢I類と壺、15は京都鳴滝産の仕上砥、16は木製品蓋物、17は銅製品掛金である。

第5面下南北トレンチ(図33・34):調査I区第5面の調査終了後に調査区西壁に沿って幅1mのトレンチを設定し、第5面以下の50~60cm深さにおいて生活面と中世基盤層にあたる灰褐色粘質土の確認を実施した。トレンチ調査による土層観察では、海拔高23.05mの中世地山面までの間に、拳大~頭大の土丹小塊を含む地形層の第6面(15層)が海拔高23.40m前後の高さで検出した。トレンチ調査に伴う遺物は少量であったが、図33-18・19のかわらけ小皿は口径・底径比が小さめで低い器高の資料である。

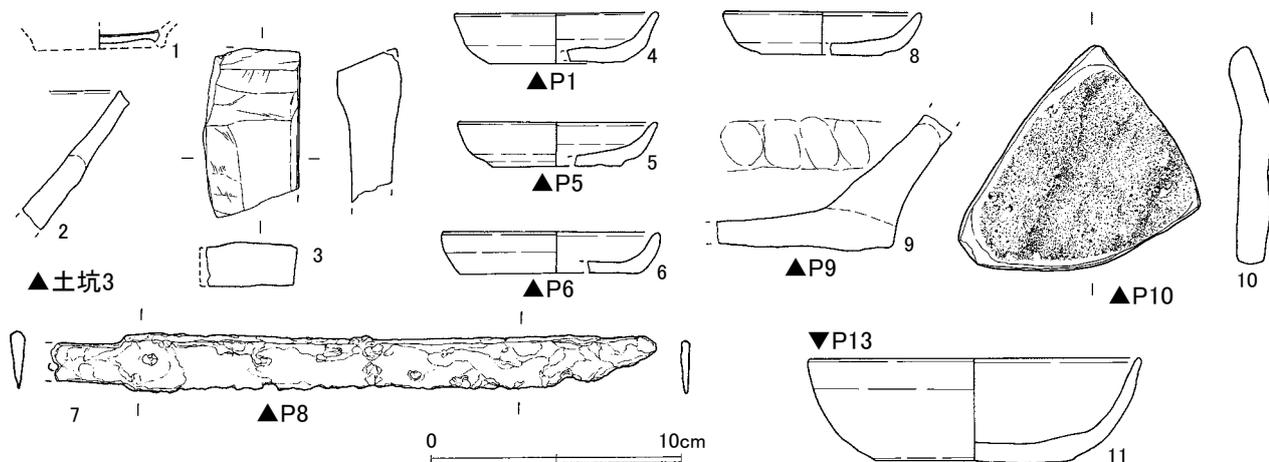


図32 第5面遺構出土遺物

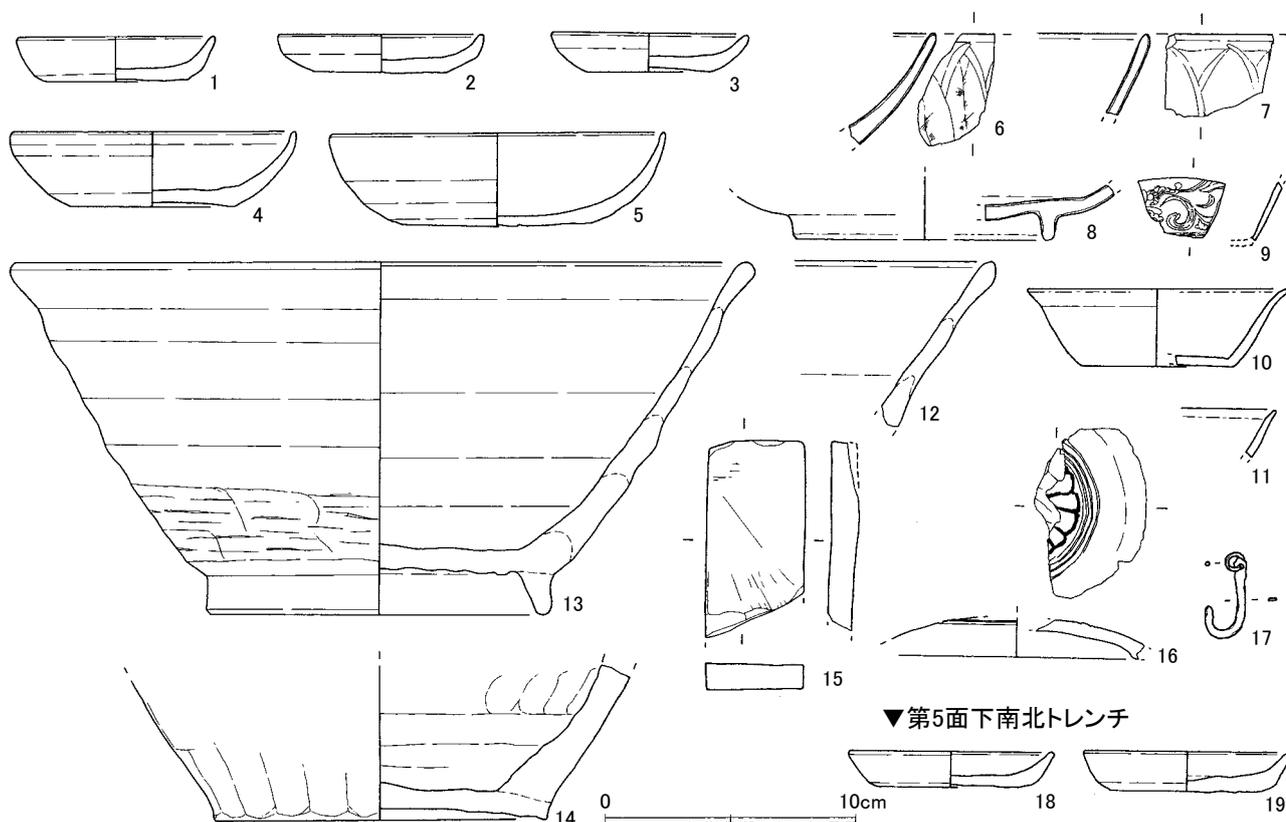


図33 第5面遺構外出土遺物

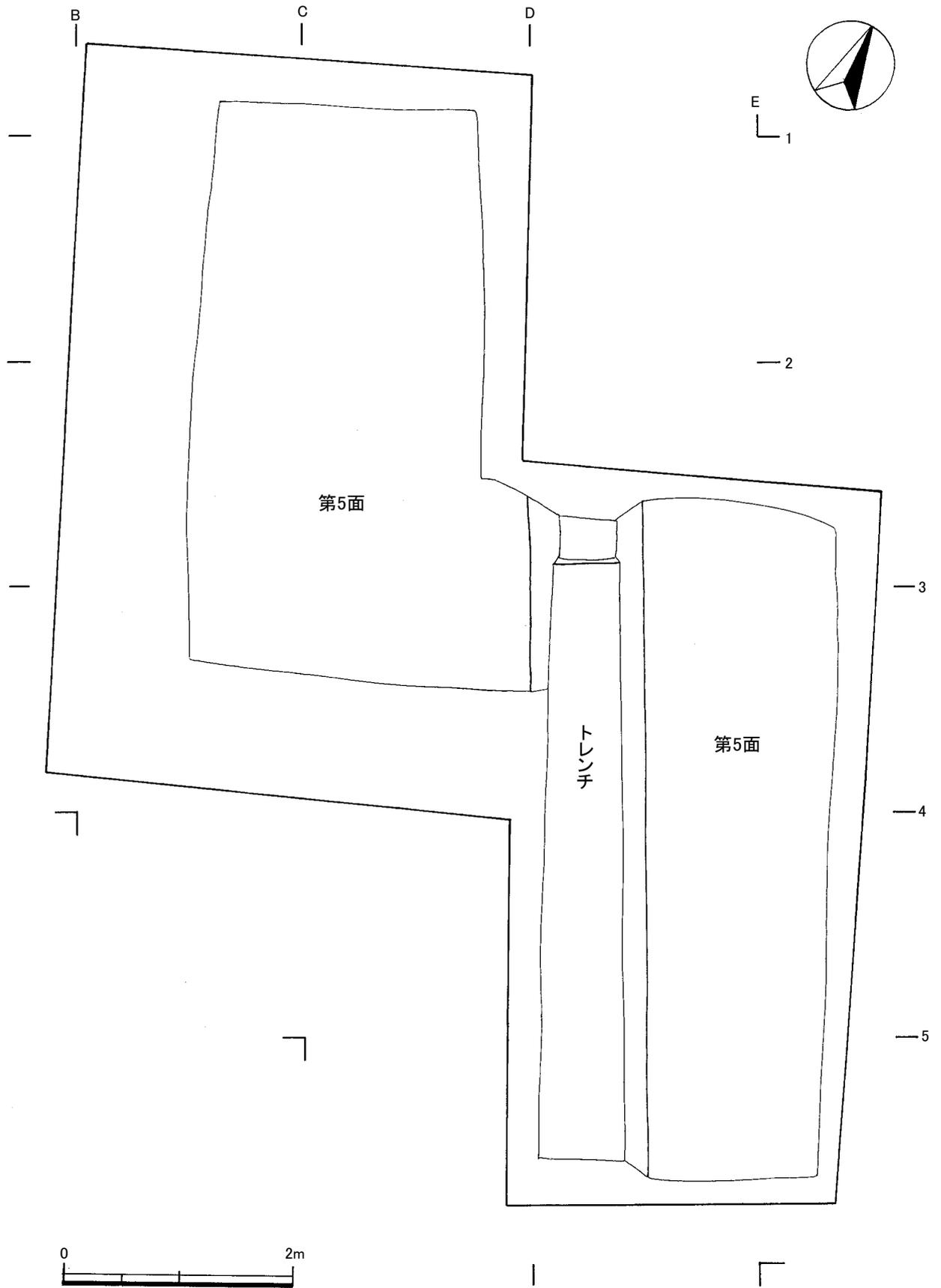


図 34 第5面南北トレンチ

表1 遺物観察表(1)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
図9-1	第1面建物1	かわらけ	7.5	5.1	1.8	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ やや良土 c. 橙色 e. 良好
図9-2	"	かわらけ	7.9	4.9	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒多め やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図9-3	"	かわらけ	7.5	5.3	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-4	"	かわらけ	(7.4)	(6.0)	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 橙色 e. 良好
図9-5	"	かわらけ	7.3	4.5	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや多い 粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-6	"	かわらけ	7.2	4.3	2.0	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 やや粉質良土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-7	"	かわらけ	7.9	5.0	1.9	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 砂質粗土 c. 黄灰色 e. 良好
図9-8	"	かわらけ	7.8	5.2	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質やや粗土 c. 淡黄色 e. 良好
図9-9	"	かわらけ	(7.3)	(4.3)	2.0	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-10	"	かわらけ	7.3	5.1	1.9	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多い 砂質粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図9-11	"	かわらけ	7.4	4.1	2.3	a. ロクロ 外底回転系切痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図9-12	"	かわらけ	7.7	5.7	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 砂質粗土 c. 黄灰色 e. 不良
図9-13	"	かわらけ	6.7	4.4	2.0	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手器壁 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質気味やや良土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-14	"	かわらけ	(7.1)	4.0	2.3	a. ロクロ 外底回転系切痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 良土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-15	"	かわらけ	7.3	4.4	2.2	a. ロクロ 外底回転系切痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質良土 c. 黄橙色 e. 良好
図9-16	"	かわらけ	7.3	4.6	2.0	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-17	"	かわらけ	7.8	5.3	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c. 黄灰色 e. 不良
図9-18	"	かわらけ	7.5	4.6	2.1	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. 不良 f. 口縁内外面に煤付着 灯明皿
図9-19	"	かわらけ	(7.2)	4.2	1.9	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-20	"	かわらけ	7.1	4.2	2.0	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ やや良土 c. 淡橙色 e. やや不良
図9-21	"	かわらけ	7.5	5.4	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. 不良
図9-22	"	かわらけ	7.5	4.6	1.9	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c. 黄灰色 e. 不良 f. 口縁内外面に煤付着 灯明皿
図9-23	"	かわらけ	7.4	5.3	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. 不良
図9-24	"	かわらけ	(10.5)	6.4	3.2	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ 粉質気味やや良土 c. 淡橙色 e. やや良好
図9-25	"	かわらけ	10.6	6.5	3.1	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ 良土 c. 橙色 e. 良好
図9-26	"	かわらけ	11.2	7.3	3.1	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図9-27	"	かわらけ	(11.0)	6.8	3.2	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ 良土 c. 橙色 e. 良好
図9-28	"	かわらけ	(10.9)	(6.3)	3.2	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 粉質良土 c. 黄橙色 e. やや不良
図9-29	"	かわらけ	11.2	6.5	2.9	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-30	"	かわらけ	(12.5)	7.5	3.1	a. ロクロ 外底回転系切痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c. 黄灰色 e. 不良

表2 遺物観察表(2)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
図9-31	第1面建物1	かわらけ	12.1	7.3	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや砂質粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-32	"	かわらけ	12.6	8.0	3.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-33	"	かわらけ	(12.8)	(7.5)	3.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-34	"	かわらけ	13.2	7.2	3.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 板状圧痕 赤色粒 やや砂質土 c. 橙色 e. 良好
図9-35	"	かわらけ	12.1	7.3	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 橙色 e. 良好
図9-36	"	かわらけ	12.5	6.3	3.7	a. ロクロ 粗めの外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図9-37	"	かわらけ	12.4	7.1	2.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 少なめ やや粉質気味良土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-38	"	かわらけ	(12.8)	(7.5)	3.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 少なめ やや良土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-39	"	かわらけ	13.0	7.4	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 砂質やや粗土 c. 黄灰色 e. 不良 f. 内外面煤付着 灯明皿
図9-40	"	かわらけ	13.1	7.9	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c. 橙色 e. 良好
図9-41	"	かわらけ	13.0	8.6	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-42	"	かわらけ	12.8	7.2	3.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 砂質粗土 c. 黄灰色 e. 良好
図9-43	"	かわらけ	(12.8)	6.4	3.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや砂質粗土 c. 黄灰色 e. 不良 f. 口縁内外面部分的に煤付着 灯明皿
図9-44	"	かわらけ	13.1	8.2	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 やや粉質土 c. 淡黄橙色 e. やや不良
図9-45	"	かわらけ	(12.7)	(7.8)	3.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 内底の指ナゲ弱くロクロ目を残す薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質気味やや良土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-46	"	かわらけ	13.3	7.9	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-47	"	かわらけ	13.2	6.7	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c. 橙色 e. 良好
図9-48	"	かわらけ	(12.9)	(7.4)	3.2	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質粗土 c. 淡黄橙色 e. 不良 f. 内部口縁～体部部分的に煤付着
図9-49	"	かわらけ	(12.7)	(7.1)	3.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ 良土 c. 黄橙色 e. 良好
図9-50	"	かわらけ	(13.0)	(7.9)	3.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c. 黄灰色 e. 不良
図9-51	"	かわらけ	13.1	7.6	3.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c. 橙色 e. 良好 f. 外底面に焼成後穿れた小孔あり
図9-52	"	かわらけ	13.0	7.6	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c. 淡橙色 e. 良好
図9-53	"	かわらけ	13.4	7.5	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. やや不良
図9-54	"	かわらけ	(13.6)	7.5	3.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒少なめ やや粉質良土 c. 橙色 e. 良好
図9-55	"	かわらけ	(14.9)	(8.0)	4.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ やや良土 c. 淡橙色 e. 良好 f. 大口径資料 底部厚手で体部薄目の器壁
図10-56	"	かわらけ	—	—	6.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ 粉質土 c. 淡橙色 e. 良好 f. 焼成後、外底部中央に貫通しない小穴あり
図10-57	"	瀬戸御皿	口縁～体部片			a. ロクロ 内底面にヘラで御目を刻む b. 精良堅緻 微砂 c. 明灰褐色 d. 口縁部に薄い灰釉 e. 良好
図10-58	"	常滑片口鉢I類	37.0	17.6	11.9	a. 輪積技法 内面横ナゲ 外面ヘラ削り b. 灰色 白色粒多い 黒色粒 砂粒 小石粒 やや粗土 c. 暗赤褐色 f. 内面降灰 内底一部剥離 外底砂付着
図10-59	"	瓦質火鉢	(27.4)	(16.3)	19.5	a. 輪積技法 口縁部やや肥厚する鉢形 内面横位ナゲ 砂目底 b. 淡赤灰色 小石粒 砂粒 c. 黒灰色 e. 良好
図10-60	"	瓦質火鉢	口縁部片			a. 輪積技法 口縁部やや肥厚 内面横ナゲ 外面縦位の篋ナゲ b. 黄橙色 小石粒 砂粒 c. 黒灰色 e. 良好 f. 内面器表が被熱で部分的に剥がれる

表3 遺物観察表(3)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
図10-61	第1面建物1	銅製品 銭	外径2.45 内径1.85 孔径0.55			f. 咸平元寶 北宋 初鑄998年
図10-62	"	銅製品 銭	外径2.45 内径2.05 孔径0.55			f. 天聖元寶 北宋 初鑄1023年
図10-63	"	木製品 蓋	径21.6 厚0.6			a. 板材を円形に加工した円板 中央小孔 f. 曲物の蓋板か
図10-64	"	木製品 蓋	径20.2 厚0.6			a. 板材を円形に加工した円板 中央小孔 周縁近く三角形の位置に桜皮紐を通した痕跡 f. 曲物の蓋板か
図10-65	"	木製品 用途不明	幅1.7~2.1 高1.5			a. 丸棒状に面取り加工 f. 用途不明
図10-66	"	木製品 用途不明	径2.3 厚2.1			a. 球状に面取り加工した f. 用途不明
図10-67	"	木製品 用途不明	幅2.5×2.3 高2.3			a. サイコロ状に加工 片面小穿孔 f. 蓋の摘みのようなものか
図10-68	"	木製品 毬	径7.7~8.3			a. 自然木を輪切り後、両切り口面を面取り削りで、球状に加工 f. 毬杖の球か
図10-69	"	木製品 箸	長22.8 幅0.5 厚0.4			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図10-70	"	木製品 箸	長23.0 幅0.5 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図10-71	"	木製品 箸	長(22.5) 幅0.6 厚0.4			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図10-72	"	木製品 箸	長21.8 幅0.5 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図10-73	"	木製品 箸	長(20.5) 幅0.6 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図10-74	"	木製品 箸	長20.1 幅0.7 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図10-75	"	木製品 箸	長20.0 幅0.6 厚0.2			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図10-76	"	木製品 箸	長19.1 幅0.5 厚0.5			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図10-77	"	木製品 箸	長19.9 幅0.6 厚0.5			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図10-78	"	木製品 箸	長19.0 幅0.4 厚0.4			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図10-79	"	木製品 箸	長19.0 幅0.5 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図10-80	"	木製品 箸	長18.8 幅0.5 厚0.5			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図11-81	第1面土坑1	かわらけ	7.1	5.0	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 多め 海綿骨芯 赤色粒 砂質 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
図11-82	"	かわらけ	7.7	5.2	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図11-83	"	かわらけ	7.7	5.2	1.8	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
図11-84	"	かわらけ	7.2	4.2	2.0	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図11-85	"	かわらけ	(10.9)	(6.3)	3.2	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い f. 口縁一部煤付着
図11-86	"	かわらけ	10.9	6.2	2.9	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 少なく 海綿骨芯 粉質良土 c. 橙色 e. 良好
図11-87	"	かわらけ	12.6	7.7	3.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c. 橙色 e. 良好
図11-88	"	かわらけ	12.8	7.6	3.4	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c. 黄橙色 e. 良好
図11-89	"	かわらけ	(12.6)	(7.3)	3.2	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図11-90	"	かわらけ	(12.5)	(7.0)	3.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好

表4 遺物観察表(4)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
図11-91	第1面土坑1	かわらけ	(12.5)	(7.4)	3.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図11-92	"	かわらけ	(12.6)	(7.0)	3.3	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂少なめ 海綿骨芯 粉質良土 c. 橙色 e. 良好 f. 内外底部一部煤付着 灯明皿
図11-93	"	かわらけ	(12.5)	(7.5)	3.3	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 粉質気味 良土 c. 橙色 e. 良好
図11-94	"	かわらけ	(12.7)	(6.9)	3.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図11-95	"	かわらけ	(13.3)	(6.4)	3.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 少量 粉質気味良土 c. 橙色 e. 良好
図11-96	"	青白磁 梅瓶	蓋			a. ロクロ b. 灰白色 精良堅緻 d. 青灰色透明 やや薄手施釉 貫入あり
図11-97	"	石製品 砥石	残存長2.6 幅2.6 厚0.9			a. 板状 f. 京都鳴滝産の仕上砥
図11-98	第1面溝1	かわらけ	(7.5)	(4.8)	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図11-99	"	かわらけ	(8.4)	(5.6)	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 低い器高 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 少量 良土 c. 黄灰色 e. やや甘い
図11-100	第1面P3	漆器 皿	—	(5.8)	—	a. ロクロ 薄い器壁 外底輪高台 f. 黒漆地に朱漆で植物を施文
図11-101	第1面P5	かわらけ	(12.5)	(6.7)	3.0	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 橙色 e. 良好
図11-102	第1面P6	かわらけ	(13.0)	(7.7)	3.4	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 少量 良土 c. 橙色 e. 良好
図11-103	第1面P7	かわらけ	7.7	5.0	1.8	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c. 橙色 e. 良好
図11-104	第1面P10	石製品 砥石	残存長11.1 幅5.0 厚3.6			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図12-1	表土～1層	瀬戸・美濃 染付碗	(9.3)	(3.2)	4.9	a. ロクロ 端反器形 削出し高台 b. 白色 精良土 d. 白色透明 薄い施釉 e. 良好 硬質 f. 端反茶碗 外面に笹と梅花文の染付施文
図12-2	"	肥前 染付瓶	—	4.9	—	a. 小瓶の徳利 b. 白色緻密 光沢あり d. 白色透明 薄く施釉 e. 良好 f. 外面に手描きの松葉文を染付施文
図12-3	"	瀬戸・美濃 灯明皿	(10.2)	(4.9)	1.9	a. ロクロ 外底回転系切痕 b. 灰色 精良土 d. 鉄釉 薄く刷毛塗り e. 良好 硬質 f. 受皿
図12-4	"	瀬戸・美濃 灯明皿	10.5	5.0	1.8	a. ロクロ 外底回転系切痕 b. 灰色 砂粒 精良土 d. 褐色 薄く灰釉 e. 良好 硬質
図12-5	"	備前系 播鉢	—	14.4	—	a. 外底回転系切痕 内面放射状に櫛描の掻き上げ条線 内外面横ナデ b. 赤褐色 白色粒 砂粒 小石粒 やや粗土 c. 褐色 f. 外底面砂付着
図12-6	"	かわらけ	(7.7)	4.4	2.3	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 白色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図12-7	"	かわらけ	7.5	4.2	1.8	a. ロクロ b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 底部と側壁に小孔 底面磨って放射線状の線刻
図12-8	第1面遺構外	かわらけ	(7.4)	(4.8)	2.0	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 やや良土 c. 黄橙色 e. 良好
図12-9	"	かわらけ	(7.2)	(4.1)	1.9	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質良土 c. 橙色 e. 良好
図12-10	"	かわらけ	(8.1)	(5.8)	1.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図12-11	"	かわらけ	(11.8)	(5.9)	2.8	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c. 黄橙色 e. 良好
図12-12	"	龍泉窯青磁 折腰皿	口縁～体部小片			a. ロクロ b. 灰色 精良堅緻 d. 灰褐色透明 薄手施釉 貫入あり
図12-13	"	常滑 甕	底部片			a. 輪積技法 b. 淡赤褐色～灰色 白色粒 砂粒 小石粒少量 やや粗土 c. 淡赤褐色～赤褐色 f. 破損後に二次焼成を受けている
図12-14	"	女瓦(平瓦)	厚1.5～1.9			a. 凹面: 布目痕 凸面: 斜格子叩目痕 側縁角指ナデ b. 灰白色 砂粒 土丹粒 赤色粒 粗土 c. 明灰色 e. やや甘い f. 凹凸面離れ砂付着
図12-15	"	石製品 磨石	長8.5 幅4.5 厚3.6			b. 安山岩質の河原石 f. 全体的に摩耗しているが上面中央部の摩耗著しい
図12-16	"	滑石不明品	残存長3.1 幅3.8 厚1.2			a. 滑石鍋を転用加工したもの f. 上面・側面を刃物の削り成形 表面が煤け温石の可能性あり

表5 遺物観察表(5)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
図12-17	第1面遺構外	鉄製品	残存長1.0 幅3.3 厚0.2			f. 不明品 細長め板状で刀子の茎部の可能性も考えられる
図12-18	"	漆器 皿	(7.8)	(6.0)	0.8	a. ロクロ 薄手器壁 無高台 f. 黒漆塗りに朱漆手描きで鶴の施文か
図12-19	"	漆器 皿	(8.9)	(7.0)	1.2	a. ロクロ 薄手器壁 無高台 f. 黒漆塗りに朱漆手描きで鶴の施文か
図12-20	"	木製品 箸	長21.0 幅0.6 厚0.5			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図12-21	"	木製品 箸	長19.6 幅0.5 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図12-22	"	木製品 箸	長(17.8) 幅0.4 厚0.4			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図15-1	第2面土坑1	常滑加工陶片	長12.5 幅9.5 厚1.5			b. 褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 c. 褐色 e. 硬質 f. 甕底部を丸く再加工して転用 表面に黒色漆と思わしき物質が付着
図15-2	"	瓦質火鉢	底縁～体部小片			a. 輪積技法 鉢形 内面が被熱で部分剥離 外面横ナデ b. 灰色 砂粒 白色粒 小石粒 c. 表面灰黒色
図15-3	第2面土坑2	かわらけ	7.0	4.9	1.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図15-4	"	かわらけ	7.5	5.8	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 良土 c. 黄灰色 e. やや不良
図15-5	"	かわらけ	(11.7)	(8.0)	3.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 良土 c. 黄灰色 e. やや不良
図15-6	"	かわらけ	(12.6)	(8.9)	2.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図15-7	"	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁～体部片			a. 内外面横ナデ b. 灰色 白色粒 砂粒 小石粒 やや粗土 c. 灰色 e. 硬質
図15-8	"	漆器 椀	—	(7.0)	—	a. ロクロ 薄手器壁 輪高台 f. 黒漆塗りに無文椀
図15-9	第2面土坑3	かわらけ	7.2	4.3	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図15-10	"	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部小片			a. 輪積技法 b. 灰褐色 黒色粒 長石粒 粗土 c. 茶褐色 e. 良好 硬質 f. 色調は片口鉢Ⅱ類に近い
図15-11	"	漆器 皿	(9.7)	(7.1)	1.6	a. ロクロ 薄手器壁丁寧な作り 輪高台 f. 全面黒漆塗りに無文
図15-12	"	漆器 皿	(9.4)	(3.5)	1.4	a. ロクロ 薄手器壁丁寧な作り 輪高台 f. 全面黒漆塗りに無文
図15-13	"	漆器 椀	口縁～体部片			a. ロクロ 薄手器壁 f. 黒漆地に朱漆で柏葉風の葉を内外面に施文 葉脈は掻き取りで表す
図15-14	"	木製品 曲物	径15.6 高11.7 底板厚0.6			a. 円形の底板上に薄い板材を撒き付けて側板を接合 側板は2重に巻き付け接合部が桜皮紐を通し綴じている
図15-15	"	木製品 板杓子	長32.0 幅5.5 厚0.5			a. 板材を長丸型に削り成形 身と柄の長さがほぼ同じ f. 身と柄の境がなだらかな作り
図15-16	"	木製品 箸	長19.8 幅0.5 厚0.4			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図15-17	"	木製品 箸	長20.2 幅0.6 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図15-18	"	木製品 箸	長21.0 幅0.5 厚0.5			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図15-19	"	木製品 箸	長21.3 幅0.5 厚0.4			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図15-20	"	木製品 箸	長21.6 幅0.6 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図15-21	"	木製品 箸	長22.0 幅0.6 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図15-22	"	木製品 箸	長22.3 幅0.6 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図15-23	"	木製品 箸	長23.0 幅0.5 厚0.2			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図15-24	"	木製品 箸	長24.2 幅0.7 厚0.2			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工

表6 遺物観察表(6)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
図17-1	第2面溝1	かわらけ	7.2	4.7	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 口唇部煤付着 灯明皿 打ち欠き痕あり
図17-2	"	かわらけ	7.2	4.9	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 内面煤付着 灯明皿
図17-3	"	かわらけ	7.6	5.3	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡黄橙色 e. 良好
図17-4	"	かわらけ	7.6	5.4	1.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. 良好 f. 二次焼成を受ける 内外面共に煤付着
図17-5	"	かわらけ	7.6	5.3	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡黄橙色 e. 良好
図17-6	"	かわらけ	8.0	5.6	2.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. 良好
図17-7	"	かわらけ	8.1	5.4	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図17-8	"	かわらけ	8.1	5.7	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多く 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c. 淡黄橙色 e. 良好 f. 内外面共に煤付着 灯明皿
図17-9	"	かわらけ	(11.9)	(7.8)	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 内面焼けて暗赤褐色
図17-10	"	かわらけ	12.2	7.0	3.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図17-11	"	かわらけ	12.4	7.5	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c. 橙色 e. 良好
図17-12	"	かわらけ	(12.3)	(7.8)	3.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図17-13	"	かわらけ	13.4	8.4	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c. 黄橙色 e. 良好 内外器表面煤けて暗灰色 増埒か
図17-14	"	かわらけ	13.6	7.8	3.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ 粉質やや良土 c. 黄橙色 e. 良好
図17-15	"	かわらけ	(11.3)	(6.2)	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒・土丹粒多め やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図17-16	"	かわらけ	12.0	6.5	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多く 粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図17-17	"	かわらけ	(13.4)	(7.7)	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図17-18	"	青白磁 水注	底部小片			a. ロクロ b. 灰色 精良堅緻 d. 緑味を帯びた灰色不透明 薄手施釉 外底露胎 f. 二次焼成を受けている
図17-19	"	常滑 甕	肩部片			a. 輪積技法 内面に指頭痕と横ナデ 外面に平行状叩き目 b. 灰褐色 長石粒 黒色粒 粗土 c. 暗灰色 e. 硬質
図17-20	"	石製品 砥石	残存長7.2 幅3.3 厚0.7~2.0			a. 砥面は上下面 中央部が磨滅して極端に凹む b. 黄色味灰白色 凝灰岩系 f. 中砥で伊予産
図17-21	"	石製品 硯	残存長6.8 幅8.7 厚2.3			a. 異形硯 池部端は円弧状を成し 周縁に亀と波頭文をイメージした模様の線彫 外縁は自然石風になる c. 緑灰~暗緑色 f. 頁岩
図17-22	"	漆器 皿	口縁~体部小片			a. ロクロ 薄器壁丁寧な作り f. 黒漆地に内面と外面とも朱漆を塗る 外面底部近く朱漆が剥がれ黒色漆が露呈する
図17-23	"	木製品 草履芯	残存長13.8 幅10.2 厚0.3			a. 二枚の薄板を合わせ芯にして表裏に藁を編み込む 先端部内寄りに 小孔 合わせ目に切り込み痕 藁状の繊維質圧痕 f. 金剛草履
図17-24	"	木製品 草履芯	残存長11.5 残存幅5.0 厚0.2			a. 草履の薄板芯の片面 小孔ないので下側部か 表裏に藁状の繊維質圧痕 f. 金剛草履
図17-25	"	木製品 箸	長19.4 幅0.6 厚0.5			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図17-26	"	木製品 箸	長19.1 幅0.6 厚0.5			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図17-27	"	銅製品 銭	外径2.51 内径2.07 孔径0.77			f. 嘉祐元寶 北宋 初鑄1056年
図17-28	"	銅製品 銭	外径2.36 内径1.85 孔径0.54			f. 元符通寶 北宋 初鑄1098年
図17-29	第2面 P 3	かわらけ	(8.6)	(5.8)	2.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図17-30	"	鉄製品 鎌	残存長14.3 幅3.1 厚0.2			a. 刃部~茎の一部 全体的な形は残すも錆化の腐食が著しく断面の様子はやや不明

表7 遺物観察表(7)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
図17-31	第2面P 3	木製品 栓	長7.3 径1.1~1.7			a. 丸棒状に削り先端側をやや細めに加工 f. 木栓のようなものか
図17-32	"	木製品 箸	長19.1 幅0.8 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図17-33	"	木製品 箸	長19.1 幅0.3 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図17-34	"	木製品 箸	長19.1 幅0.8 厚0.2			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図17-35	第2面P 5	かわらけ	(7.9)	(5.4)	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図17-36	第2面P 6	かわらけ	(7.2)	(4.7)	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 外面煤付着 灯明皿
図17-37	第2面P 8	かわらけ	(7.0)	(4.5)	1.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ 粉質気味やや良土 c. 淡黄橙色 e. やや不良
図17-38	"	かわらけ	(7.3)	(4.5)	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 穿孔かわらけ
図17-39	"	漆器 皿	(9.2)	(7.0)	1.0	a. ロクロ 薄手器壁丁寧な作り 低い平高台 f. 内面朱漆塗り 外面黒漆塗り 無文
図17-40	第2面P 9	かわらけ	(12.3)	(7.8)	3.4	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多く 粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 内外面煤付着 灯明皿
図17-41	第2面建物1 P12	かわらけ	(7.5)	(4.6)	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 良土 c. 黄灰色 e. やや不良
図17-42	"	かわらけ	(11.8)	(7.0)	2.95	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図17-43	"	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部小片			a. 輪積技法 内面横ナデ 外面底部脇はへら削り b. 灰褐~黒灰色 長石粒 砂粒 c. 褐色 e. 硬質 f. 内面に黒色物質付着
図17-44	第2面建物1 P13	かわらけ	(12.4)	(6.8)	3.0	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c. 黄灰色 e. やや不良
図17-45	"	木製品 蓋	径7.7 厚0.7 小孔径0.3			a. 板材を円形に加工 中央小孔 f. 中央の小孔を中心に摘みの痕跡が長方形の圧痕がうすく残る
図17-46	第2面P15	かわらけ	(13.0)	(6.9)	3.3	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c. 橙色 e. 良好
図17-47	"	石製品 砥石	長7.5 幅3.5 厚1.1			a. 長方形 上下面の砥面 c. 明黄灰色 f. 仕上砥 京都鳴滝産
図17-48	第2面P16	かわらけ	(7.2)	(5.2)	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c. 黄灰色 e. やや不良
図17-49	第2面建物1 P18	龍泉窯青磁 摩耗片	底部小片			a. 青磁縁部皿の底部片 割口面の周囲摩耗 b. 灰白色 精良堅緻 d. 青灰色 半透明 厚手施釉 貫入・気泡あり
図17-50	第2面建物1 P19	龍泉窯青磁 鎚蓮弁文碗	口径(15.6)			a. ロクロ b. 灰白色 黒色微砂 精良堅緻 d. 灰色透明 やや薄手施釉 f. 外面に鎚蓮弁文片切彫り
図17-51	第2面P21	かわらけ	12.5	7.0	3.45	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 内底面に滲鉄付着
図17-52	第2面P25	常滑 甕	口縁部片			a. 輪積技法 内面:横ナデ 指頭痕 外面:横ナデ自然降灰 b. 灰色 白色粒 黒色粒 砂粒 粗土 c. 暗褐色 e. 硬質 f. 降灰部:灰オリーブ色
図18-1	第2面遺構外	かわらけ	6.5	4.3	2.2	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 口唇部煤付着 灯明皿
図18-2	"	かわらけ	7.0	4.5	1.9	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 赤色粒少量 良土 c. 黄橙色 e. 良好
図18-3	"	かわらけ	(7.1)	(4.3)	1.9	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. やや不良
図18-4	"	かわらけ	(7.2)	(6.9)	2.3	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 粉質気味良土 c. 黄橙色 e. 良好
図18-5	"	かわらけ	(7.1)	(3.6)	2.0	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深気味 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c. 淡橙色 e. やや不良 f. 底部中央に焼成後の穿孔
図18-6	"	かわらけ	(7.4)	(5.2)	2.1	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. やや不良
図18-7	"	かわらけ	7.0	4.8	2.2	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多め やや粗土 c. 淡橙色 e. やや不良
図18-8	"	かわらけ	7.2	4.8	1.8	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 赤色粒少なめ 粉質気味やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好

表8 遺物観察表(8)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
図18-9	第2面遺構外	かわらけ	(6.8)	(4.9)	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図18-10	"	かわらけ	7.8	4.7	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 焼きムラあり
図18-11	"	かわらけ	7.3	4.5	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. 不良
図18-12	"	かわらけ	(7.2)	(4.6)	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質やや良土 c. 淡黄橙色 e. 良好
図18-13	"	かわらけ	(7.4)	(4.7)	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多く 土丹粒 粗土 c. 淡橙色 e. やや不良
図18-14	"	かわらけ	(7.3)	(5.0)	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 淡黄橙色 e. 良好 f. 全体に煤付着 灯明皿
図18-15	"	かわらけ	7.3	5.4	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質気味粗土 c. 淡黄色 e. 不良
図18-16	"	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多め やや粗土 c. 黄灰色 e. 不良
図18-17	"	かわらけ	7.7	5.8	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図18-18	"	かわらけ	7.6	5.7	1.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多く 土丹粒 粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図18-19	"	かわらけ	8.0	6.1	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多く 粗土 c. 淡黄色 e. やや不良
図18-20	"	かわらけ	(7.9)	(5.4)	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c. 淡黄色 e. 不良 f. 口唇部煤付着 灯明皿
図18-21	"	かわらけ	8.1	5.9	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. 不良
図18-22	"	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒多め やや粗土 c. 黄灰色 e. 良好
図18-23	"	かわらけ	(7.9)	(5.3)	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図18-24	"	かわらけ	7.7	5.7	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 良土 c. 黄橙色 e. 良好
図18-25	"	かわらけ	(8.0)	(5.1)	2.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多く 粗土 c. 淡黄色 e. やや不良
図18-26	"	かわらけ	8.3	5.9	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡黄色 e. やや不良 f. 外面煤付着 灯明皿
図18-27	"	かわらけ	(7.7)	(5.4)	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質気味やや良土 c. 淡黄橙色 e. 良好
図18-28	"	かわらけ	7.9	6.4	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 淡黄色 e. やや不良
図18-29	"	かわらけ	7.9	5.0	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 淡黄色 e. 不良
図18-30	"	かわらけ	(7.8)	(5.3)	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図18-31	"	かわらけ	(7.9)	(5.9)	2.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多い 粗土 c. 淡黄色 e. やや不良
図18-32	"	かわらけ	10.4	5.8	3.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良 f. 内外面煤付着 灯明皿か
図18-33	"	かわらけ	10.9	6.3	3.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 粉質良土 c. 黄橙色 e. 良好
図18-34	"	かわらけ	(10.7)	(7.0)	2.85	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図18-35	"	かわらけ	11.6	6.8	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図18-36	"	かわらけ	11.9	7.3	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図18-37	"	かわらけ	11.9	6.8	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 粉質気味良土 c. 黄灰色 e. やや不良
図18-38	"	かわらけ	(11.3)	(6.5)	3.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c. 橙色 e. 良好 f. 内面煤付着 灯明皿

表9 遺物観察表(9)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
図18-39	第2面遺構外	かわらけ	11.3	6.1	2.9	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 粉質良土 c. 橙色 e. 良好
図18-40	"	かわらけ	12.3	7.5	3.0	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒多い 粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図18-41	"	かわらけ	(11.4)	(6.8)	3.1	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 土丹粒 やや粉質良土 c. 橙色 e. 良好
図18-42	"	かわらけ	11.5	7.2	3.2	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ 良土 c. 黄橙色 e. 良好
図18-43	"	かわらけ	12.2	7.3	3.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図18-44	"	かわらけ	(12.4)	(7.0)	3.1	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多め やや粗土 c. 淡黄灰色 e. 良好
図18-45	"	かわらけ	12.2	7.0	3.4	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 粉質良土 c. 橙色 e. 良好 f. 内面口縁部に煤付着 灯明皿か
図18-46	"	かわらけ	12.0	7.0	3.2	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図18-47	"	かわらけ	12.3	6.2	3.0	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図18-48	"	かわらけ	12.4	7.7	3.2	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図18-49	"	かわらけ	12.4	7.8	3.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 砂質 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図18-50	"	かわらけ	13.1	8.1	3.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図18-51	"	かわらけ	12.9	7.1	3.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c. 橙色 e. 良好
図18-52	"	かわらけ	13.0	7.6	3.2	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 粉質良土 c. 黄灰色 e. やや不良 f. 内外面煤付着 灯明皿か
図18-53	"	かわらけ	(13.5)	(8.6)	3.55	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図18-54	"	かわらけ	13.2	6.7	3.4	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 粉質良土 c. 黄橙色 e. 良好
図18-55	"	かわらけ	13.2	7.0	3.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 粉質気味良土 c. 橙色 e. 良好
図18-56	"	かわらけ	(13.2)	(8.3)	3.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 やや粉質良土 c. 黄橙色 e. 良好
図18-57	"	かわらけ	13.4	8.3	3.4	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図18-58	"	かわらけ	13.4	7.1	3.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 粉質良土 c. 橙色 e. 良好
図18-59	"	かわらけ	13.7	8.2	3.3	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図18-60	"	かわらけ	(13.8)	(7.0)	3.4	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図19-61	"	青白磁 水注	肩部～底部片			a. ロクロ b. 灰白色 精良堅緻 d. 青灰色半透明 薄手施釉 貫入 気泡あり f. 二次焼成により釉肌荒れる
図19-62	"	青白磁 水注	体部小片			a. ロクロ 瓜形 b. 白色 精良堅緻 d. 青白色半透明 やや薄手施釉 気泡 ピンホールあり 内面露胎
図19-63	"	青白磁 梅瓶蓋	天部小片			a. ロクロ b. 灰白色 精良堅緻 d. 青白色透明 やや薄手施釉 気泡 貫入あり f. 上面に線刻施文あり
図19-64	"	瀬戸 香炉	(9.7)	—	—	a. ロクロ b. 灰白色 白色粒 良土 d. 黒褐色～暗緑灰色 鉄釉 薄手施釉 f. 外面に蕨手文風の線刻模様あり
図19-65	"	瀬戸 折縁皿	—	(10.2)	—	a. ロクロ b. 黄白色 小石粒 良土 d. 黒褐色～茶褐色 鉄釉 内底面まで薄手施釉 f. 外底面煤付着
図19-66	"	瀬戸 卸皿	(14.0)	—	—	a. 口縁外反気味 口唇部が外側へ傾斜 片口つく b. 灰白色 砂粒 良土 d. 緑灰色灰釉 漬け掛け薄く施釉 e. 良好 f. 内底の卸目は浅く荒い
図19-67	"	瀬戸 卸皿	口縁部小片			a. 口縁外反 横ナデ b. 灰白色 精良土 d. 淡い灰緑色の灰釉 漬け掛け薄手施釉 e. 良好
図19-68	"	瀬戸 入子	(3.6)	2.2	1.8	a. ロクロ 外底回転系切痕 b. 黄灰色 白色粒 砂粒 良土 d. 内面に自然降灰 f. 内面摩耗

表 10 遺物観察表 (10)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
図19-69	第2面遺構外	瀬戸 入子	(6.4)	(3.1)	2.2	a. ロクロ 外面下～外底へラ削り b. 灰色 砂粒 精良土 d. 口縁内面に自然降灰 e. 良好 f. 二次焼成か割れ口焦げる
図19-70	〃	常滑 壺	体部小片			a. 輪積技法 内面に指頭痕・横位ナデ 外面に一条沈線 b. 暗灰色 長石粒 黒色粒 c. 灰褐色 e. 硬質
図19-71	〃	常滑 甕	口縁部			a. 輪積技法 b. 灰～暗灰色 砂粒 長石粒少ない c. 暗灰色 e. 硬質 f. 口縁内外面に自然降灰
図19-72	〃	常滑 甕	口縁～肩部片			a. 輪積技法 内面横ナデ 指頭痕 外面横ナデ b. 灰色 白色粒少粒 砂粒 c. 灰色 e. 硬質
図19-73	〃	常滑 甕	肩部片			a. 輪積技法 内面横ナデ 指頭痕 外面叩き目痕 b. 灰色 長石 黒色粒 砂粒 堅緻 c. 茶褐色 e. 硬質 f. 外面に灰緑色自然降灰
図19-74	〃	常滑 甕	胴部片			a. 輪積技法 内面横位ナデ指頭痕 外面叩き目痕 b. 灰色 砂粒 長石 石英粒 粗土 c. 暗灰色 e. 硬質
図19-75	〃	常滑 甕	胴部片			a. 輪積技法 内面横ナデ 指頭痕 外面格子目叩き痕 b. 暗灰色 砂粒 長石粒 黒色粒 やや粗土 c. 暗灰褐色 e. 硬質
図19-76	〃	常滑 甕	底部片			a. 輪積技法 内面:指頭痕 自然降灰 外面:へラ削り b. 灰色 砂粒 白色粒 c. 黒褐色 e. 硬質 f. 外底面砂付着
図19-77	〃	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部片			a. 輪積技法 内面横ナデ 指頭痕 外面底部脇はへラナデ 砂目底 b. 灰色 砂粒 長石粒 石英粒 c. 茶褐色 e. 硬質 f. 内底使用による磨滅
図19-78	〃	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部片			a. 輪積技法 内面横ナデ 指頭痕 外面底部脇はへラナデ 砂目底 b. 灰色 砂粒 長石粒多め c. 灰褐色 e. 硬質 f. 内底使用による磨滅
図19-79	〃	鏡瓦(軒丸瓦)	瓦当径(12.9)			a. 内区左廻り巴文 外区小珠文 背面横位ナデ 瓦当面に黒色微砂の離れ砂 b. 灰白色 黒色粒 土丹粒 夾雑物多い 粗土 c. 灰褐色
図19-80	〃	女瓦(平瓦)	厚1.5			a. 凹面布目痕 凸面叩き締め後に荒くナデ消す 内外面微砂の離れ砂 b. 灰白色 砂粒 小石粒 粗土 c. 表面灰黒色 f. 永福寺Ⅲ期女瓦と同類
図20-81	〃	石製品 硯	残存長8.7 幅7.4			a. 表裏面が全て剥離 両側面滑らか調整 f. 京都鳴滝産
図20-82	〃	石製品 硯	残存長6.4 幅5.7			a. 表裏面剥離したものを粗く再加工 側面調整 c. 黒灰色 f. 京都鳴滝産系と思われる
図20-83	〃	石製品 砥石	残存長3.1 幅3.3 厚0.8			a. 板状 上下砥面 使用擦痕あり c. 黄白色 f. 側面切り出し痕 京都鳴滝産 仕上砥
図20-84	〃	石製品 砥石	残存長3.6 幅3.4 厚0.8			a. 板状 上下砥面 使用擦痕あり c. 黄白色 f. 側面切り出し痕 京都鳴滝産 仕上砥
図20-85	〃	石製品 砥石	残存長4.7 幅3.0 厚1.7			a. 残存部で3面を砥面使用 b. 流紋岩質の粗粒凝灰岩 c. 乳白色 斑点状赤味あり f. 天草産 中砥
図20-86	〃	石製品 火打石	長3.9 幅2.7 高1.8			a. 表面に何箇所も敲打痕を残した火打石 b. 白色の石英質 f. 火を受け煤けて黒くなる
図20-87	〃	石製品 研磨軽石	長5.0 幅4.5 高2.7			a. 隅丸台形状で各面に研磨した痕跡あり b. 流紋岩質で多孔なもの c. 灰白色 f. 裏面に一条の窪みの加工痕
図20-88	〃	骨角製品 筭	残存長9.9 幅1.4 厚0.2			a. 平板状で片側端が細まる器形 丁寧な削りと磨きを施す
図20-89	〃	銅製品 銭	外径2.32 内径1.95 孔径0.61 厚0.15			f. 治平元寶 北宋 初鑄1064年
図20-90	〃	銅製品 銭	外径2.48 内径1.97 孔径0.67 厚0.12			f. 元豊通寶 北宋 初鑄1078年
図20-91	〃	漆器 皿	(10.4)	(6.7)	1.2	a. ロクロ 薄手器壁で丁寧な作り 無高台 f. 両面黒漆塗り 朱漆で内面と外面側壁に草花文を手描き施文
図20-92	〃	漆器 皿	(9.6)	(6.8)	1.1	a. ロクロ 薄手器壁で丁寧な作り 無高台 f. 両面黒漆塗り 朱漆で内面と外面側壁に草花文を手描き施文
図20-93	〃	漆器 皿	(9.4)	8.0	0.7	a. ロクロ 薄手器壁で丁寧な作り 無高台 f. 両面黒漆塗り 朱漆で内底面に飛鶴文を手描き施文
図20-94	〃	漆器 蓋	残存長11.4			a. ロクロ挽きの黒漆塗りの蓋 上面は甲高で有段状に削る 中央に摘みもつ 厚手器壁
図20-95	〃	木製品 櫛	残存長2.6 残存高8.7			a. 横長で棟が幅広く緩やかな山型 歯の目を細かく密に切り出す 断面蛤形 f. 梳櫛 両耳部を欠失
図20-96	〃	漆製品 雲形肘木	残存長6.0 高2.9 厚0.4～0.7			a. 黒漆塗り雲形の肘木 f. 形状から丸膳や方形膳の膳足(脚部)に付属する装飾的なもの
図20-97	〃	木製品 白形代	4.7	3.4	4.4	a. 断面形がバケツ形を呈し、上面内側を彫込んで白のような形状 f. 白形を呈した形代のもうなものと考えられる
図20-98	〃	木製品 小円盤	径3.1 厚0.15			a. 折敷のような薄板を円形に加工したもの 下側周縁部に小孔 f. 用途不明

表 11 遺物観察表 (11)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
図20-99	第2面遺構外	木製品 独楽	径3.1 厚0.7 残存高3.1			a. 円盤の中央の穿孔中に下端を細くした木釘状のものが残る f. 軸は箸を転用したような丸棒 独楽と考えられる
図20-100	"	木製品 下駄	上部 残存長22.2 幅9.3 厚1.1 歯部 残存高 前歯2.5 後歯2.0			a. 台部と歯部とを一木から削り出した連歯下駄 台部に前緒 I カ所と横緒 2 カ所の穿孔あり f. 台部には刃物成形痕が残る
図20-101	"	木製品 草履芯	残存長23.5 幅5.1 厚0.2			a. 草履の薄板芯の片側 先端に小孔あけ 側縁部やや後方に方形切り込み f. 金剛草履
図20-102	"	木製品 菜箸	長18.2 幅1.0 厚0.5			a. 細い縦割り板を刃物で断面多角形に粗く棒状に削り 片端を尖り気味に成形
図20-103	"	木製品 箸	長19.0 幅0.6 厚0.5			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図20-104	"	木製品 箸	長22.6 幅0.6 厚0.5			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図23-1	第3面建物1	かわらけ	7.3	4.5	2.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 少量 粉質気味良土 c. 黄橙色 e. 良好
図23-2	"	かわらけ	(7.7)	(5.7)	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 白色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡黄色 e. やや不良
図23-3	"	かわらけ	(7.7)	(5.2)	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 白色粒 土丹粒 粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図23-4	"	かわらけ	(12.8)	(7.2)	3.2	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 白色粒 土丹粒 粗土 c. 黄橙～黄灰色 e. やや不良 f. 焼きムラあり
図23-5	"	木製品 箸	長19.3 幅0.5 厚0.4			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図23-6	"	木製品 箸	長19.4 幅0.6 厚0.5			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図23-7	"	木製品 箸	長19.3 幅0.5 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図23-8	"	木製品 箸	長19.6 幅0.5 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図23-9	"	木製品 箸	長20.3 幅0.6 厚0.4			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図23-10	"	木製品 箸	長20.0 幅0.5 厚0.5			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図23-11	"	木製品 箸	長20.5 幅0.5 厚0.5			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図23-12	"	木製品 箸	長20.8 幅0.5 厚0.4			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図23-13	"	木製品 箸	長21.4 幅0.7 厚0.2			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図23-14	"	木製品 箸	長21.7 幅0.6 厚0.4			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図23-15	"	木製品 箸	長21.8 幅0.6 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図23-16	"	木製品 箸	長23.0 幅0.6 厚0.5			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図23-17	"	木製品 箸	長23.5 幅0.4 厚0.4			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図23-18	第3面土坑3	かわらけ	(8.0)	(5.9)	1.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図23-19	"	かわらけ	(8.2)	(6.2)	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図23-20	"	かわらけ	(12.0)	(7.5)	2.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良 f. 口縁部煤付着
図23-21	"	かわらけ	(12.7)	(6.9)	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図23-22	"	かわらけ	(13.2)	(7.7)	3.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多め やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図23-23	"	瓦質火鉢	口縁部小片			a. 輪積技法 口縁部やや肥厚 内面横ナデ 外面縦位の篋ナデ b. 黄橙色 砂粒 c. 黒灰色 e. 良好 f. 内面器表が被熱で部分的に剥がれる
図23-24	第3面土坑4	かわらけ	(7.0)	(4.7)	1.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多く 土丹粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. やや良好

表 12 遺物観察表 (12)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
図23-25	第3面土坑4	かわらけ	(7.1)	(5.3)	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多め やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図23-26	"	東濃型 山茶碗	口縁部小片			b. 灰白色 夾雑物ほとんどなし 均質良土 c. 黄灰色 d. 重ね焼きの為口縁部のみ自然釉付着 e. 良好 f. 外面に煤付着
図23-27	第3面土坑5	かわらけ	(8.1)	(5.4)	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 淡黄色 e. やや不良
図23-28	"	かわらけ	(7.7)	(5.8)	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒多め やや粗土 c. 淡黄色 e. 良好
図23-29	"	かわらけ	(11.5)	(6.3)	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図23-30	"	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	体部小片			a. ロクロ 外面片切り彫の複弁蓮弁文 b. 灰白色 黒色微砂 精良堅緻 d. 灰緑色不透明 厚手施釉 e. 良好
図23-31	第3面土坑6	かわらけ	(7.7)	(5.0)	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図23-32	"	かわらけ	8.0	4.9	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒多め 粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
図23-33	第3面土坑7	かわらけ	12.4	7.4	3.2	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒・土丹粒多め やや粗土 c. 淡橙色 e. やや不良
図23-34	第3面 P 3	かわらけ	(7.6)	(5.1)	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図23-35	"	かわらけ	(8.2)	(5.3)	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒・土丹粒多量 粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図23-36	第3面 P 5	かわらけ	(12.7)	(8.2)	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 灯明皿か内面煤付着
図23-37	第3面 P 6	かわらけ	(6.6)	(4.2)	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 白色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡黄色 e. やや不良
図23-38	"	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片			a. 輪積み技法 b. 橙色 砂粒 長石粒 黒色粒 c. 赤褐色 e. 良好 f. 内面使用による摩耗
図23-39	第3面 P 7	かわらけ	(7.3)	(4.5)	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図23-40	"	銅製品 銭	外径2.54 内径1.95 孔径0.63 厚0.12			f. 天禧通寶 北宋 初鑄1017年
図23-41	第3面 P 10	かわらけ	(7.2)	(5.1)	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図23-42	"	かわらけ	7.5	4.7	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒多い 粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図23-43	"	かわらけ	(8.2)	(5.6)	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多く 海綿骨芯 土丹粒 砂質やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
図23-44	第3面 P 11	木製品 杓子	残存長32.0 身幅3.6 柄幅2.1 厚0.5			a. 板材を長丸型に削り先端を円弧を描くような削り f. 身と柄の境がなだらかな括れの作り
図23-45	第3面 P 12	かわらけ	(6.9)	(5.0)	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多め やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図23-46	"	かわらけ	(7.8)	(5.4)	2.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図23-47	第3面 P 14	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁～体部片			a. 輪積み技法 b. 灰色 砂粒 長石粒 c. 灰色 e. 良好 f. 内底に近いところ摩耗強い
図23-48	第3面 P 15	銅製品 銭	外径2.47 内径2.16 孔径0.65 厚0.11			f. 開元通寶 北宋 初鑄621年
図23-49	"	銅製品 銭	外径2.32 内径2.0 孔径0.67 厚0.12			f. 聖宋元寶 北宋 初鑄1101年
図23-50	"	銅製品 銭	外径2.4 内径2.01 孔径0.76 厚0.07			f. 皇宋通寶 北宋 初鑄1039年
図23-51	"	銅製品 銭	外径2.39 内径1.95 孔径6.7 厚0.12			f. 皇宋通寶 北宋 初鑄1039年
図23-52	"	銅製品 銭	外径2.45 内径2.14 孔径0.7 厚0.08			f. 皇宋通寶 北宋 初鑄1039年
図23-53	"	銅製品 銭	外径2.45 内径1.88 孔径0.67 厚0.1			f. 元寶通寶 北宋 初鑄1078年
図23-54	"	鉄製品 釘	残長7.4 幅0.3 厚0.3			a. 鍛造 断面四角形

表 13 遺物観察表 (13)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
図23-55	第3面 P 18	かわらけ	7.8	4.9	1.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多く 粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図23-56	"	かわらけ	(7.9)	(5.2)	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多く 粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図23-57	"	かわらけ	(8.2)	(5.9)	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多く 粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図23-58	第3面 P 19	かわらけ	(7.3)	(4.7)	1.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 外面底部煤付着
図23-59	第3面 P 22	かわらけ	7.3	5.5	1.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ やや良土 c. 黄灰色 e. やや不良
図23-60	"	摩耗 かわらけ				a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 赤色粒少量 良土 c. 黄灰色 e. やや不良 f. 内面と割れ口周縁が擦られる
図24-1	第3面遺構外	かわらけ	(7.5)	(5.0)	1.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図24-2	"	かわらけ	7.5	4.2	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒多い 粗土 c. 明黄褐色 e. やや不良 f. 内面に墨痕と思しきもの付着
図24-3	"	かわらけ	7.4	4.7	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 粉質気味良土 c. 淡黄色 e. やや不良 f. 歪んだ器形 口縁部煤付着
図24-4	"	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.4	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒多く 土丹粒 砂質気味粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図24-5	"	かわらけ	(7.7)	(5.1)	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多く 粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図24-6	"	かわらけ	(7.7)	(4.7)	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ 土丹粒 やや良土 c. 黄灰色 e. 良好
図24-7	"	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.8	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図24-8	"	かわらけ	7.0	4.8	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図24-9	"	かわらけ	7.7	5.8	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒・土丹粒多い 粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図24-10	第3面遺構外	かわらけ	7.8	4.8	1.9	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多め やや粗土 c. 淡黄色 e. やや不良
図24-11	"	かわらけ	(8.0)	(4.8)	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. 良好
図24-12	"	かわらけ	(7.9)	(6.0)	1.9	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒少量 粉質気味良土 c. 淡黄色 e. やや不良
図24-13	"	かわらけ	(7.8)	(6.4)	2.1	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 淡黄色 e. やや甘い f. 歪み非常に強い
図24-14	"	かわらけ	(7.8)	(5.1)	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図24-15	"	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 土丹粒 やや良土 c. 淡黄橙色 e. 良好
図24-16	"	かわらけ	(8.0)	(5.4)	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒・土丹粒多い 粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図24-17	"	かわらけ	(7.9)	(5.0)	1.9	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. 良好
図24-18	"	かわらけ	(8.6)	(5.9)	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図24-19	"	かわらけ	(8.5)	(6.1)	1.4	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 粉質気味良土 c. 黄灰色 e. やや不良
図24-20	"	かわらけ	(8.9)	(6.1)	1.9	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粉質粗土 c. 淡黄色 e. やや甘い
図24-21	"	かわらけ	11.9	6.0	3.3	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好 f. 口縁部一部煤付着し灯明皿か
図24-22	"	かわらけ	(12.0)	(7.5)	3.2	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 淡黄色 e. やや不良
図24-23	"	かわらけ	12.2	6.3	3.3	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多い 粗土 c. 橙色 e. 良好
図24-24	"	かわらけ	(12.2)	(6.6)	3.3	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄灰色 e. やや不良 f. 口縁部一部煤付着 灯明皿か

表 14 遺物観察表 (14)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
図24-25	第3面遺構外	かわらけ	(12.6)	(7.7)	3.2	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多い粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 外面一部に煤付着
図24-26	"	かわらけ	(12.8)	8.2	2.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 内面一部に煤付着
図24-27	"	かわらけ	12.7	7.4	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図24-28	"	かわらけ	(13.5)	(7.2)	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 良土 c. 橙色 e. 良好
図24-29	"	かわらけ	(13.7)	8.0	3.95	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図24-30	"	かわらけ	(14.2)	(9.2)	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図24-31	"	かわらけ加工品				a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 内外面煤付着 断面打ち欠いている
図24-32	"	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	—	(6.8)	—	a. ロクロ b. 灰色 黒色粒 精良 d. 灰緑色半透明 やや厚手施釉 高台～内部露胎 e. 良好 f. 外面に鎬蓮弁文を片彫り施文
図24-33	"	白磁 口元皿	(10.8)	(6.8)	2.3	a. ロクロ b. 白色 精良堅緻 d. 黄色灰白色半透明 薄手施釉 口唇部釉剥ぎで露胎 外底荒く拭取り e. 良好
図24-34	"	白磁 口元皿	(8.9)	—	—	a. ロクロ b. 白色 精良堅緻 d. 半透明 気泡多い やや薄手施釉 口唇部釉剥ぎで露胎 e. 良好
図24-35	"	白磁 口元皿	—	(6.9)	—	a. ロクロ b. 灰白色 精良堅緻 d. 灰色不透明 薄手施釉 外底荒く釉拭取り e. 良好
図24-36	"	瀬戸 卸皿	口縁部小片			a. 内底面篋状工具による卸目 b. 黄灰色 精良土 d. 内底～外面灰緑色の灰釉 e. 堅緻 f. 古瀬戸中期前半頃か
図24-37	"	瀬戸 入子	口縁部小片			a. ロクロ b. 黄味灰色 砂粒 良土 d. 内面に斑状緑白色の自然降灰 e. 堅緻 f. 外面に指紋
図24-38	"	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁～底部片			a. 輪積技法 口縁部丸く肥厚 外面下部に横位へラ削り 貼付け高台 b. 灰色 砂粒 長石粒多い粗土 c. 灰色 e. 良好 f. 内面i摩耗
図24-39	"	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片			a. 輪積技法 口縁部丸く肥厚 b. 灰色 砂粒 長石粒多い粗土 c. 暗灰色 e. 良好 f. 内面i摩耗
図24-40	"	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片			a. 輪積み技法 口縁部横位ナデ b. 茶灰色 砂粒 長石・石英粒 c. 表面: 赤褐～暗灰色 e. 良好 f. 内面やや摩耗
図24-41	"	石製品 砥石	残存長5.6 厚2.0			a. 砥面4面 方注状の形状で中央部が摩耗でやや凹む c. 赤味灰色と黄灰色の斑状 b. 凝灰岩質 f. 中砥 天草産か
図24-42	"	石製品 砥石	残存長6.0 厚2.3			a. 砥面4面 方注状の形状で中央部が摩耗でやや凹む c. 灰白色 b. 凝灰岩質 f. 中砥 上野産
図24-43	"	石製品 砥石	残存長7.2 幅4.0			a. 上面のみ砥面 下面剥離 小口切出し成形痕 c. 黄灰白色 f. 仕上砥 京都鳴滝産
図24-44	"	石製品 硯	長9.0 高1.2			a. 陸部から海部へ窄んだ長台形状 b. 頁岩質 c. 暗赤灰色 f. 池部隅に墨溜り 山口赤間産と思われる
図24-45	"	骨角製品 装飾具	長6.1 厚0.6			a. 表裏面と周縁は削り加工 紐通しの穿孔 b. 褐白色の鹿角製 f. 武具などの辻具と思われるもの
図24-46	"	銅製品 隅金具	径2.2 厚0.1			a. 頂部円形を呈し周縁を折曲げ円筒状 肉薄な作り f. 丸棒状柄の隅金具のようなものか
図24-47	"	銅製品 銭	外径2.0 内径1.9 孔径0.6 厚0.1			f. 咸平元寶 北宋 998年 周縁磨り加工で小径になる
図24-48	"	銅製品 銭	外径2.5 内径2.15 孔径0.7 厚0.1			f. 天聖元寶 北宋 初鑄1023年
図24-49	"	銅製品 銭	外径2.4 内径2.05 孔径0.8 厚1.7			f. 皇宋通寶 北宋 初鑄1038年
図24-50	"	銅製品 銭	外径2.5 内径1.9 孔径0.5 厚0.1			f. 元祐通寶 北宋 初鑄1086年
図24-51	"	鉄製品 釘	残長9.4 幅0.5 厚0.3			f. 鍛造 断面四角形
図24-52	"	漆製品 膳脚	残存高9.0			a. 獸足形状 断面五角形 嵌め込み部の突起大半欠損 f. 黒漆塗りで上面と突起周囲の接合部は木地のまま
図24-53	"	漆製品 膳脚	全高7.1			a. 獸足形状 断面台形 嵌め込み部の突起あり 径・長さ1.0 f. 黒漆塗りで上面と突起周囲の接合部は木地のまま
図24-54	"	漆器 碗	底径 (8.0)			a. ロクロ 輪高台 薄手器壁で丁寧な作り f. 黒漆地に朱漆で内外面に植物文を手描き施文

表 15 遺物観察表 (15)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
図24-55	第3面遺構外	漆器 皿	8.8	6.0	1.5	a. ロクロ 輪高台 f. 黒漆塗りに朱漆で植物文を内外面に施文
図24-56	"	漆器 皿	(9.0)	(6.0)	(1.0)	a. ロクロ 無高台 f. 黒漆塗りに朱漆で植物文を内面だけに施文
図25-57	"	木製品 仏像	像高7.45 幅1.9 厚0.85 面高1.55 体高5.4 台座高0.9			a. 小型木造如来立像 粗め削り出しで肩から裾へと広がる衣を表現 台座は共木で蓮弁文を施す 背面は丸彫りで光背は付かない f. 全体的に火を受け顔破損のためか表情不明瞭 念持仏や祈願目的の用途と思われる
図25-58	"	木製品 扇子	残存長17.3 幅1.5 厚0.4			a. 細長い薄板状の扇骨 3枚を残存 基部の円孔に木釘残す f. 3枚の骨の片面に墨書あり 判読不明
図25-59	"	木製品 蓋	径 (8.0) 厚0.2			a. 板材を円形に加工 f. 桜皮紐通した痕跡があり曲物などの蓋物か
図25-60	"	木製品 用途不明	径5.0 高3.0			a. 円形の平面形で下面がやや吐出 側面細かな削り 中央に穿孔し丸棒が残る 独楽のような形状
図25-61	"	木製品 篋	長13.6 幅1.6 厚0.6			a. 柁目板を短冊形に薄く削り 握り部は先端を薄く尖り気味にし、篋面は平らな木口を薄くなる様に削る f. 篋面側に黒色漆付着
図25-62	"	木製品 箸	長18.2 幅0.6 厚0.4			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図25-63	"	木製品 箸	長18.9 幅0.7 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図25-64	"	木製品 箸	長18.5 幅0.6 厚0.4			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図25-65	"	木製品 箸	長18.3 幅0.7 厚0.5			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図25-66	"	木製品 箸	長18.5 幅0.7 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図25-67	"	木製品 箸	長18.7 幅0.8 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図25-68	"	木製品 箸	長19.2 幅0.6 厚0.2			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図25-69	"	木製品 箸	長18.7 幅0.5 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図25-70	"	木製品 箸	長19.0 幅0.6 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図25-71	"	木製品 箸	長19.0 幅0.7 厚0.2			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図25-72	"	木製品 箸	長19.3 幅0.5 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図25-73	"	木製品 箸	長20.5 幅0.5 厚0.3			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図25-74	"	木製品 箸	長20.8 幅0.7 厚0.5			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図25-75	"	木製品 箸	長24.0 幅0.7 厚0.5			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に削る 両口加工
図28-1	第4面建物1	青白磁 梅瓶	胴部片			a. ロクロ b. 灰白色 精良堅緻 微砂 d. 明緑灰色透明 極めて薄手施釉 f. 外面に楡描き渦巻文の施文
図28-2	"	漆器 皿	9.1	7.0	1.2	a. ロクロ 薄手器壁で丁寧な作り 無高台 f. 黒漆塗地 内面手描きで朱漆を巧みに塗り黒漆文様風に表現
図28-3	"	漆器 皿	9.6	6.7	1.4	a. ロクロ 薄手器壁で丁寧な作り 無高台 f. 黒漆塗地 内面に手描きで朱漆の幾何学文と植物文を施文
図28-4	"	漆器 皿	9.9	6.8	1.6	a. ロクロ 薄手器壁で丁寧な作り 輪高台 外底にロクロ成形時の爪痕を残す f. 黒漆塗の無文
図28-5	第4面土坑1	かわらけ	7.7	4.5	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 内外面煤付着 灯明皿
図28-6	"	かわらけ	7.6	5.0	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 良土 c. 黄橙色 e. 良好
図28-7	"	かわらけ	7.6	5.4	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図28-8	"	かわらけ	7.8	5.5	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒少量 良土 c. 明黄褐色 e. やや不良
図28-9	"	かわらけ	(7.5)	(5.0)	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多く 粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図28-10	"	かわらけ	(7.7)	(5.4)	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良 f. 内面煤付着 灯明皿

表 16 遺物観察表 (16)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
図28-11	第4面土坑1	かわらけ	8.1	5.1	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 良土 c. 明黄褐色 e. 不良 f. 上向き本資料上に懸仏鏡板が乗って出土
図28-12	〃	かわらけ	(8.0)	(5.1)	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄灰色 e. やや不良 f. 口縁一部U字形打ち欠き煤が付着 灯明皿
図28-13	〃	かわらけ	(11.3)	(5.8)	3.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好
図28-14	〃	かわらけ	(12.8)	(8.2)	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 粉質 気味やや良土 c. 黄灰色 e. やや不良
図28-15	〃	かわらけ	(12.7)	(8.2)	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 器表内外面に黒色物質が付着
図28-16	〃	かわらけ	14.8	10.1	3.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 良土 c. 橙色 e. 良好
図28-17	〃	瀬戸 入子	(4.8)	—	—	a. ロクロ 口縁外反 b. 黄味灰白色 微砂質の良土 d. 灰白色の自然降灰 f. 内面摩耗
図28-18	〃	銅製品 懸仏鏡板	直径8.6 内区径6.9 外区幅0.85 厚0.1~0.21 縁高0.4			a. 銅鏡の形状 中央に紐座風の円形やや凸状 圏線で内外区を分かち 周縁高まる 上部外区の二カ所に御正体として壁に鋳で打ち付けた穴が開く f. 内区文様は凸線格子目状の文様を表現
図28-19	〃	骨角製品 筭	残存長7.2 幅1.6 厚0.2			a. 上半部片 薄い平板状で丁寧な削りと磨き加工 頂部中央にV字切り込み f. 骨製で劣化が進み脆い
図28-20	〃	骨角製品 筭	残存長4.5 幅(1.5) 厚0.3			a. 上部片 薄い平板状に丁寧な削りと磨きを施す f. 片側縁に二次的な粗削りあり
図28-21	第4面土坑3	常滑 甕	—	(18.6)	—	a. 輪積技法 内面は指頭痕と横位ナデ b. 灰褐色 長石 石英粒 c. 茶褐色 d. 内底面暗灰緑色の自然降灰
図28-22	第4面土坑5	かわらけ	(7.9)	4.7	1.8	a. ロクロ 低め器高 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質粗土 c. 橙色 e. 良好
図28-23	第4面P4	かわらけ	8.5	5.2	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 砂質気味やや良土 c. 黄灰色 e. 不良
図28-24	第4面P6	かわらけ	(12.5)	(7.9)	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 砂質やや粗土 c. 黄灰色 e. 不良
図28-25	第4面P12	銅製品 銭	外径2.5 内径2.0			f. 熙寧元寶 北宋 初鑄1068年
図28-26	第4面P13	かわらけ	(4.9)	(3.3)	1.3	a. 強い内湾器形の極小品 ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ やや良土 c. 淡橙色 e. 良好
図28-27	〃	かわらけ	(7.4)	(5.5)	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ やや良土 c. 赤褐色 e. 良好
図28-28	〃	かわらけ	(7.5)	(4.8)	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 やや砂質良土 c. 黄褐色 e. 良好
図28-29	〃	骨角製品 筭	残存幅1.5 厚0.25			a. 頭部片 丁寧な削りと磨き 頭部平で孔や切り込みをもたない
図28-30	〃	白磁 口元皿	底部片			a. ロクロ b. 白色 精良緻密 d. 黄色味灰白色半透明 外底釉薬を荒く拭取り斑状になる f. 底部厚手の器壁
図28-31	第4面P14	常滑 片口鉢I類	口縁部片			a. 輪積技法 横位ナデ調整 b. 灰色 白色粒 砂粒 長石粒 石英粒 粗胎 e. 良好 f. 内面摩耗
図28-32	第4面P15	かわらけ	12.8	7.7	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多め 粗土 c. 橙色 e. 良好
図28-33	第4面P17	漆器 皿	—	6.8	—	a. ロクロ 薄手器壁の丁寧な作り 無高台 f. 黒漆塗地に朱漆で内面に菊花文をアレンジした手描き文
図28-34	第4面P19	かわらけ	(7.0)	(4.4)	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡黄色 e. やや不良
図28-35	第4面P20	かわらけ	(12.5)	(7.7)	3.2	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 粗土 c. 橙色 e. 良好
図28-36	第4面P2	木製品 箸	長19.3 幅0.4 厚0.4			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に面取り削り 両口加工
図29-1	第4面遺構外	かわらけ	(6.6)	(3.9)	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 赤色粒少量 粉質良土 c. 黄灰色 e. やや良好
図29-2	〃	かわらけ	7.6	4.7	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ やや良土 c. 黄灰色 e. やや不良
図29-3	〃	かわらけ	(7.6)	(4.7)	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c. 黄灰色 e. やや不良
図29-4	〃	かわらけ	7.8	5.3	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ やや良土 c. 橙色 e. 良好

表 17 遺物観察表 (17)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
図29-5	第4面遺構外	かわらけ	7.8	5.2	1.8	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 厚手器壁 b. 微砂 海綿骨芯 やや良土 c. 淡橙色 e. 良好
図29-6	"	かわらけ	7.8	5.0	1.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡黄色 e. やや不良
図29-7	"	かわらけ	(7.8)	(5.3)	1.3	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質粗土 c. 黄灰色 e. やや良好
図29-8	"	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多め 砂質粗土 c. 赤橙色 e. 良好
図29-9	"	かわらけ	7.8	5.4	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質粗土 c. 黄灰色 e. 良好
図29-10	"	かわらけ	7.8	5.6	1.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 粉質良土 c. 黄灰色 e. やや不良
図29-11	"	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.8	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多量 土丹粒粗土 c. 橙色 e. 良好
図29-12	"	かわらけ	7.7	5.0	1.8	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒少なめ やや砂質良土 c. 黄灰色 e. 良好
図29-13	"	かわらけ	7.8	5.9	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c. 黄灰色 e. 不良
図29-14	"	かわらけ	(7.9)	(5.4)	1.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 薄手器壁 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ やや粉質良土 c. 淡黄橙色 e. やや不良
図29-15	"	かわらけ	(8.1)	(5.6)	1.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ 良土 c. 橙色 e. 良好
図29-16	"	かわらけ	(7.5)	(5.2)	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 二次焼成受け煤ける
図29-17	"	かわらけ	(7.7)	(5.4)	1.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c. 橙色 e. 良好
図29-18	"	かわらけ	(8.0)	(5.2)	1.8	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質粗土 c. 黄灰色 e. 不良
図29-19	"	かわらけ	8.0	5.2	1.9	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 砂質粗土 c. 黄灰色 e. 不良
図29-20	"	かわらけ	(8.2)	5.3	1.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
図29-21	"	かわらけ	(12.5)	(8.0)	3.0	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. 良好
図29-22	"	かわらけ	(12.5)	(6.0)	3.4	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁部煤付着 灯明皿
図29-23	"	かわらけ	(12.7)	7.0	3.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図29-24	"	かわらけ	(12.7)	(8.1)	3.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 厚手器壁 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図29-25	"	かわらけ	12.8	7.8	3.2	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ やや良土 c. 淡黄橙色 e. やや不良
図29-26	"	かわらけ	12.8	7.8	3.4	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 淡黄色 e. やや不良 f. 内外面煤付着
図29-27	"	かわらけ	(12.9)	(7.8)	3.4	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
図29-28	"	かわらけ	12.8	8.4	3.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多い 粗土 c. 橙色 e. 良好
図29-29	"	かわらけ	(12.8)	8.3	3.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
図29-30	"	かわらけ	(12.9)	7.2	3.2	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや不良
図29-31	"	かわらけ	(13.1)	7.5	3.5	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒少なめ やや良土 c. 淡橙色 e. 良好
図29-32	"	かわらけ	13.6	8.1	3.7	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図29-33	"	かわらけ	(13.6)	7.8	3.6	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 良土 c. 赤橙色 e. 良好
図29-34	"	かわらけ	(13.7)	(7.7)	3.1	a. ロクロ 外底回転系切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好

表 18 遺物観察表 (18)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
図29-35	第4面遺構外	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部片			a. ロクロ 直口縁 b. 灰白色 黒色微砂 精良堅緻 d. 灰緑色透明 やや厚手施釉 f. 外面に鎬蓮弁文を片切彫り施文
図29-36	"	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部片			a. ロクロ 外反気味口縁 b. 灰色 精良堅緻 d. 灰緑色透明 やや厚手施釉 f. 外面に鎬蓮弁文を片切彫り施文
図29-37	"	青白磁 梅瓶	胴部片			a. ロクロ b. 灰白色 精良堅緻 d. 青灰色透明 外面やや厚手施釉 f. 外面に渦巻文を施す
図29-38	"	白磁 口元皿	口縁部片			a. ロクロ b. 灰白色 精良堅緻 d. 灰白色不透明 薄手施釉 f. 口唇部は釉剥ぎ取りで露胎
図29-39	"	白磁 口元皿	—	—	3.4	a. ロクロ 口縁部外反 b. 灰白色 精良堅緻 気孔少々 d. 緑味灰白色半透明 薄手施釉 口唇部釉剥ぎ取り露胎
図29-40	"	白磁 口元皿	—	(5.8)	—	a. ロクロ b. 灰白色 精良堅緻 気孔少々 d. 灰白色透明 薄手施釉 外底に粗く釉薬拭取り痕跡あり
図29-41	"	瀬戸 入子	(5.0)	3.6	1.3	a. ロクロ 口縁部が外反気味 外底面は数回にわたるへら削り b. 灰白色 微砂質良土 e. 硬質 f. 内底面は磨滅 紅と思しき赤色物質付着
図29-42	"	常滑 甕	口縁部片			a. 輪積技法 指頭痕と横位ナデ b. 灰色 砂粒 長石粒少なめ c. 暗褐色 d. 口縁～肩部に灰緑色の自然降灰釉 e. 良好
図29-43	"	常滑 甕	口縁部片			a. 輪積技法 内面指頭痕と横位ナデ b. 暗灰色 砂粒 長石粒少量 c. 暗褐色 d. 口縁部に自然降灰釉 e. 良好
図29-44	"	常滑 片口鉢Ⅰ類	(28.0)	10.4	12.2	a. 輪積技法 外面体部下半は横位へら削り 断面三角形の貼付け高台 b. 灰色 長石粒 砂粒 粗土 d. 口唇部に自然降灰 e. 良好 f. 体部中位～内底面は使用による磨滅と剥離が顕著
図29-45	"	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片			a. 輪積技法 貼付け高台 b. 暗灰色 砂粒 長石粒多く やや粗土 e. 良好 f. 内面使用による著しい摩耗
図29-46	"	瓦質火鉢	口縁～底部片			a. 口縁部肥厚した鉢形器形 口縁部下に焼成前による穿孔 b. 灰色 砂粒 小石粒 c. 器表は黒灰～暗灰色
図29-47	"	石製品 基石	径1.4～1.7 厚0.3			a. 黒石 楕円形の扁平な自然石を用いてる 上下面を磨り加工で平らに仕上げる c. 黒色
図29-48	"	石製品 砥石	残存長9.1 幅3.0 厚1.1			a. 長方形板状 砥面は上下2面 側面・小口は刃物による成形痕 c. 黄味灰白色 f. 京都鳴滝産 仕上砥
図29-49	"	石製品 砥石	残存長4.9 幅2.8 厚1.4			a. 長方形板状 砥面は上下2面 側面は刃物による成形痕 c. 黄味灰白色 f. 京都鳴滝産 仕上砥
図29-50	"	銅製品 銭	外径2.45 内径1.85 孔径0.55 厚0.15			f. 祥符元寶 北宋 初鑄1008年
図29-51	"	銅製品 銭	外径2.50 内径1.91 孔径0.71 厚0.10			f. 皇宋通寶 北宋 初鑄1039年
図29-52	"	銅製品 銭	外径2.45 内径1.85 孔径0.65 厚0.15			f. 皇宋通寶 北宋 初鑄1039年
図29-53	"	銅製品 銭	外径2.41 内径1.97 孔径0.61 厚0.13			f. 元豐通寶 北宋 初鑄1078年
図29-54	"	銅製品 銭	外径2.53 内径2.09 孔径0.67 厚0.12			f. 元豐通寶 北宋 初鑄1078年
図29-55	"	銅製品 銭	外径2.45 内径1.95 孔径0.65 厚0.15			f. 元祐通寶 北宋 初鑄1086年
図29-56	"	銅製品 銭	外径2.5 内径2.15 孔径0.65 厚0.15			f. 大觀通寶 北宋 初鑄1107年
図29-57	"	鉄製品 火箸	残存長7.2 径0.4			a. 鍛造製作 断面楕円形状 f. 下端は折れ曲がるが一定の太さで火箸様のものか
図29-58	"	鉄製品 火箸	残存長5.7 径0.4			a. 鍛造製作 断面円形の丸棒状 f. 下端は折れ曲がるが一定の太さで火箸様のものか
図29-59	"	鉄製品 釘	残存長5.3 幅0.2 厚0.3			a. 鍛造製作 断面四角形 下端尖る
図29-60	"	骨角製品 筭	残存長5.1 幅1.5 厚0.3			a. 上半部片 薄い平板状で丁寧な削りと磨き加工 頂部中央にV字切り込み f. 骨製で劣化が進み脆くなる
図29-61	"	漆器 鉢	(22.0)	—	—	a. ロクロ 口縁部が折縁状に外方へ開く 口唇部は上方へ引き出す f. 全面丁寧な黒漆塗り仕上げ
図29-62	"	漆器 皿	—	5.8	—	a. ロクロ 薄手器壁で丁寧な作り 輪高台 d. 黒漆塗り f. 内面には黒色系漆が浸み込んだ紙又は布のような塊が残る
図29-63	"	木製品 円板	径(10.4) 厚0.3～0.5			a. 板材を円形に整えた円板 上面縁を軽く面取り削りを施す f. 曲物の底板又は蓋になるもの
図29-64	"	木製品 箸	長20.1 幅0.5 厚0.4			a. 刃物で両側が細くなるように断面多角形に面取り削り 両口加工
図29-65	"	木製品 円板	径2.3 厚0.2			a. 薄い板を隅丸六角形削り加工 中央に径2mm程の穿孔あり f. 曲物の底板や蓋では小径すぎる用途不明

表 19 遺物観察表 (19)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
図29-66	第4面遺構外	漆製品 雲形肘木	残存長9.1 高3.0 厚1.1			a. 黒漆塗り雲形の肘木 下面は漆を塗らない f. 形状から丸膳や方形膳の膳足(脚部)に付属する装飾的なもの
図32-1	第5面土坑3	青白磁 壺	—	(5.2)	—	a. 型押し成形作り 外底に成形時の粘土シワ痕 b. 灰白色 精良緻密 d. 内底:面に青白色半透明の釉薬を薄く施釉 外底露胎
図32-2	"	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片			a. 輪積み技法 口縁部外面横位ナデ b. 黒灰色 砂粒 長石粒 c. 茶褐色 e. 良好 f. 内面自然降灰
図32-3	"	石製品 砥石	残存長6.8 幅3.5 厚1.6~2.5			a. 砥面4面 方注状の形状 中央部に向い摩耗でやや凹む c. 灰白色 b. 凝灰岩質 f. 中砥 上野産
図32-4	第5面P1	かわらけ	(8.0)	(4.9)	2.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図32-5	第5面P5	かわらけ	(7.8)	(5.1)	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ やや良土 c. 淡橙色 e. 良好
図32-6	第5面P6	かわらけ	(7.9)	(6.9)	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図32-7	第5面P8	鉄製品 刀子	残存長23.8 刃長20.6 刃幅2.2 棟厚0.6			a. 直線的な刀身 茎は大半を欠失するが目釘穴が僅かに残存 棟区と刃区の境を残す
図32-8	第5面P9	かわらけ	(7.8)	(4.9)	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図32-9	"	常滑 甕	底部片			a. 輪積技法 砂目底 内面指頭痕と横位ナデあり b. 灰色 砂粒 石英粒少量 c. 褐色 e. 硬質
図32-10	第5面P10	摩耗陶片	肩部片転用			a. 常滑甕の胴部片を転用したもの b. 黒灰色 砂粒 粒 長石粒多い粗土 d. 外面に灰緑色自然降灰 f. 割口三面と周縁部が著しく摩耗
図32-11	第5面P13	かわらけ	(13.0)	7.9	3.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 内湾した高い器高 厚手器壁の底部 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図33-1	第5面遺構外	かわらけ	7.8	5.5	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや良土 c. 黄灰色 e. やや不良
図33-2	"	かわらけ	7.9	5.2	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
図33-3	"	かわらけ	7.9	5.0	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質粗土 c. 黄灰色 e. 不良
図33-4	"	かわらけ	11.5	6.5	3.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c. 淡橙色 e. 良好
図33-5	"	かわらけ	(13.0)	7.3	3.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c. 橙色 e. 良好
図33-6	"	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部片			a. ロクロ b. 灰白色 黒色微砂 緻密 d. 緑灰色半透明 厚手施釉 f. 外面に鎬蓮弁文を片切彫り施文
図33-7	"	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部片			a. ロクロ b. 灰色 白色細粒 緻密 d. 黄灰色不透明 貫入多し f. 外面に鎬蓮弁文を片切彫り施文
図33-8	"	龍泉窯青磁 折縁盤	高台径 (10.1)			a. ロクロ 削り出し高台 b. 灰色 黒色微砂 d. 黄緑色半透明 厚手施釉 疊付・高台脇露胎 f. 内外面無文
図33-9	"	白磁 印花文皿	体部下位			a. 内型押し作り 口元の小皿 b. 白色 精良緻密 d. 青白色不透明 薄手施釉 f. 内面蓮華唐草文の型押し文様
図33-10	"	白磁 口元皿	10.2	6.0	3.1	a. ロクロ 口縁外反 b. 灰白色 堅緻 d. 淡黄灰色透明 口唇部釉剥ぎ取り露胎 外底釉拭き取り鉄分発色
図33-11	"	白磁 口元皿	口縁部片			a. ロクロ 口唇部尖り気味 b. 灰白色 d. 灰白色不透明 口唇部釉剥ぎ取り露胎
図33-12	"	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片			a. 輪積技法 口縁部は丸味もち肥厚 b. 灰色 白色粒 黒色粒 長石多い 粗土 e. 硬質 f. 内面磨滅なし
図33-13	"	常滑 片口鉢Ⅰ類	28.8	13.3	14.0	a. 輪積技法 口縁部丸味をもつ 外面胴部下位に横位ヘラ削り 貼付け高台 b. 灰色 砂粒 長石多い 粗土 e. 硬質 f. 内底面近くの使用による磨滅
図33-14	"	常滑 壺	—	13.0	—	a. 輪積技法 外面下位縦位のヘラナデ 外底砂目底 b. 灰色 砂粒 長石粒 割口岩石質 c. 茶褐色 e. 堅緻
図33-15	"	石製品 砥石	残存長7.8 幅3.8 厚1.0			a. 長方形板状 砥面は上下面 側面と木口は刃物の切断痕 b. 黄色灰白色 f. 京都鳴滝産 仕上砥
図33-16	"	木製品 蓋	径 (4.5)			a. ロクロ挽きの蓋 上面が甲高な作り 頂部には回転施文の二重圏文 中央に蓮華文様を配す
図33-17	"	銅製品 掛金	全長3.2 幅0.3 厚0.1			a. 釣り針状の形状 平たい断面 頂部の孔に小径の輪を嵌め込む f. 金銅製 環状を繋ぐようなフック状の金具か
図33-18	第5面下南 北トレンチ	かわらけ	(8.0)	(5.8)	1.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質粗土 c. 黄灰色 e. 不良
図33-19	"	かわらけ	8.1	5.9	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. 不良

第四章 まとめ

本調査地点は南北方向に 800 m ほど細長く延びている薬師堂ヶ谷の中間地点付近に位置し、谷戸中央には平子川が南へ向かって直線的な流れを作り出している。谷戸入口には元東光寺の旧跡であったという鎌倉宮が鎮座し、谷戸奥には鷲峰山真言院覚園寺が現在もひっそりとした佇まいをみせている。覚園寺蔵の「覚園寺境内図」（鎌倉国宝館 1992）には薬師堂ヶ谷に展開する支谷内に寺・堂などの名が書かれている。調査地点は「門」と描かれた東側、「二条殿跡」と書かれた支谷の南側に位置している。調査地点あたりの丘陵上には山王山の文字が見られ、覚園寺旧境内の一画で廃寺や支院・塔頭などに相当する寺院関連の場であったことは想像に難しくない。

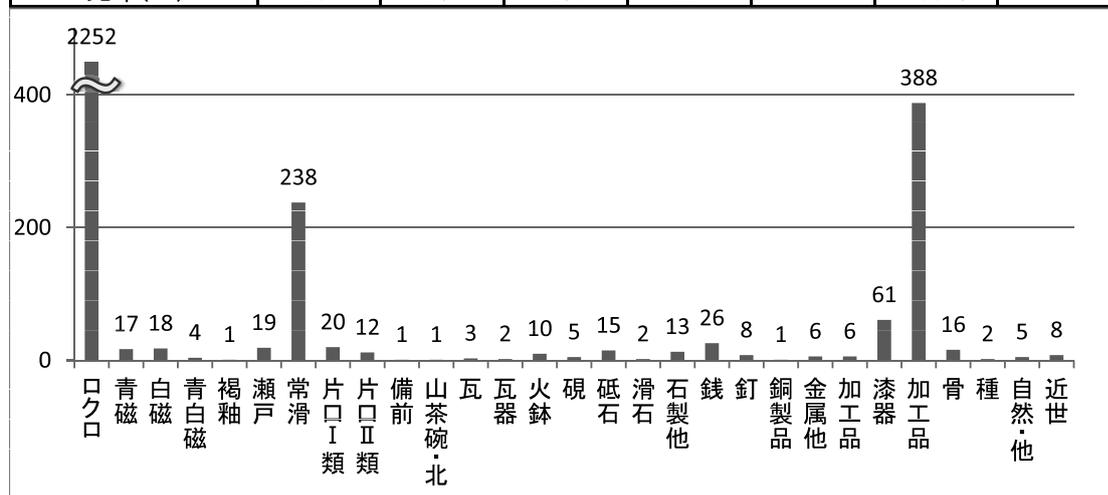
調査で発見された第 1 面～第 5 面までの生活面と各遺構については、前章において調査成果として述べてきたが、ここでは堆積土や遺構・遺物の様相から生活面を大きく時期に区分し、出土遺物の組成や特徴などについても触れてまとめたい。なお、第 5 面の終了時で掘削深度が現地地表下 2 m 以上に達し、平子川脇の立地で多量の湧水と降雨によって調査区壁崩落の危険性を伴うと判断されたので安全確保を優先して平面的な調査は実施せずに、第 5 面以下はトレンチを入れて中世基盤層までを確認するに止めることにした。トレンチ調査における土層観察では、海拔高 23.05 m の中世地山層上面（第 7 面）までの間に、拳大～頭大の土丹小塊を含む地形面（15 層上面：6 面）が海拔高 23.40 m 前後の高さで検出された。第 5 面以下を含めて少なくとも 6 時期の遺構群に大別された。Ⅰ期（第 7 面）はトレンチ内の中世地山上面に相当したもので、覚園寺の前身で建保 6 年（1218）北条義時の大倉薬師堂が建立した開発当初の姿に近い面と考えられたが、鎌倉時代前半期を示す遺物は出土しなかった。Ⅱ期となる第 6 面も土層観察から 13 世紀中葉以降に山裾を掘削しながら平場を拡張して造成した様子が確認された。Ⅲ期の第 5 面は遺構密度が低く、各面ごとの遺物出土比率の観察からも僅か 7 % に留まっており、遺物組成から概ね 13 世紀後葉と考えられる。Ⅳ期の第 4 面は、多量の炭化物や有機物腐蝕土の土層を挟み表出した土丹版築の地形平坦面で建物や土坑などの遺構に伴ってかわらけ・貿易磁器、木・漆製品の箸や椀皿の生活遺物が増加したことはこの場が前代に比べて人的な営みが活発したことが想像できる。この面も 13 世紀後葉とみて大過ないと思われる。Ⅴ期の第 2・3 面は、炭化物層や薄い土丹版築の地形層が重なり合った様相で連続した生活面で活発な営みの痕跡が窺える。この面の年代観は遺物組成からみて概ね 13 世紀末葉～14 世紀前葉と想定したい。Ⅵ期の第 1 面は前代と同じく土丹版築による締りの強い地形層であった。遺構は壁支建物や多数のピットなどが発見される人的営みの痕跡を濃く留め、14 世紀前半を主体とした年代が考えられる。

第 1 面から第 4 面で見つかった壁支建物と思われる建物跡は（2003 野本）、建物外周に比べ建物内が一段低くなり地中に吹き下ろした横・縦板の外壁の周縁を柱で押さえ込む構造をもち、建物内は底面に床束の礎板を伴う壁支建物と想定される。しかし組み合う柱穴や囲炉裏などは見つからず建物の規模・構造がよく判らないものが殆んどであった。こうした建物は短期間の居住に対応できる施設で、時に応じて敷地内の通路や板塀に接するような場所に造られた作業場を兼ねたような簡易的な住居として利用されていたと推測される。これらは建物が機能を失った後に植物繊維を残す有機物腐蝕土と共に、多くの木・漆製品やかわらけなどが廃棄された状況で発見されている。

表 20 に示したように今回の調査で出土した遺物について観察すると、遺物は分類困難な小破片を除き接合後の破片点数にして 3160 点が得られた。この内訳はロクロ成形かわらけ 2252 点（約 71.3 %）で全体出土量の約 7 割以上にも上っており、手捏ね成形は 1 点も認められなかった。陶磁器類では常滑

表 20 遺物分類別出土数量・比率表

出土地		1面	2面	3面	4面	5面	個数	比率(%)
かわらけ	口ク口	492	568	546	509	137	2252	71.27
舶載陶磁器	青磁	5	3	3	3	3	17	0.54
	白磁	3	3	3	5	4	18	0.57
	青白磁	1	0	0	2	1	4	0.13
	褐釉	0	0	0	1	0	1	0.03
国産陶器	瀬戸	5	6	4	4	0	19	0.6
	常滑	10	141	35	16	36	238	7.53
	片口Ⅰ類	0	2	5	2	11	20	0.63
	片口Ⅱ類	2	3	1	3	3	12	0.38
	備前	1	0	0	0	0	1	0.03
	山茶碗(北部)	0	0	0	1	0	1	0.03
土製品	瓦	1	2	0	0	0	3	0.09
	瓦器	0	0	0	2	0	2	0.06
	火鉢	5	3	1	1	0	10	0.32
石製品	硯	0	3	1	1	0	5	0.16
	砥石	2	6	3	2	2	15	0.47
	滑石	1	1	0	0	0	2	0.06
	その他	3	2	3	3	2	13	0.41
金属品	銭	3	5	10	8	0	26	0.82
	釘	0	1	3	4	0	8	0.25
	銅製品	0	0	0	0	1	1	0.03
	その他	1	1	2	1	1	6	0.19
骨角製品	加工品	0	0	1	4	1	6	0.19
木製品	漆器	2	18	10	30	1	61	1.93
	加工品	96	62	136	91	3	388	12.28
自然遺物	骨	0	0	2	13	1	16	0.51
	種	0	1	1	0	0	2	0.06
	その他	0	2	1	1	1	5	0.16
近世	その他	8	0	0	0	0	8	0.25
合計		641	833	771	707	208	3160	100% (99.98)
比率(%)		20%	26%	25%	22%	7%	100%	



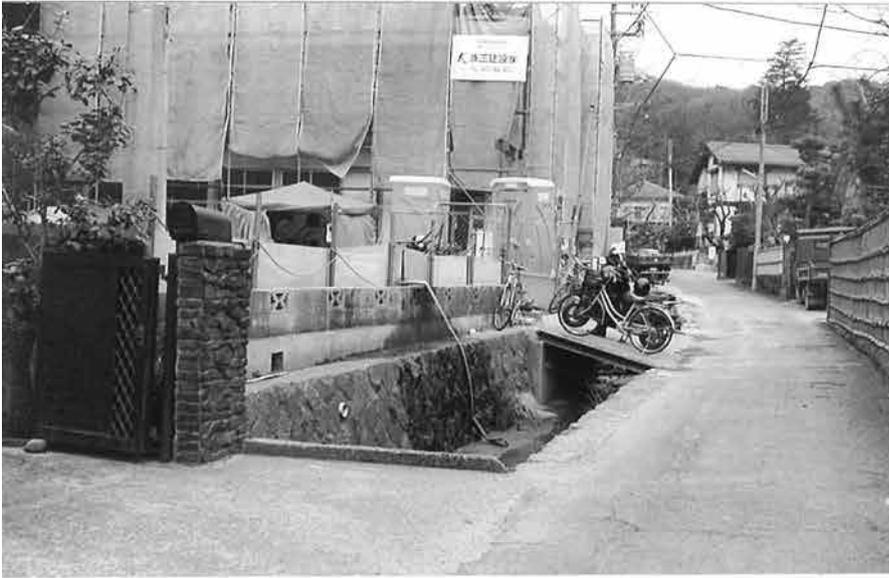
窯の壺・甕・片口鉢 270 点 (約 8.5%) と最も多く、瀬戸窯 19 点 (0.6%) や貿易陶磁器が総数 40 点 (1.3%) と低い出土比率を示していたのが特徴的である。さらに高い地下水位の関係もあるが、箸・曲物底板や漆器碗皿・膳脚など日常生活品の木・漆製品 449 点 (14.2%) の生活遺物の出土が目についた。一方、図 25 - 57 に掲載した木製の小型如来立像は調査 I 区の第 3 面上に堆積していた炭化物層・有機物腐植土から廃棄遺物と一緒に表出したものである。おそらく小型厨子や袋に収め念持仏のような祈願目的の用途で信仰されていたものだろう。さらに図 28 - 18 は第 4 面土坑 1 から出土した銅製懸仏鏡板であり、上部の両側二カ所に御正体を板壁へ鉤で打ち付ける円孔がみられた。

『覚園寺境内図』（鎌倉国宝館 1992）に記載された薬師堂ガ谷の小支谷内には、五峰寺跡、天王寺跡、二条院跡、平等寺跡・大楽寺跡、一心坊跡・龍泉院跡・蓮花院跡・東光寺跡などが記載されている。谷戸内での調査継続によって、北条義時が建てた大倉薬師堂や絵図に描かれたこれらの廃寺跡とやぐらの分布との関連も含めて薬師堂ガ谷の様相を明らかにしていくことが今後の課題といえそうである。

【引用・参考文献】 ※この巻末の引用・参考文献は本報告の全体に共通するものである。

- 赤星直忠 1959『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館
赤星直忠・竹澤嘉範 1990『神奈川の中世瓦集成録』横須賀考古学会研究調査報告 5
秋山哲雄 2006『北条氏権力と都市鎌倉』吉川弘文館
伊丹まどか 2010「覚園寺旧境内遺跡(No.435)二階堂字会下 351 番 3 外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26 第 1 分冊』鎌倉市教育委員会
井関文明・新開基史 2006『会下山西やぐら群』かながわ考古学財団調査報告 196
井関文明 2006『会下山西やぐら群Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告 204
井関文明 2008『会下山西やぐら群Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告 219
上本進二 2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子棧敷戸遺跡（逗子市 No.100）』東国歴史考古学研究所
薄井和男 2012「鎌倉出土の仏像彫刻」『第 22 回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』N P O 法人鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会 挿図番号 3 - 木造如来立像、同図 18 - 銅造懸仏鏡板として写真が掲載されている。
大森順雄 1991『覚園寺と鎌倉律宗の研究』有隣堂
沖元 道 2013「鎌倉出土の東播系鉢」『東播系須恵器 - 編年と分布から考える -』第 32 回中世土器研究会
鎌倉国宝館 1992『鎌倉の古絵図Ⅰ』鎌倉国宝館図録第 15 集
河野真知郎 1982『覚園寺境内発掘調査報告書』覚園寺境内遺跡発掘調査団 宗教法人覚園寺
2004「政権都市『鎌倉』 - 考古学的研究のこの十年 -」中世都市研究会編『中世都市研究 9 政権都市』新人物往来社
菊川英政・宗臺富貴子 2006『鎌倉城 (No.87) 発掘調査報告書 - 御成町 39 番 36 地点 -』(株) 齊藤建設
菊川英政・宗臺富貴子・田畑衣理ほか 2008『今小路西遺跡 (No.201) 発掘調査報告書 - 御成町 171 番 1 外地点 -』(株) 齊藤建設
木村美代治・菊川英政 1993『若宮大路周辺遺跡群 (御成町 868 番地点) 発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会・若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
齋木秀雄 1993『佐助ヶ谷遺跡 (鎌倉税務署用地) 発掘調査報告書 - 第 1 分冊 -』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団及び齋木秀雄・瀬田哲夫・伊丹まどか・根本志保ほか 1993『佐助ヶ谷遺跡 (鎌倉税務署用地) 発掘調査報告書 - 第 2 分冊 -』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団 ※第 2 分冊考察・分析編 瀬田哲夫氏「中世都市鎌倉における建物遺構に関する一考察 - 市内遺跡から検出された板壁掘立柱建物を中心に -」の論考を参考にした。
汐見一夫 1996「覚園寺旧境内遺跡 (No.435) 二階堂字平子 412 番 1 外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12 第 2 分冊』鎌倉市教育委員会
2001「2 石製品の流通 砥石と硯の流通」『図解・日本の中世遺跡』小野正敏編 東京大学出版会
穴戸信吾 2001『覚園寺総門跡東やぐら群』かながわ考古学財団調査報告 115
白井永二ほか 1986『鎌倉事典』東京堂出版
宗臺秀明・宗臺富貴子 1996『横小路周辺遺跡発掘調査報告書 二階堂字横小路 110 - 3 地点』横小路周辺遺跡発掘調査団
宗臺秀明 2008「中世鎌倉の都市性」『白門考古論叢』Ⅱ 中央大学考古学研究会編
宗臺富貴子 2004「南関東の陶磁器流通」『中世東国の世界 2 南関東』浅野晴樹・齋藤慎一編 高志書院
鈴木庸一郎・宮坂淳一 2002『覚園寺総門跡東やぐら群Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告 138
高柳光寿 1959『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館
田代郁夫 1987『会下山西やぐら発掘調査報告書』二階堂会下やぐら群発掘調査団
田代郁夫・大坪聖子 1995a「天王寺跡やぐら」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所調査研究報告 15 集
1995b「No.331 遺跡内やぐら」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所調査研究報告 15 集

- 田代郁夫・継 実・大坪聖子 1996「天王寺跡やぐら」『中世石窟遺構の調査』東国歴史考古学研究所調査研究報告7集
- 永井久美男 2002『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院
- 中野晴久 2012「常滑窯の展開」『シンポジウム中世渥美・常滑焼を追って 発表要旨』日本福祉大学知多半島総合研究所
- 貫 達人 1978『鎌倉の宝篋印塔』鎌倉国宝館図録第22集 鎌倉国宝館
- 貫 達人・川副武胤 1979『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館
- 1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂
- 野本賢二・岡 陽一郎 2000「海蔵寺旧境内遺跡 (No.299) 扇ガ谷四丁目 632 番 3 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16 第 1 分冊』鎌倉市教育委員会
- 野本賢二 2003「住まい ―鎌倉を中心に―」『特集 中世前期の都市と都市民 ―都市の生成にみる中世の列島社会―』季刊考古学第 85 号 雄山閣
- 原 廣志・福田 誠・佐藤 泉 1988「北条時房・顕時邸跡 (No.278) 雪ノ下 1 丁目 323 番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4』鎌倉市教育委員会
- 原 廣志・橋場君男 1994「公方屋敷跡 (No.268) 浄明寺三丁目 143 番 2 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10 第 1 分冊』鎌倉市教育委員会
- 原 廣志 2002「第 4 章 出土瓦について」『永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備に係る発掘調査報告書－遺物考察編－』鎌倉市教育委員会
- 降矢順子ほか 2005『覚園寺旧境内遺跡発掘調査報告書－二階堂字会下 331 番 3 外における埋蔵文化財調査－』(有)倉遺跡調査会
- 福田 誠 2004「横小路周辺遺跡 (No.259) 二階堂字会下 323 番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20 第 2 分冊』鎌倉市教育委員会
- 2007「横小路周辺遺跡 (No.259) 二階堂字四ツ石 115 番 3 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23 第 2 分冊』鎌倉市教育委員会
- 福田 誠・菊川 泉 2001『永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備に係る発掘調査報告書－遺構編－』鎌倉市教育委員会
- 藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 馬淵和雄 1989「今小路西遺跡 (No.201) 扇ガ谷一丁目 131 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5』鎌倉市教育委員会
- 1990「若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 雪ノ下一丁目 210 番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6』鎌倉市教育委員会
- 1992「中世鎌倉における谷戸開発のある側面」『鎌倉』第 69 号 鎌倉文化研究会
- 2002「覚園寺旧境内遺跡 (No.435) 二階堂字会下 351 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 28 第 1 分冊』鎌倉市教育委員会
- 2004「中世史学としての土器研究―モノ・空間認識・文化伝播―」『中世土器研究の今日的課題―土器編年と中世史研究―』中世土器の基礎研究 XVIII
- 山本信夫ほか 2000「大宰府条坊跡 X V―陶磁器分類―」『大宰府市の文化財』第 49 集 大宰府市教育委員会



◀ a. 調査地点付近
(南東から)
左手が調査地点で道路の
続く谷奥に覚園寺が所在
する。

▼ b. 調査地点西側丘陵裾部 (東から)

谷を挟む西側丘陵裾部は切岸され、急峻な岩盤斜面を形成する。



◀ c. 調査地点近景
(南から)
調査地点の所在する薬師堂ヶ谷の
中程で谷の中央を南北に走る道路
と、脇の平子川である。



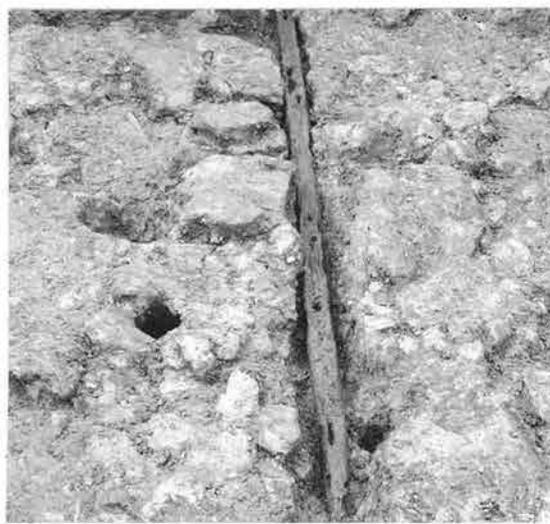
◀ b. II区第1面全景(北から)



▶ a. I区第1面全景(北から)



▲ c. 建物1内遺物出土状況



▲ d. I区角材検出土状況



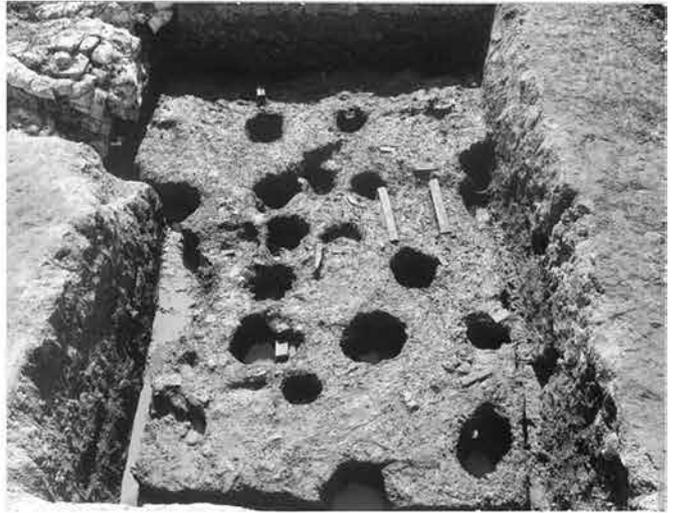
▲ e. 土坑1遺物出土状況



▲ f. P3・4上遺物出土状況



▲ a. I区第2面全景(北から)

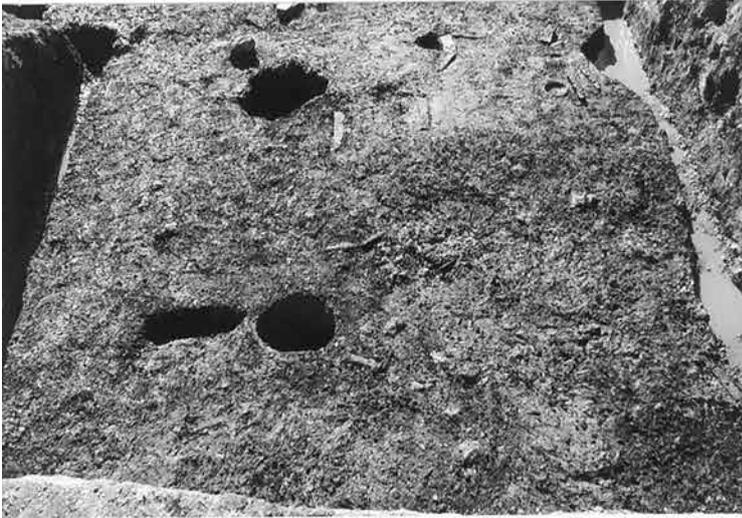


▲ b. II区第2面全景(北から)

▼ c. 第2面建物2、溝1(西から)



▼ d. I区第1面下～第2面上炭化物層



▼ f. 第2面 P4 角柱と礎板



▼ e. 第2面建物2 - P11 角柱と礎板



図版4



◀ a. I区第3面全景（北から）



▲ b. II区第3面全景（北から）



▲ c. II区第3面北側域（東から）



▲ d. II区第3面中央域



▲ f. 漆器碗出土状況



▲ e. P6 礎板出土状況



▲ b. II区第4面全景（北から）



▲ a. I区第4面全景（北から）



▲ d. 建物1 板壁検出状況



▲ c. II区第4面南側（東から）



▲ f. 建物1 遺物出土状況



▲ e. 土坑1 遺物出土状況



◀ b. II区第5面全景(北から)



▶ a. I区第5面全景(北から)



▲ e. 土坑2



▲ c. 第5面南側域(東から)



▲ f. 第5面出土銅製品



▲ d. 第5面中央(西から)

▶ a. 第2面土坑2



▲ b. 第2面土坑2 堆積土層



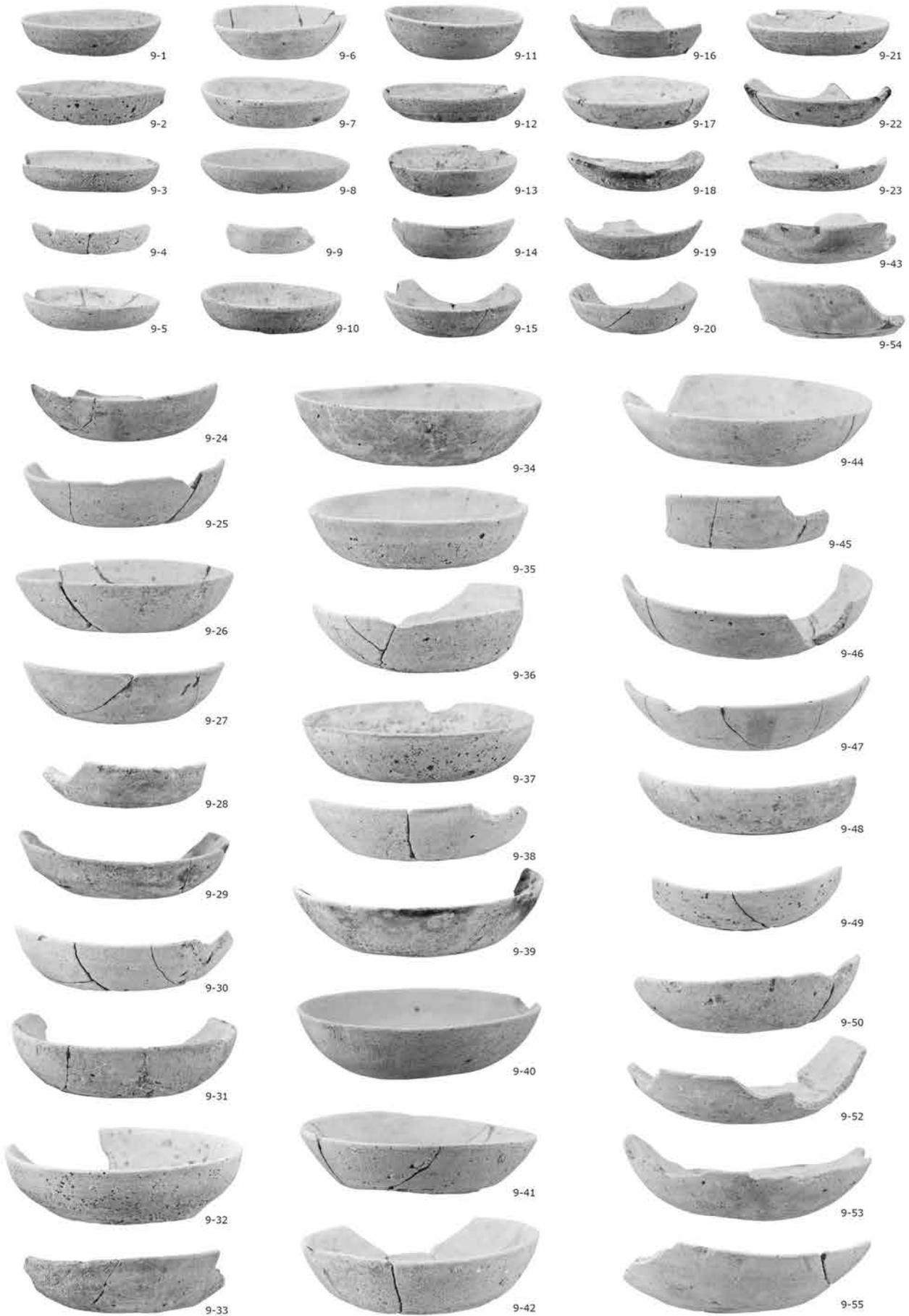
▲ d. 調査区中央堆積土層



▲ c. 第5面下トレンチ

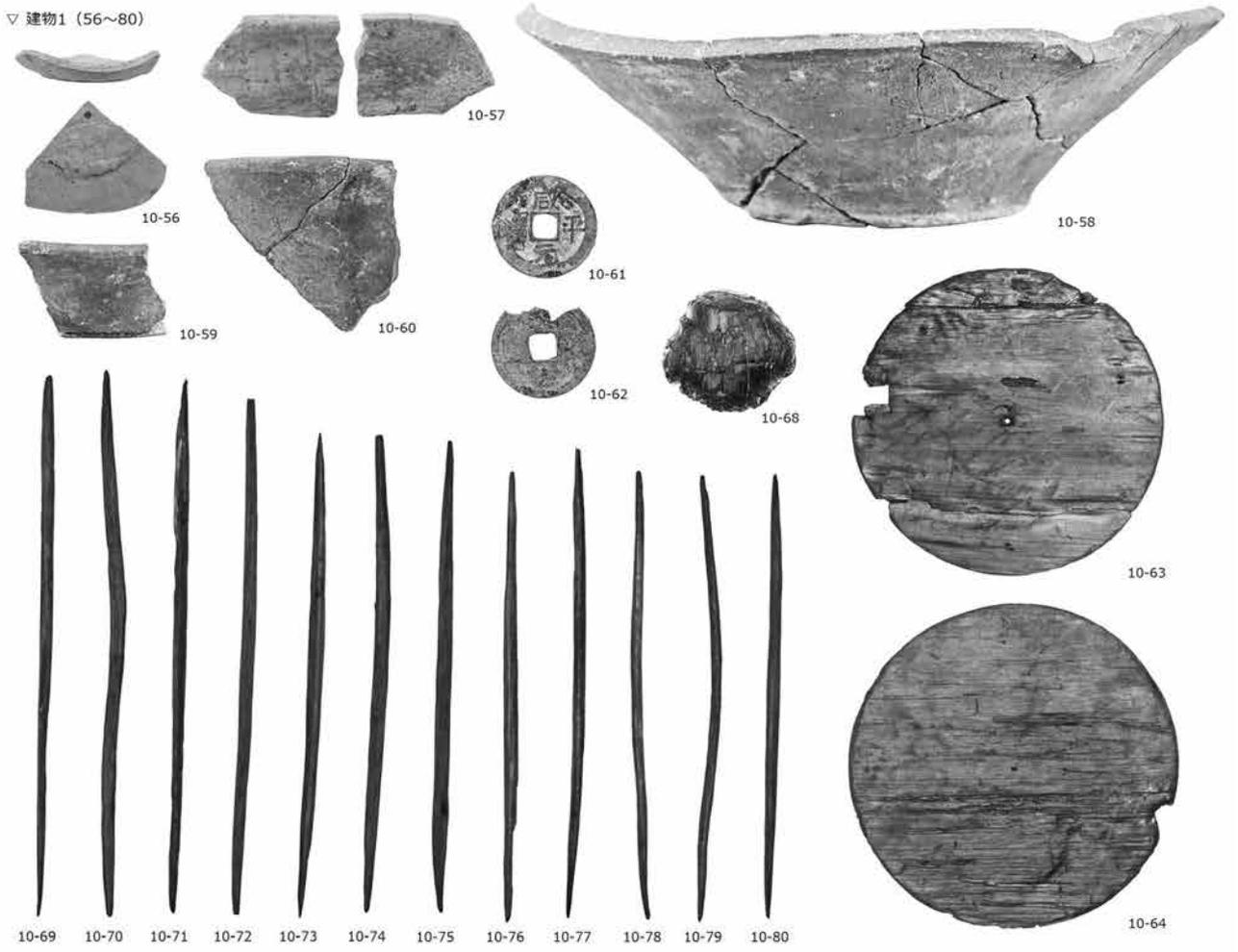
図版8

▽ 建物1 (1~55)

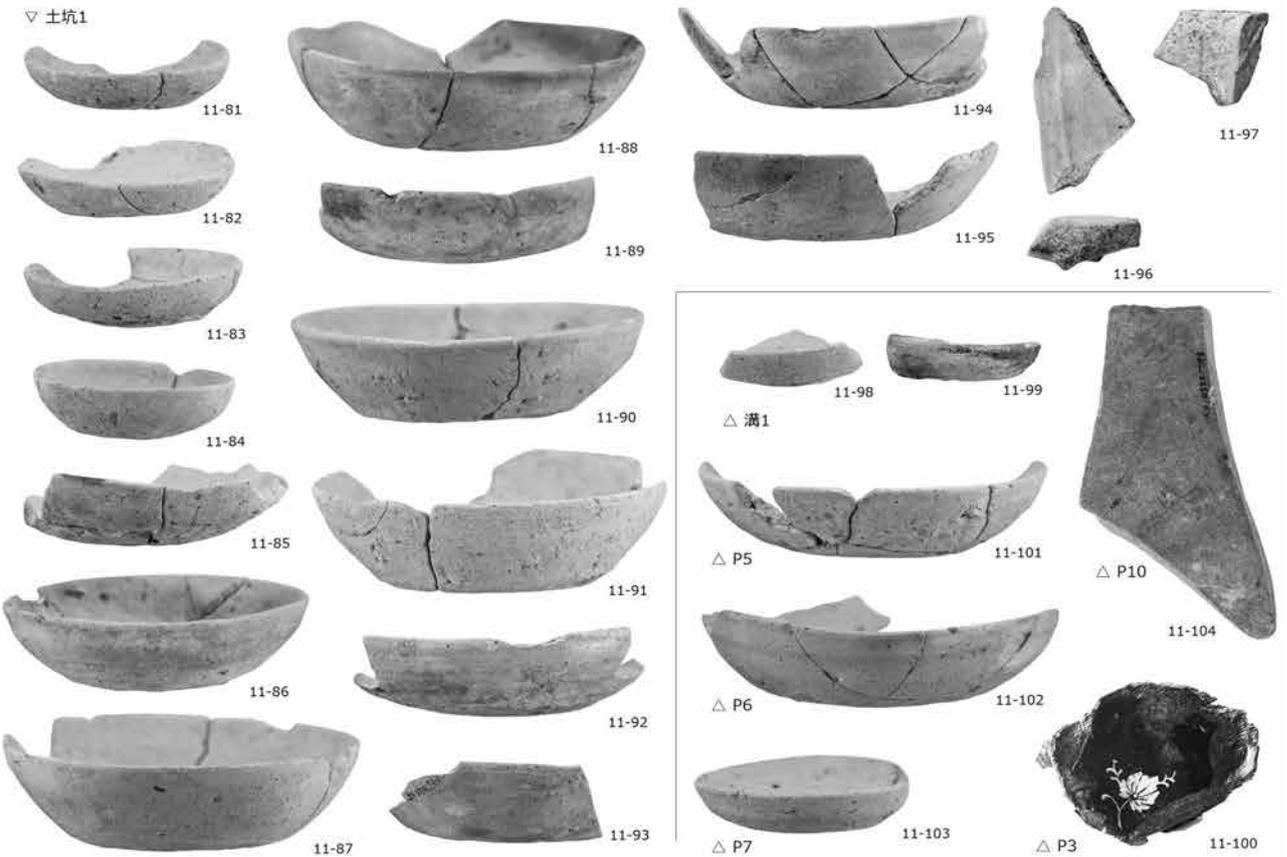


第1面遺構出土遺物(1)

▽ 建物1 (56~80)



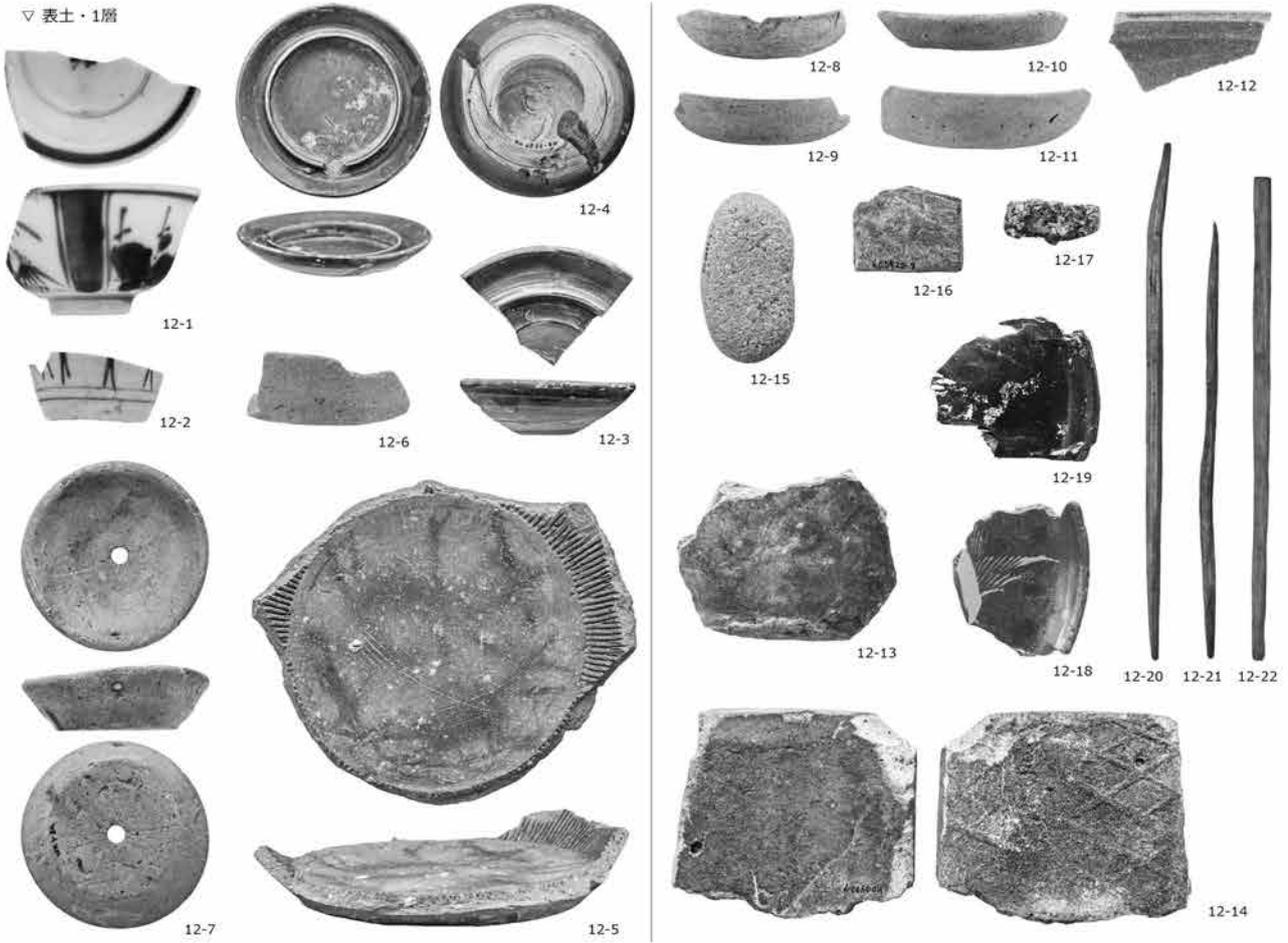
▽ 土坑1



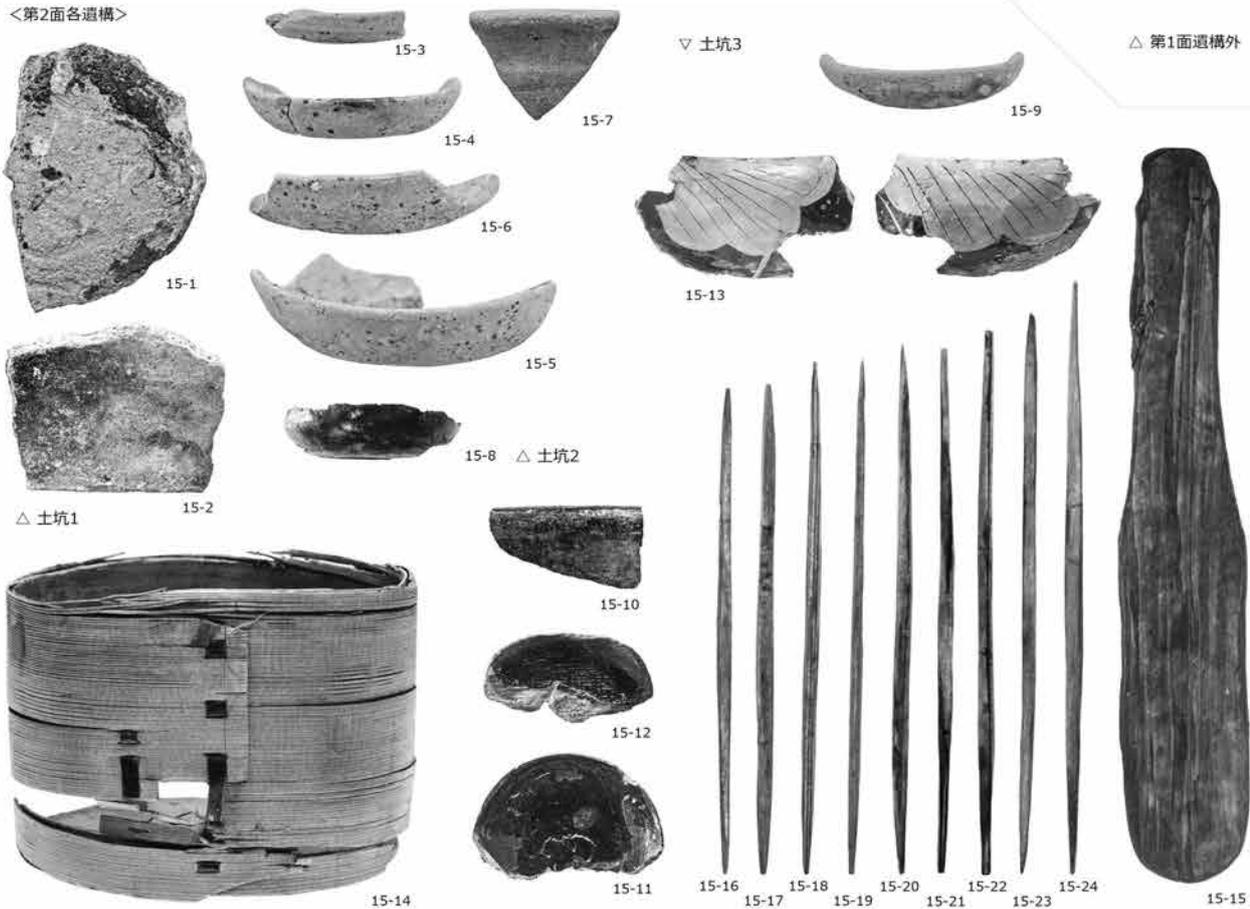
第1面遺構出土遺物(2)

图版 10

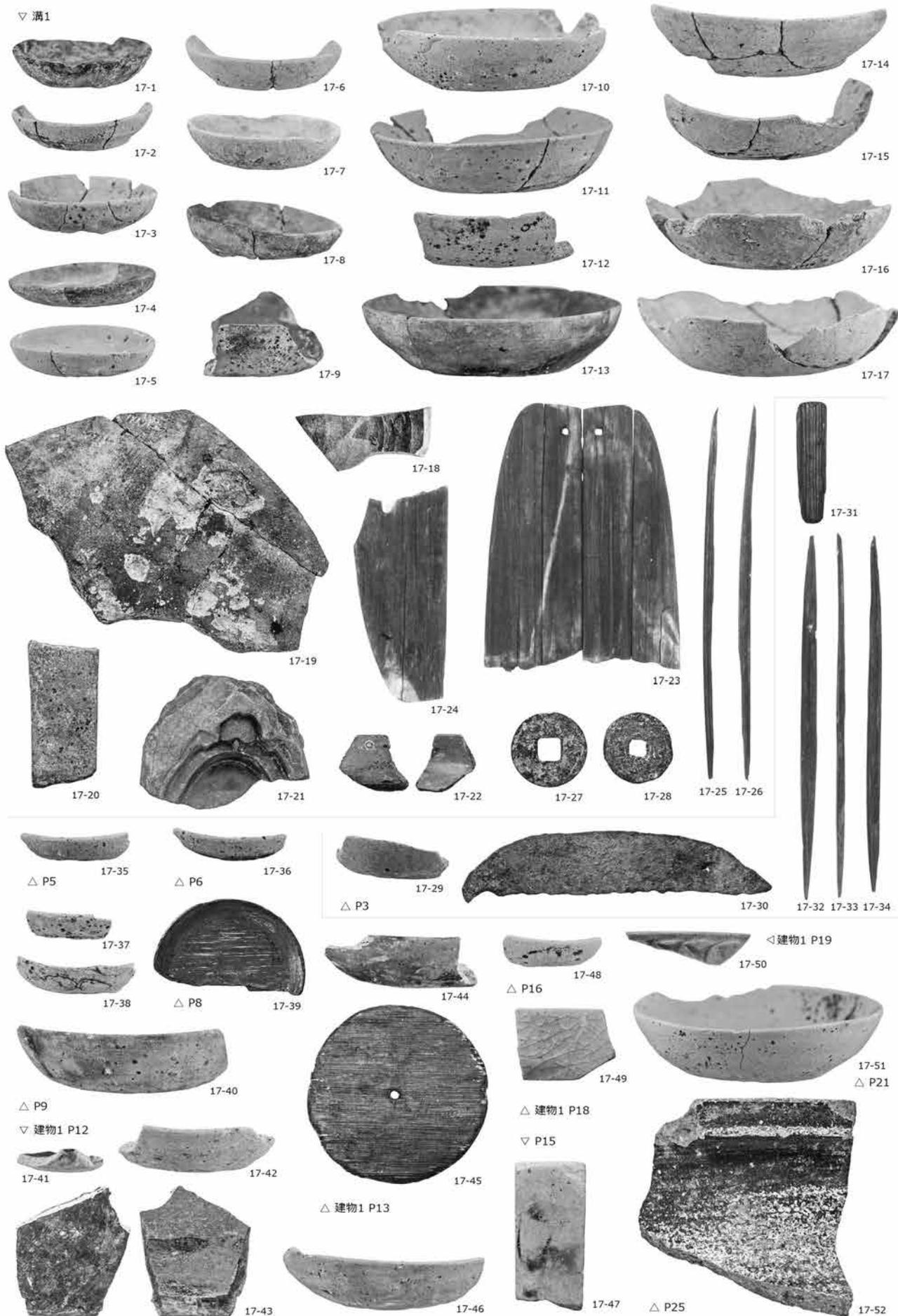
▽ 表土・1層



<第2面各遺構>



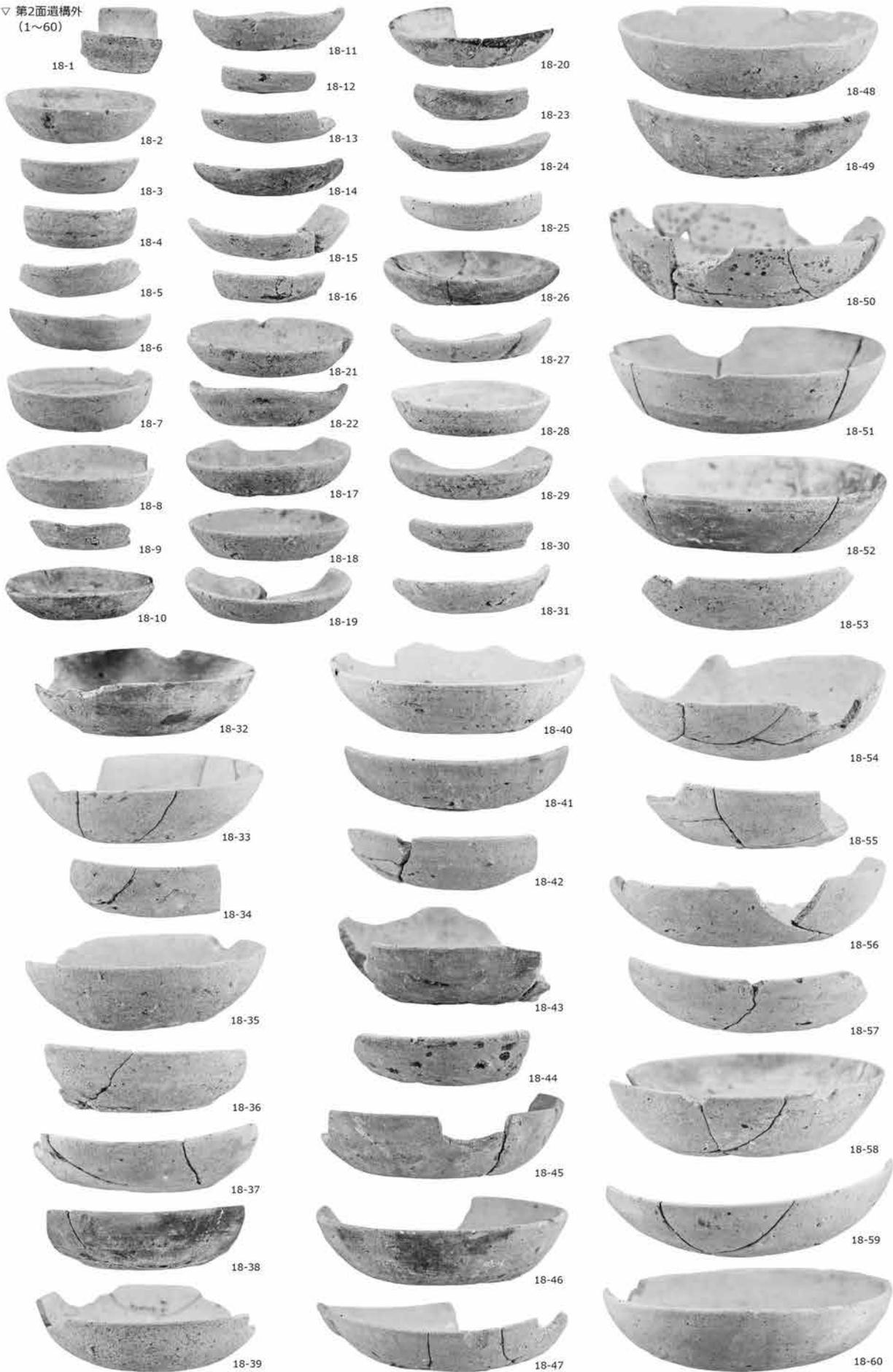
表土・第1面遺構外・第2面遺構出土遺物(1)



第2面遺構出土遺物(2)

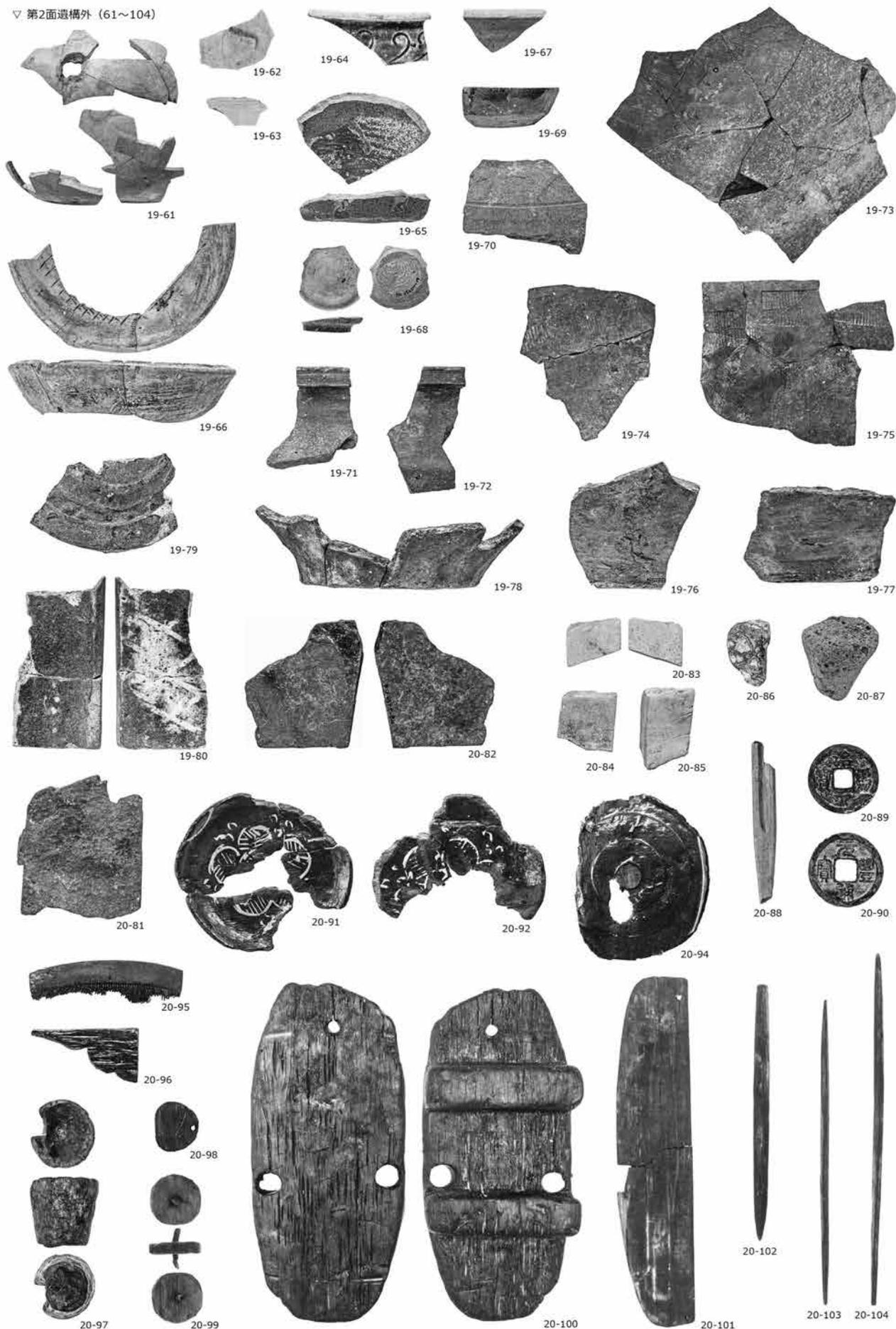
图版 12

▽ 第2面遺構外
(1~60)

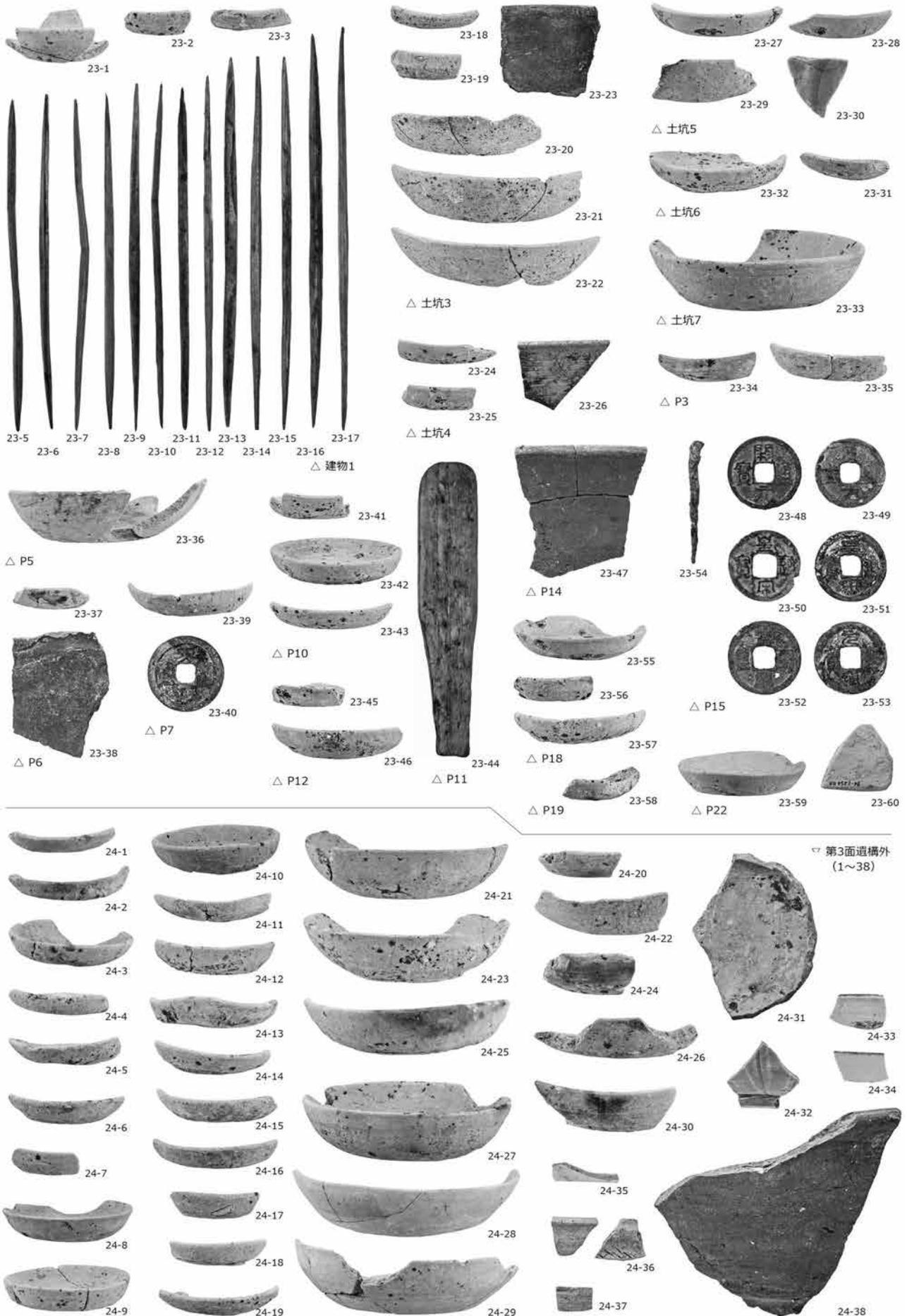


第2面遺構外出土遺物 (1)

▽ 第2面遺構外 (61~104)

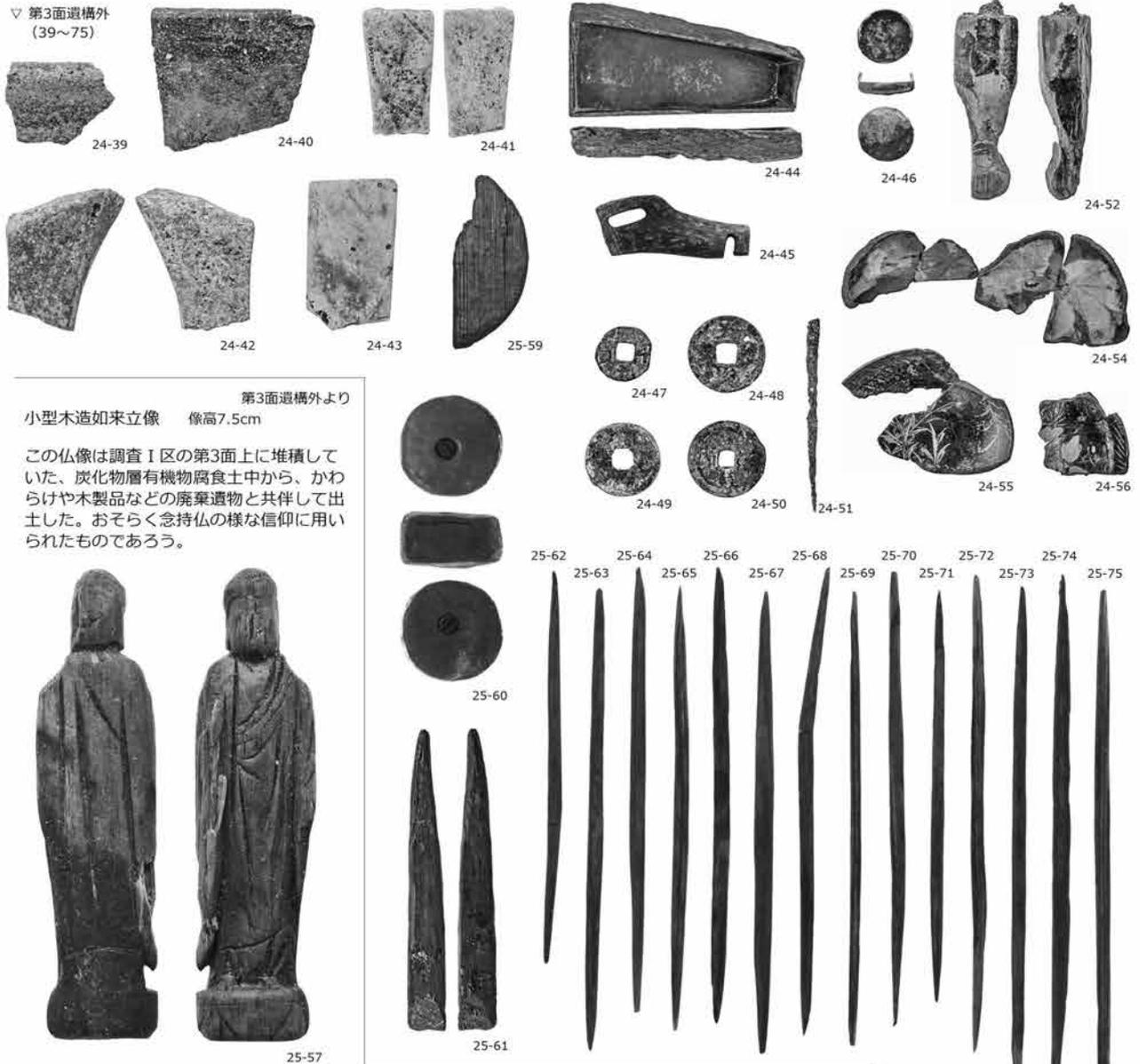


第 2 面遺構外出土遺物 (2)



第3面遺構・遺構外出土遺物(1)

▽ 第3面遺構外
(39~75)



第3面遺構外より
小型木造如来立像 像高7.5cm

この仏像は調査 I 区の第3面上に堆積していた、炭化物層有機物腐食土中から、かわらけや木製品などの廃棄遺物と共伴して出土した。おそらく念持仏の様な信仰に用いられたものであろう。



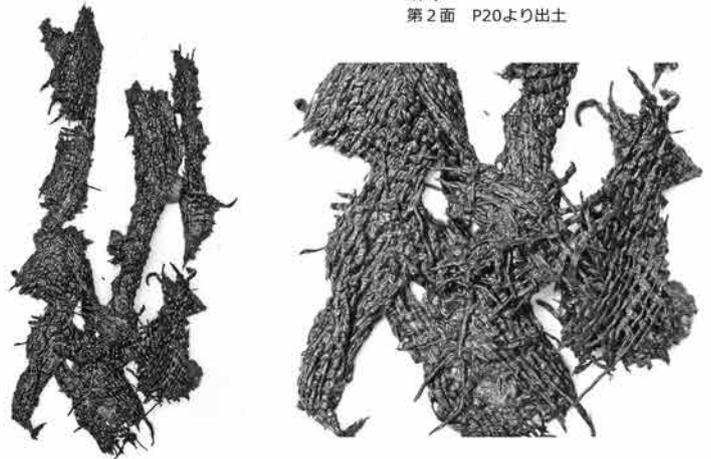
第3面遺構外より

木製 扇子の骨 幅15mm 厚さ4mm

薄板の細長い短冊形で、尖端に向けてやや細く削り成形し基部に穿けた孔に木製目針をさし込み固定したもの。骨3枚の片面に判読不明の墨書がみられる。



麻布
第2面 P20より出土



第3面遺構外出土遺物 (2)

図版 16

銅製 懸仏鏡板 直径8.6cm

図版5-eのように第4面土坑1からかわらけと一緒に出土した。上部の両側二ヶ所に御正体を板壁などへ釘で打ち付ける円孔があるかわらけと共に、次項別途掲載あり。



28-18

▽ 銅製懸仏と共に出土したかわらけ



28-5



28-6



28-7



28-8

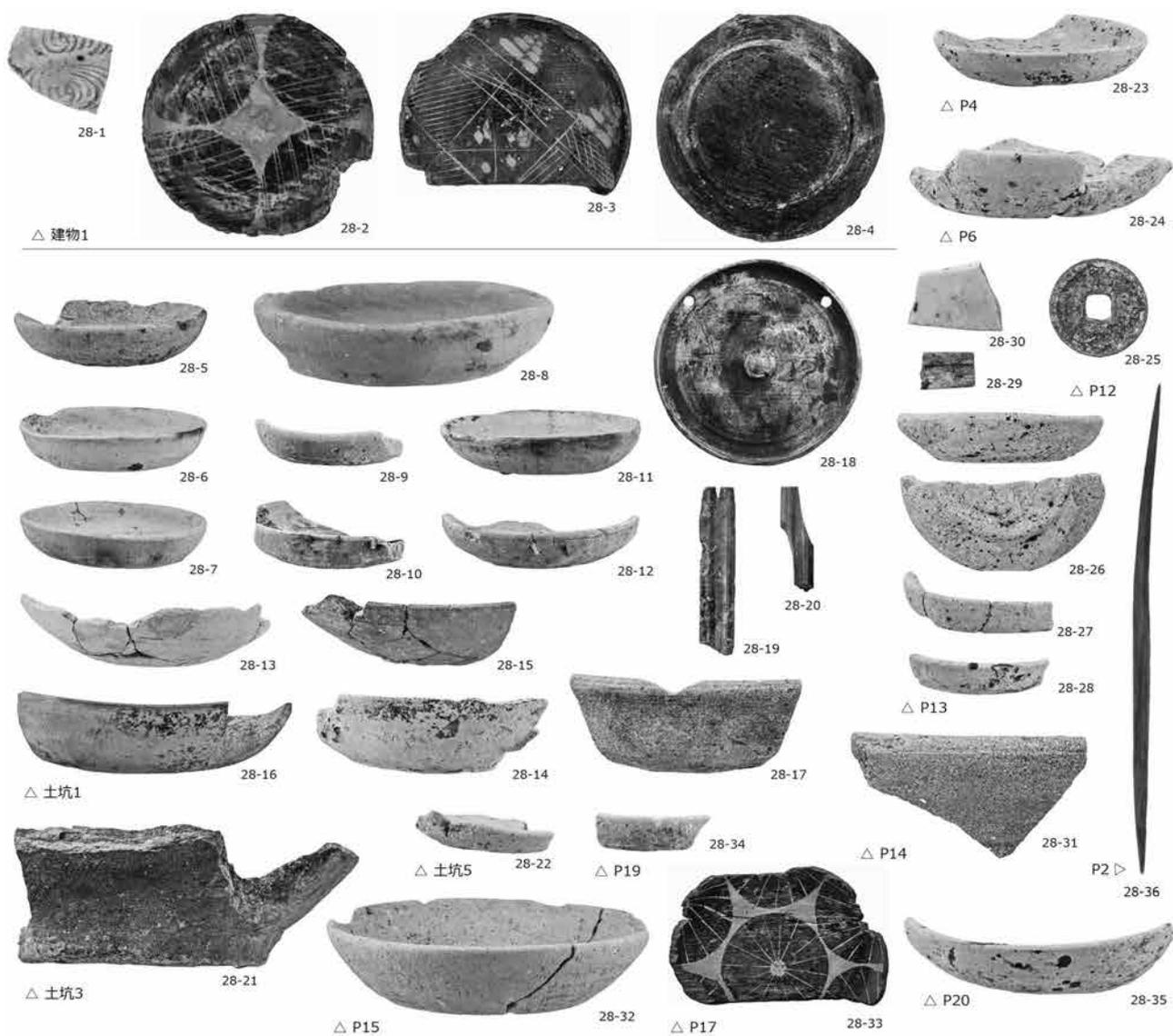


28-11

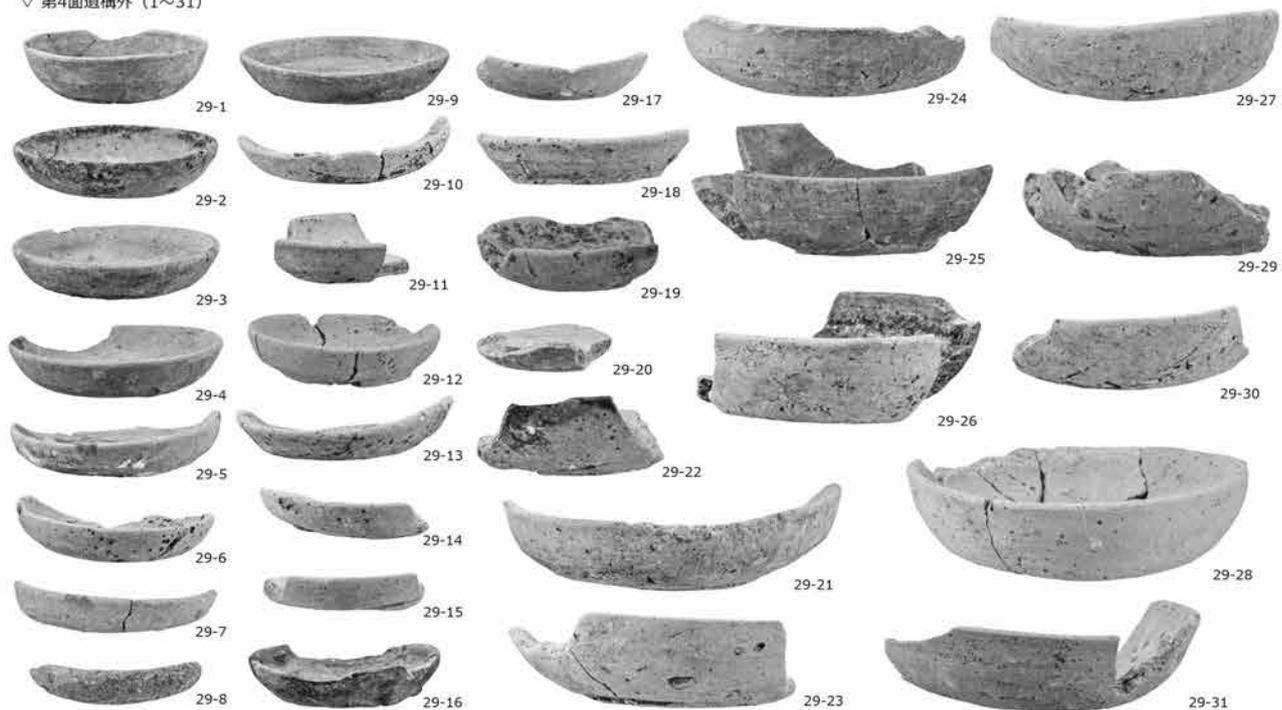


28-16

第4面遺構出土遺物

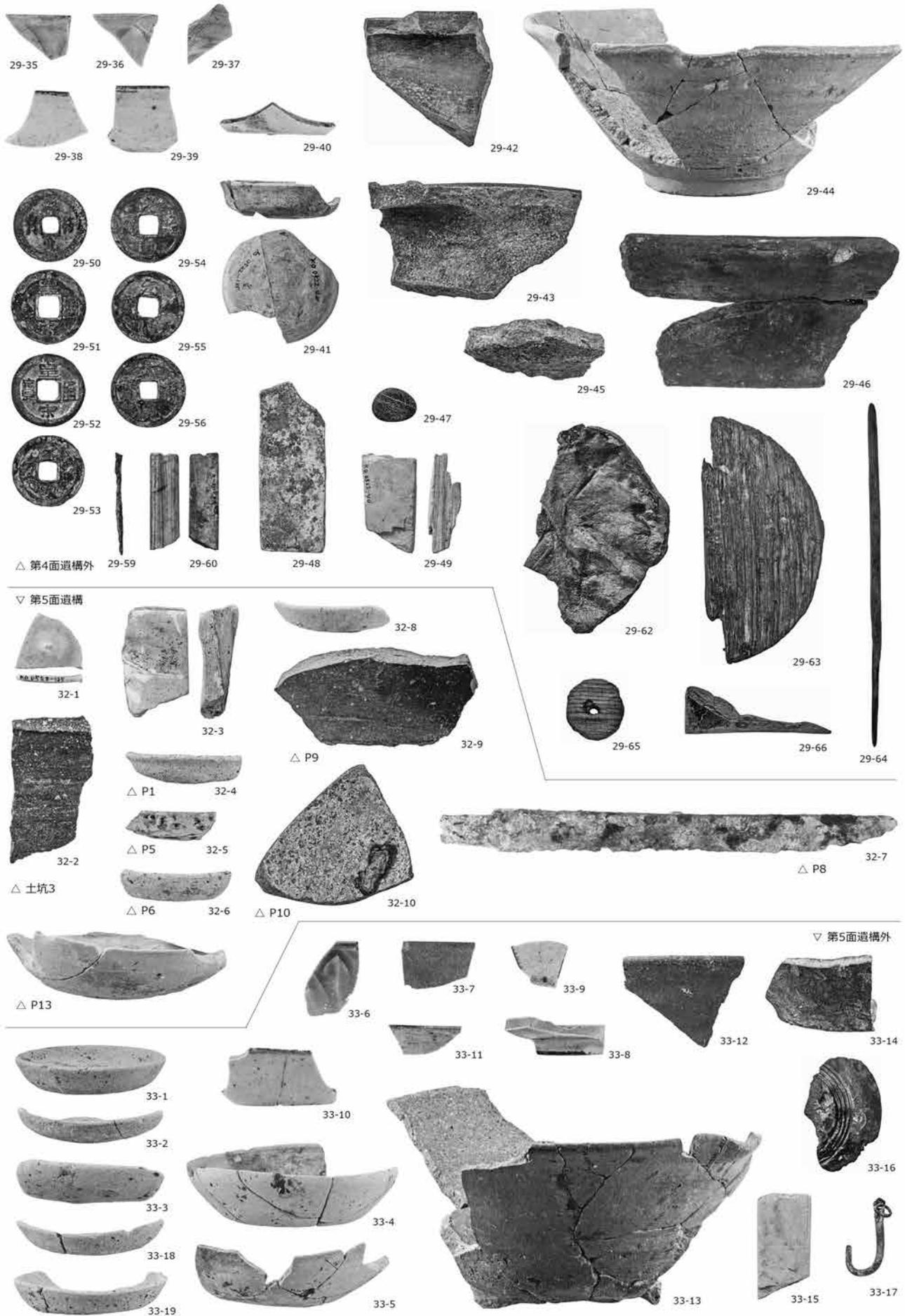


▽ 第4面遺構外 (1~31)



第4面遺構・遺構外出土遺物 (1)

图版 18



第 4 面遺構外出土遺物 (2) · 第 5 面遺構 · 遺構外出土遺物